

2018 年度

文部科学省グローバル化に対応した外国語教育推進事業

社会に開かれたロシア語教育の確立

地域貢献のためのロシア語学習

カリキュラム・マネージメントと学習評価

高大接続

事業成果最終報告書

2019 年 3 月

平成 30 年度

文部科学省グローバル化に対応した外国語教育推進事業
事業成果最終報告書

社会に開かれたロシア語教育の確立：

地域貢献のためのロシア語学習

カリキュラム・マネジメントと学習評価

高大接続

平成 30 年（2019 年）3 月

目次

プロジェクト概要

「社会に開かれた」ロシア語教育の確立

— ことばの学びにおける主体性、対話性と思 考 — 横井 幸子 1

第1部 各研究拠点校の取り組み

関東国際高等学校

「東京オリンピック・パラリンピックに向けた言語運用」

— 関東国際高等学校・2018 年取り組み — 永沼 栄理子 19

北海道札幌丘珠高等学校

グローバル化に対応した外国語教育推進事業（ロシア語）における取り組み
. 遠藤 雅公 27

北海道札幌国際情報高等学校

北海道札幌国際情報高校における取り組みと成果
. 依田 幸子 41

北海道旭川南高等学校

日露交流学習の試み「友だちになろう！」

— 北海道旭川南高等学校 x サントペテルブルグ第 83 番学校 —
. 鈴木 桃子 51

第2部 今後の展望

ロシア語人材の育成を見据えた高大連携

— 関東国際高等学校の取り組みを通して — 佐山 豪太 59

平成 30 年度の取り組みを振り返って 高橋 健一郎 67

ロシア語の授業で文化をどのように扱うか

. 小田桐 奈美 71

高校と大学をつなぐとは

— 公開講義@北海道札幌国際情報高校の記録より — 林田 理恵 83

第3部 資料

社会に開かれたロシア語教育の確立：2018 年度の取り組み

研究主任 横井 幸子

I. はじめに

2018 年 3 月 30 日、新しい高等学校の学習指導要領が公布され、新たに「社会に開かれた教育課程」という理念が掲げられた（文部科学省 2015a; 2015b; 2015c; 2018a; 2018b）。これまでのように「閉じられた」学校・教室という空間で教師から教えられるまま受動的に知識や技能を身につけ経験を積んでも、急速に進むグローバル化や情報技術の革新等によって多様に変化を遂げる現代社会では、それを生かすことが益々難しくなっている。本改訂では、このような社会の多様性や急激な変化に子どもたちが「積極的に向き合い」（文部科学省 2018b: 1）、「学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、... 生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう」（文部科学省 2018b: 3）、家庭や地域と連携・協働することで、より「主体的・対話的で深い学び」（文部科学省 2018b: 3-4）を実現することを目標としている。

日本の高校のロシア語教育には、このような「社会に開かれた」教育を実施する土壌が既にできあがっている。例えば、ロシア語科目を開講している高校の多くは、ロシアとの地域間交流に根ざした第 2 外国語教育として地元主導で開講され存続してきたという経緯があり、ロシアの学校と交流を継続して実施していたり、ロシア語ネイティブの教員や ALT を配置したりしている（e.g., 臼山 2000; 2003）。さらに、指針となる学習指導要領にも、ロシア語の場合は「英語に関する各科目の目標及び内容などに準じて指導を行う」（文部科学省 2018a: 239）と一言書き添えられているだけで実質的には具体的な政策が存在しないため、英語のようにカリキュラムや学習内容、指導方法に至るまで細かく定められて制約を受けることなく、各学校が比較的自由にそれぞれの地域の特色を生かした語学教育を追求することができるのである。

本報告では、上記のような新学習指導要領の理念をふまえながら今年度の取り組みを振り返り、「社会に開かれた」ロシア語教育のあり方を考察する。

II. 事業内容

上述の通り、高校のロシア語教育には、外国語教育政策上周縁化されてきたが故に中央集権的教育体制にありながらもカリキュラム、学習内容、指導方法等に関して「自由」がそれなりに与えられてきたが、だからこそ抱える問題も当然ながら存在する。高校ではロシア語の授業は「細々と」（林田 2018: 30）開講されているのが現状で、上述の通り、現場の教師たちは学習指導要領を含め、具体的な指針や指導、支援が殆どないまま「孤立状態」（林田 2014: 14; 臼山 2000: 190 も参照）に置かれており、カリキュラム作成、教員の確保、高校生に適した教科書の選択や教材開発など全てを任され、「孤軍奮闘」（横井 2015: 53）してきた。このような状況を受けて、ロシア語教育では主に大学のロシア語教員が中心となり、科学研究費プロジェクトの枠内で独自に高校のロシア語教育の現状調査や教員支援に取り組んできた（e.g., 林田理恵, 基盤研究 B, 課題 No. 23320114, 2011-2016; 横井幸子, 基盤研究 C, 課題 No. 25370715, 2013-2016）。さらに、平成 29 年度には文部科学省から委託を受け、これまで各校で培ってきた地元とロシアと

のつながりをより意識した、「地域に貢献するロシア語人材育成」を目標とする外国語教育推進事業が始動し、拠点校4校全てにおいて、地域やロシアとの交流を軸としたプロジェクト型授業の指導案と評価法を開発し、実施することができた(林田他 2018)。一方で、主に時間的制約などの事情でいくつかの課題も残された。まず、実施される地域やロシアとの交流が年間カリキュラムにおいていわば「課外活動」として位置付けられがちで、結果的にその場限りの交流イベントになってしまいがちであった。次に、新学習指導要領の目標や CEFR で示されている言語活動の5領域における各目標が必ずしも明確に授業内容や評価方法に反映されているわけではなかった。最後に、本プロジェクトにおける高大関係者による継続的な協働作業を通じてさらに連携が取れるようにはなったものの、具体的な高大接続や入試制度改革への道筋を検討するまでには至らなかった。これらの課題を踏まえ、平成30年度は研究課題を「社会に開かれたロシア語教育の確立：地域貢献のためのロシア語学習、カリキュラム・マネージメントと学習評価、高大接続」とし、研究目標を下記の通り設定した：

- 1) 地域貢献をより明確に意識したロシア語教育を実践する。「地域貢献」を明確に意識して教室内外でのロシア語学習経験を具体的にデザインし、実施することで、生徒たちは実際にロシア語を使い学んで自ら社会とのつながりを構築し、その過程でロシア語を学ぶ意義を見出していくことができる。このようにして、「主体的・対話的で深い学び」を実現することができる。
- 2) 新学習指導要領、CEFR に準拠し、「社会に開かれた」ロシア語教育のための具体的な学習到達度目標の設定、評価ツールを開発する。「社会に開かれた」ロシア語教育のための具体的な学習評価の充実を図ることで、より新学習指導要領と整合性のとれた学習評価ができるようになり、ロシア語教科としてのアカウンタビリティを担保することができる。
- 3) 地域貢献を明確な目的に掲げて活動してきたロシア語学習者の学習成果が大学入学選抜において総括的に評価され、進学後もさらに継続してロシア語能力を伸ばし活躍できるよう、高大接続のあり方や入試改革について具体的に検討する。地域に貢献するロシア語人材の育成は、高等学校3年間で完成する訳では決していない。高大接続を検討することで、より長期的な展望を持ってロシア語人材育成に取り組むことができる。

本事業でロシア語教育が目指してきた「地域に貢献する」ロシア語人材の育成は、まさに新学習指導要領が標榜するところの「社会に開かれた教育課程」と合致するものであり、今年度は特にカリキュラム・マネージメントと学習評価の面で細部まで整合性のとれた教育課程が整備することを目標とした。さらに、このような人材育成が高等学校で終わることなく大学でも継続できるよう、実際に講義等を実施し具体的な高大接続のあり方を検討した。

Ⅱ-1. 指導体制

今年度は、ロシア語を開講している全国約30校の内3つの高等学校が研究拠点校として参画し、下記の実施体制で事業運営した。

表 1. 平成 30 年度グローバル化に対応した外国語教育推進事業研究拠点校

北海道札幌国際情報高等学校	校長名	榎本 敏生
北海道札幌丘珠高等学校	校長名	林 祐司
関東国際高等学校	校長名	James Harman

表 2. 研究担当者

職 名	氏 名	担当学年及び対象言語
大阪大学大学院准教授（研究主任）	横井 幸子	
大阪大学大学院教授	林田 理恵	
北海道札幌国際情報高等学校教諭	依田 幸子	1-3 年, 国語, 国際交流部
北海道札幌丘珠高等学校教諭	遠藤 雅公	1-3 年, ロシア語／英語
関東国際高等学校教諭	永沼 栄理子	1-3 年, ロシア語

表 3. 運営指導委員

氏 名	所 属	職 名	備考（専門分野等）
高橋 健一郎	札幌大学	教授	日露対照言語学
小田桐 奈美	関西大学	准教授	社会言語学, ロシア語教育, 中央アジア地域研究
佐山 豪太	上智大学	嘱託教員	応用言語学

平成 30 年度参加した拠点校は、ロシア語が英語よりも時間数の多い専攻語科目として開講されている学校（週 6 時間；1 単位時間＝50 分）から典型的な第 2 外国語科目として開講されている学校（2 年生からあるいは 3 年生から週 2 時間）まであり、カリキュラムにおけるロシア語科目の位置付けも様々ではない。本事業では、まず授業時間数等各校の学習条件を考慮して現実的な語学能力到達目標を設定し、実行可能なカリキュラム・指導案の作成と実施を目指した。

Ⅱ-2. 各研究拠点校における取り組み

平成 30 年度は、まず新学習指導要領に掲げられている理念、学習目標・内容と評価基準について理解を深め、それらをどのようにロシア語教育に文脈化できるのか検討した。次に、各研究拠点校においていかに「社会に開かれた」ロシア語の授業において生徒の「主体的、対話的、深い学び」が実現できるか、議論を重ねた。また、授業改善・指導能力向上を目的とした現職教員研修の機会も 2 度（2018 年 10 月と 12 月）設けた。以下に、各拠点校における取り組みについての概要を述べる。詳しくは、本書に掲載されている研究担当者各氏の報告（永沼氏, pp. 17-23, 遠藤氏, pp. 25-37, 依田氏, pp. 39-46）を参照されたい。

【拠点校 1: 関東国際高等学校】 地域貢献を明確に目的とするロシア語学習

2020 年東京オリンピック・パラリンピック開催時に、拠点校関東国際高等学校の所在地である渋谷区内にある小学校から大学までの教育機関が連携してロシア語ボランティア活動を実施する計画が始動している。平成 30 年度は、関東国際高校が中心となって、「中学生～大学生・ロシア人留学生の交流会@渋谷区」を計画・実施した。このイベントでは、関東国際高校の生徒たちが原宿外苑中学校の生徒たちにロシア語のミニレッスンをを行い、ロシア語での簡単な挨拶と自己紹介、キリール文字の読み方、書き方を教えるという活動を行った。キリール文字の読み書きを学ぶ活動で中学生たちが高校生、大学生たちに教えてもらいながらキリール文字を使って作成したポスターは、後日原宿外苑中学校の文化祭で披露された。

【拠点校 2: 札幌丘珠高等学校】 新学習指導要領に沿った「社会に開かれた」ロシア語教育のためのカリキュラム・マネジメント

新学習指導要領で示されている、資質・能力の三つの柱:「何を理解している、何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」を踏まえ、日露交流を軸としたプロジェクト型授業を計画・実施した。具体的には、平成 30 年度は 10 月に語学授業における ICT 活用に関する研修を受けた後、実際に iPad を活用して札幌市と姉妹都市提携を結んでいるロシア連邦ノヴォシビルスク市のシベリア北海道文化センターで日本語を学んでいるロシア人生徒たちと交流するプロジェクト型授業を計画・実施した。日本側は日本文化に関するクイズ動画をロシア語で、ロシア側はロシアに関するクイズ動画を日本語でそれぞれ作成し、SMS で共有した。

【拠点校 3: 札幌国際情報高校】 高大接続、入試制度改革に関する議論・先行研究の精査・分析

他教科ですでに実施されている高大接続の実態情報を収集・整理し、高大接続や入試制度改革に関する国内外の議論・先行研究を精査・分析し、高大接続を展望した共同プログラム開発を検討した。具体的には、本事業に参加している大学教員が札幌国際情報高校に出向き、AO 入試の要件となり得る CEFR 準拠外部検定試験対策講座 (9 月)、リサーチプロジェクト講義 (9 月)、イングリッシュキャンプにおけるポスター発表指導 (10 月)、そして AP を射程した公開講義 (11 月) を実施した。

本事業全体の取り組み及び各研究拠点校が担当した個別の取り組みは、以下の年間事業計画に従って進めた。

表 4. 年間事業の流れ

月	研究拠点の取組
4 月	・研究開始準備
5 月	・研究開始準備
6 月	・研究開始準備

7月	・7月13日（金）第1回会合 於 北海道札幌国際情報高校 外国語教育の方向性を共有し、地域のロシア語に対する個別のニーズ分析を行い、拠点校の特性を踏まえた研究課題を設定。 ・拠点校 1, 2 第1回会合で決定した課題に基づき、学習指導案・評価法の原案を作成 ・拠点校 3 高大接続、入試制度改革に関する国内外の議論・先行研究を精査・分析
8月	・拠点校 1, 2 グループウェアを通じて指導案や評価法に基づくロシア語授業活動に関して意見交換 ・拠点校 3 高大接続の取組として、ロシアをテーマとしたリサーチプロジェクトを始動.大阪大学研究担当者がアカデミックライティングを指導.
9月	・拠点校 1 ロシア人留学生を招いて同区内の中～大学の交流会を計画.授業と2における指導案や評価法に基づくロシア語授業活動に関して意見交換（グループウェアを通じて） ・拠点校 2 ICTを活用し、交流先のロシアの学校と互いにクイズビデオレターを作成する. ・拠点校 3 高大接続の取組として、大阪大学研究担当者が9月24日（月）にCEFRに準拠したロシア語能力検定試験の1日講座を実施.翌25日（火）、同担当者が英語の授業で研究プロジェクトについての授業を実施.
10月	・拠点校 1 10月13日（土）に中高大ロシア人留学生交流会を実施 ・拠点校 2 札幌大学出張講義によるロシア文化入門講義とロシア語指導.大阪大学大学院生が食文化についての授業を3回実施. 交流先のロシアの学校と互いにクイズビデオレターを作成する.送る際にロシア語で一言添え、WhatsAppで送る.教員の指導により、生徒が簡単なロシア語翻訳を動画に入れてロシア人向けクイズを完成. ・拠点校 3 10月10日（水）English Campにおける生徒たちによるロシアに関するプレゼンテーション大会に参加.内容について助言する.阪大レクチャー「ことばと文化の接続」を実施.高校生向けのTQYの教材を提供. ・10月13日（土）第2回会合 於 大阪大学 研究担当者が学習指導案・評価法について中間報告し、研究担当者間で意見交換.また、高大接続、入試制度改革に関する国内外の議論・先行研究や分析結果を研究組織内で情報共有する. ・10月14日（日）教師研修実施 於 関西大学 専門家を招聘し、外国語学習者の動機づけに関する講演と授業におけるiPadの活用法に関するワークショップを開催
11月	各校、今年度の取組内容を振り返るとともに、最終発表会に向けて準備
12月	・12月1日（土）第3回会合 これまでの取組について報告し、意見交換.また、公開研究授業の実施について詳細を検討.さらに、継続して活動する場合の今後の方向性についても協議. ・12月2日（日）外国語教育の専門家を招聘し、講演会を上智大学にて開催.その後、最終発表会を実施.

1 月	・拠点学校 1 1 月 28 日（月）に公開研究授業を実施.授業後、合評会・意見交換会を実施
	・拠点学校 2 1 月 22 日（火）に公開研究授業を実施.授業後、合評会・意見交換会を実施
2 月	・最終成果報告集への原稿執筆及び本事業で作成した教材や資料の整理
3 月	・3 月 10 日（日）上智大学で開催されるシンポジウム（日本外国語教育推進機構主催）にて報告 ・最終成果報告集を刊行

Ⅲ. 成果と考察

今年度の本事業全体の成果として、「社会に開かれた」ロシア語教育を実施するにあたり、① ロシア語の本質的な学びを理解し、具体的で明確な目的を持ったことば活動を展開していくことで「主体的、対話的で深い学び」をもたらすことができること、② CEFR 等の客観的熟達度基準は少なくとも CEFR 初級・基礎レベルでは導入可能であり、学習指導要領との整合性を取ることができること、さらに③ 日露交流学習を日本のロシア語学習者とロシアの日本語学習者間で実施することで、より多言語・多文化への理解を促すことができることが明らかになった。以下、順を追って考察する。

Ⅲ-1. ロシア語の本質的な学び

プロジェクト型授業では、従来型の教室内で完結する教科書中心の授業とは異なり、ロシア語習得そのものを目的とはしておらず、何か「より上位の活動」(A. A. Леонтьев 1974, 横井&林田 2013:57-59 も参照) を遂行するために必要となるロシア語を使ったことば活動が組み込まれる。つまり、プロジェクト型授業におけることばの学びとは、「より上位の活動」を遂行するために必要となるロシア語の知識と技能を、実際にロシア語を使う経験を重ねながら習得していく有機的な学習プロセスであり、ロシア語の文法項目や語彙を一つ一つ順番にブロックを積み上げるように構築していくような体系的なプロセスではない。したがって、プロジェクト型授業では、文法書をさらうようにロシア語体系全体を網羅できるとは限らない。またロシア語を用いることと必ずしも直結しない活動が含まれるため、ロシア語学習時間が十分に取れないのではないかと危惧する教師もいるかもしれない。それでも尚、プロジェクト型学習が言語学習のアプローチとして高く評価されているのは、言語習得の本来的なあり方に沿った学習プロセスがプロジェクト型の授業の中で成立しうるからに他ならない。言語形式の習得にのみ集中するよりもコンテキストの中で学習した方が実際の言語習得には効果的であることは、第 2 言語習得研究においても 1970 年代に既の実証されており (e.g., Savignon, 1972), 単なるパターンプラクティスや暗記ではなく、現実の具体的なコンテキストの中で実際にロシア語を使い、社会とつながっていくことで、より「深い学び」がもたらされるのである。

今年度の本事業の取り組みの大きな成果の一つとして挙げられるのは、日露交流を軸としたプロジェクト型授業におけるロシア語を使う目的となる「より上位の活動」について、単に「ロシア人と交流するため」と即答するのではなく、個々のことば活動の目的について本質的に問いかけ、計画・実践した点である。例えば、「自己紹介をする」ということば活動は、「互いに

知り合う」というより上位の活動があつてこそ意味をなすが、互いに単に名乗っただけで本当に知り合いになったと言えるだろうか？教師から自己紹介をするように促され、練習した通りに自己紹介のテキストを互いに「暗唱」し合つても知り合ったことにはならない。この一連の過程に生徒自身の主体性が発揮されていないからである。そして、主体性が欠けているところ、すなわち学ぶ事柄に対して自らとの何らかの関わりを見出して思考を働かせないところに深い学びは期待できない。それでは、具体的にどのようなことに留意する必要があるのだろうか。今年度の取り組みよりいくつか例を挙げながら考察したい。

今年度、札幌国際情報高校では、高大接続に加えてロシア連邦ノヴォシビルスク市第4番ギムナジウムで日本語を学んでいる生徒たちとオンラインでの交流学习も行われた。プログラムの大きな流れは以下の通りである：

- ① 自己紹介シート（名前、学年、ロシア語を学んだきっかけ、趣味、好きな食べ物、科目、スポーツ、アニメやゲーム、将来の夢など）を日露両言語で作成し、相手校に送付。
- ② 日露それぞれ1人ずつがペアになり、手紙で自己紹介をしあう。そして、それぞれのクラスでは学習言語を使って自分のペアの友達のことを口頭で紹介する。教師は紹介している様子を撮影し、その動画を相手校と共有する。
- ③ 「今日の朝ごはん」等テーマを決めて写真を撮ってSNSで共有し、日常の様子を紹介し合い、やりとりを続ける。
- ④ 各々自分のペアに小さな贈り物と学習言語で書いた手紙を用意し、教師がそれをまとめて送付する。手紙には、なぜその贈り物を選んだのか書く。
- ⑤ 贈り物を皆で開封する。その様子を撮影し、動画でお礼を伝える。

概して教師たちによる様々な「ちょっとした」工夫が、生徒たちの「主体的、対話的で深い学び」を引き出している様子が観察された。まず、基本的に1対1で交流させることにより、主体性を発揮しなければ交流が成立しないような状況ができていた。また、「自己紹介しあう」「好きなもの・ことを紹介する」といった個々のことば活動に、「より上位の活動」につながるような明確で具体的な目的があつたことが挙げられる。一連のやりとりを通じてやっとな文化も言葉も異なる相手のことを知り、思いやることができる。そしてそれができて初めて、適当と思われる贈り物を選び、自分の気持ちを手紙に表し、相手に贈ることができるのである。ロシア人との交流が何につながっていくのか、この学校では日露交流を通じて個人レベルで友好関係を築いていくという目的を「ロシア人と知り合い、友達になって贈り物をする」と読み変えて取り組んできたのかもしれない。そして、これらの活動一つ一つに生のロシア語が同時に経験されていく。まさに、ことばの持つ対話性、そして人は具体的なコンテキストの中で出来事に共鳴し経験を重ねてことばを獲得していくという言語習得の本来的なあり方が実現しているのである。

「主体的、対話的で深い学び」は、日露間だけでなく「ロシア」でつながった地域交流においても見られた。関東国際高校が中心になって実施された「中学生～大学生・ロシア人留学生の交流会@渋谷区」では、高校生や大学生に教えてもらいながら、習いたてのキリール文字を使ってポスターを完成させた中学生たち、そしてキリール文字を中学生たちに教えた高校生たち、それを助けた大学生たちやロシア人留学生たちが自ら果たしたそれぞれの役割において「主体的で対話的な学び」が起きていた。さらに、グループで作成したキリール文字のテキストをロシア人留学生たちに読んでもらった時、中学生たちが感じた「ロシア人に自分たちの書いたキリー

ル文字が伝わった」という達成感が予想以上に大きかったという。ロシア語を学び、実際に使っ
て少しでもロシア人と繋がった時に喜びや達成感が得られるのは、ことばが本質的に持つ相互
理解を目的とする対話性ゆえんであり、だからこそ「深い学び」がもたらされたのである。事実、
後日中学生 100 人にキリール文字をひらがなに直すテスト（3問）を実施したところ、予想を
はるかに超えて殆どの生徒が正解していたという。今年度キリール文字の読み書きを学んだの
で、来年度は簡単な道案内をロシア語でできるようになることを目指すという。このようにし
て、オリンピックに向けて地域をあげてロシアを応援するコミュニティが少しずつ整いつつあ
る。「地域貢献」を明確に意識して、個々のロシア語を使ったことばの経験を具体的に計画・実
施することで、生徒たちは実際にロシア語を使い学んで自ら社会とのつながりを構築し、その
過程でロシア語を学ぶ意義を見出していくことができる。このようにして、「主体的・対話的で
深い学び」を実現することができるのである。

Ⅲ-2. 客観的評価基準（CEFR, ТРКИ/ТРКИ）の適用について

現在の外国語教育では、CEFR に代表される客観的な熟達度基準が積極的に導入され、どのよ
うなアプローチや教授法を用いるにせよ、客観的に熟達度を示す説明責任能力も問われるよう
になってきており、新学習指導要領もヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework
of Reference for Languages = CEFR）を参考にして英語の学習目標を定めている。本事業では、日
露交流を軸としたプロジェクト型学習を各研究拠点校で展開してきたが、そのプログラムを経
た高校生達は、CEFR のどのレベルまで到達できるのか？ CEFR の基準をプロジェクト型授業
の学習内容に適用しうるのか？

ロシア語にも CEFR に準拠した「外国語としてのロシア語検定試験（Тест по русскому языку
как иностранному=ТРКИ/ТРКИ）」というロシア連邦教育科学省認定のロシア語学能力試験があ
る。表5が示す通り、ТРКИ/ТРКИは6つのロシア語能力の熟達度レベルが設定されており、試験
には語彙・文法、読解、聴解、作文、会話の5科目が課されている。

表 5. ТРКИ/ТРКИ の熟達度基準*

CEFR	ТРКИ	内容
A1	ТЭУ 初級レベル	日常生活や社会的文化領域のごく限られた場面で初歩的なやりとりを することができる 学習時間：100-120 学習時間** 最低必要語数：約 780 語
A2	ТБУ 基礎レベル	日常生活や文化、学業領域の限られた場面で最低限必要なやりとりを することができる 学習時間：初級レベル+180-200 学習時間** 最低必要語数：約 1300 語
B1	ТРКИ-1 第1レベル	社会生活や社会的文化領域で基本的なやりとりができる 学習時間：（ゼロから数えて）440-460 学習時間以上** 最低必要語数：約 2300 語

B2	ТРКИ-2 第2レベル	あらゆる領域でかなり高度なコミュニケーション能力を有する.人文 学, 技術工学, 自然科学の分野で専門家としてロシア語で活動するこ とができる 学習時間: 第1レベル+720 学習時間以上** 最低必要語数: 約 5000 語
C1	ТРКИ-3 第3レベル	あらゆる領域で高度なコミュニケーション能力を有する.言語・文学研 究者, 通訳, 編集者, ジャーナリスト, 外交官, 管理職としてロシア語 で活動することができる 学習時間: 第2レベル +ロシアの高等教育機関で 280 学習時間** 最低必要語数: 11000 語以上
C2	ТРКИ-4 第4レベル	領域を問わず, ロシア語母語話者に近い高度なコミュニケーション能 力を有する.ロシア語教育や研究分野で専門家として活動することが できる 学習時間: 第3レベル +ロシアの高等教育機関で 180 学習時間** 最低必要語数: 設定なし

* Андрюшина (2011; 2013), Андрюшина и Козлова (2011; 2012)を元に筆者が作成

**ロシアでは1 学習時間 45 分とされている

ТРКИ/TRKI では, 各レベルについてそれぞれ到達に要する学習時間数, 取り上げられる話題/内容と導入されるべき語彙や文法項目が細かく決められている (Андрюшина 2011; 2013, Андрюшина и Козлова 2011; 2012, Нахабина и др. 2001; Владимирова 2001). 日本の高校の場合, 授業時間数は「1 単位時間を 50 分」(MEXT 2018b: 5)として計算するので, 週 2 回 50 分の授業を 1 年半ぐらい受けると少なくとも初級レベル (Элементарный уровень: A1 レベル) を到達目標に設定できるだけの学習時間数が確保できる. 初級レベルでは, 1) お店やレストラン, 学校といった日常生活でよく遭遇するような場面で簡単なやり取りができること, 2) 自身や家族, 友人の紹介をしたり, 自分の町, 趣味や余暇, 学業等身近なテーマについて話したり書いたりできること, 3) 初級文法の知識, が求められている (Владимирова и др. 2001). ただし, 文法については, 初級レベルでは格変化は名詞の単数のみ 6 格全てが導入されるが, 名詞の複数や形容詞の格変化は原則として学習項目に含まれていないなど, 名詞類や動詞類等の基本的な形式を一通り概観するには基礎レベル (Базовый уровень: A2 レベル) まで到達しなければならない (e.g., Нахабина и др. 2001; Владимирова и др. 2001). 何れにせよ, 各レベルで示されている話題/内容や語彙・文法項目をどの程度授業内で取りあげるかについては, 当該日露交流プログラムの内容, 授業の学習進度状況および各高校のカリキュラムで決まっている授業時間数によって変わってくるだろう. 特に, 初級レベルの学習者の場合は, 実際にロシア語を使ってできる交流活動も限定されるため, いつどのような場面でどのようなロシア語表現を用いるのか, 内容面と言語面の両面から学習項目を精査する必要があるだろう.

まず, 日露交流を軸とするプロジェクト型授業におけるロシア語の学習内容と ТРКИ/TRKI (初級・基礎レベル) の間に話題/内容面での重なりは見られるだろうか? 表 6 をご覧いただきたい. 今年度は 3 つの高校で ICT を活用したオンラインの日露交流プログラムが実施されたが, その内 2 つの高校で実施されたプログラムでは, 授業の計画・実施段階で必ずしも ТРКИ/TRKI を意識していた訳ではなかったが, 結果的にはほぼ全ての言語活動において初級・基礎レベルに

適した話題を扱う内容となった。既述の通り、TPKI/TRKI の初級・基礎レベルは、想定される話題/内容が自己紹介を含む自分と自分の身の回りに関することに限定されている。日露交流プログラムは、通常互いに知り合うための「自己紹介」から始まるし、自分の学校や町の紹介もよくプログラムの中に含まれる活動であることから、TPKI/TRKI と内容的に整合性の取れた授業を計画・実施することは十分に可能であると言える。実際に、札幌国際情報高校ではそのような取り組みが既に始まっている。次年度にまたがる新しい日露交流プログラムでは、昨年実施したオンライン日露交流に加えてロシアからの受け入れとロシアへの訪問が実現するという。2019年3月にはロシア連邦ノヴォシビルスク市の学校から生徒10名を札幌市に迎え、学校訪問やホームステイを経験してもらい、続いて同年9月には札幌国際情報高校からも10名の生徒が訪露し、ノヴォシビルスク市でホームステイをすることになっていると聞いている。今回は特にオンラインでの日露交流プログラムの経験を生かして、訪日・訪露の前にオンライン交流を通じて互いに知り合い関係を構築し、さらに実際の対面交流で自分たちの学校や町を互いに紹介し合い、関係が深めていけるようプログラムを進めていく計画になっている。このようにして、現場の教師たちのたゆまぬ努力と工夫によって、様々な制約を受けながらも TPKI/TRKI 初級/基礎レベルで想定されている話題/内容をほぼ完全にカバーした形で日露交流を軸としたロシア語教育プログラムが実施されているのである。

表 6. 日露交流授業の学習内容と TPKI/TRKI (初級・基礎レベル) の話題/内容の相関性

	札幌国際情報高校 (オンライン交流のみ)	旭川南高校 (オンライン交流のみ)
初級・基礎レベルで取り上げられる話題	自身のこと	自身のこと
	☒ 名前	☒ 名前
	☒ 年齢	☒ 年齢
	☒ 住んでいるところ	☒ 住んでいるところ
	☒ 職業	☒ 職業
	☒ 将来の夢	☐ 将来の夢
	好きなこと・趣味・余暇	好きなこと・趣味・余暇
	☒ 好きなこと・もの	☒ 好きなこと・もの
	☒ 余暇	☒ 余暇
	学業	学業
	☒ 好きな科目	☒ 好きな科目
	☒ 外国語学習	☒ 外国語学習
	家族	家族
	友人	友人
	自分の町	自分の町
	☐ 町の名前	☐ 町の名前
	☐ どんな町か	☐ どんな町か
	☐ 町の交通機関	☐ 町の交通機関
	☐ 町の中の好きな場所	☐ 町の中の好きな場所

それでは、言語面に関してプロジェクト型の授業で培われるロシア語能力を TPKI/TRKI の基準で評価するとどのような結果になるのだろうか？昨年度の文部科学省外国語教育強化地域拠

点事業に参加した高校生 5 人によって製作された「わが町紹介」のビデオを文字起こししたロシア語テキスト (784 語) を ТРКИ の各レベルに想定されている語彙や文法項目がどの程度カバーされているのか検討した (横井 2018). 尚, このビデオを作成した高校生たちは, ビデオ撮影時点で, 大学でロシア語を専攻した日本人教員とロシア人の Assistant Language Teacher (ALT) から週 2 回 2 年半にわたって第 2 外国語としてロシア語を学んできており, 彼らのロシア語学習時間を概算すると 3 年間で約 150–200 時間となり, ТРКИ/ТРКИ 初級レベル～基礎レベルに到達しうる学習時間が確保されていると言える. 分析の結果, 発表テキストは全て基礎レベルまでで想定されている構文で構成されており, 単文の多用, мочь や можно を伴う動詞不定形の使用等による動詞活用の負担の軽減といった特徴が見られた. 一方で, 語彙的には動詞と名詞以外の品詞については概ね高いカバー率 (初級レベルで 8 割近く以上, 基礎レベルでは 85%以上)を示したが, 名詞と動詞については初級レベルで 60%代, 基礎レベルで 70%であった. 「わが町紹介」というテーマ上, 「回転寿司」や「縄文時代」など地元の文化をロシア語で説明するために必要な語彙 (e.g., бусина, конвейеры) や日本語の単語 (e.g., мисо, рамен) を借用したものが比較的多く使われている. 動詞については, 例えば славиться や сходиться, рекомендовать など, ロシア語の教科書でも上級になるまで導入されないが日常会話ではよく聞かれる語彙が用いられていた. プレゼンテーションするという言語活動の性格上, 学習者が自分の語彙力のみに頼ってその場で咄嗟に産出しなければならない訳ではない. したがって, 語彙の選択については, 当該言語活動の性格, そしてロシア語能力の到達度レベルとテキストの authenticity とのバランスを考慮する必要があるだろう.

今年度は札幌国際情報高校も旭川南高校もオンラインで日露交流を行ったが, やりとり的手段として前者は手書きの手紙を, 後者はビデオレターを送り合うという形式をとり, ロシアの学校の生徒と自己紹介し合うところから交流を始めている. ロシア語学習経験が半年未満の生徒もいたため, 授業では文字を覚えることから始め, ロシア語で簡単な自己紹介が少しずつできるようになることを目標にして, 授業が進められていた. 例えば, 札幌国際情報高校の授業では, 表 6 でチェックが入っているような自身に関する事柄について自己紹介シートに日露両言語でまとめ, それに従って口頭で自己紹介の練習をしたり, 自己紹介の手紙を作成したりしていた. また, ロシアからも自己紹介シートや手紙等が届くと, 授業で自分とペアになっているロシア側の生徒についてロシア語で紹介したりもしたという. このように, 実際に自己紹介, 友人の紹介を複数回重ねることによって学習機会を増やすといった工夫が随所に見られた.

以上より, 日露交流を軸としたプロジェクト型の授業であっても, CEFR 等の客観的到達基準の適用が可能であることが明らかになった. ただし, プロジェクト型の授業では個々の学習者の背景やニーズにあわせた主体的学習を可能にする一方で, 習得される語彙や文法の学習項目が学習者間で多様になる可能性もあり, ТРКИ/ТРКИ といった客観的試験のみで評価するのではなく, ポートフォリオを導入するなど, 評価方法については工夫が必要であろう.

Ⅲ-3. 日露両言語を互いに学び合い, 教え合う: 多言語性とトランスランゲージング

本事業の日露交流プログラムでは, 交流学習を日本のロシア語学習者とロシアの日本語学習者間で実施し, 教師も生徒も日露両言語を互いに学び合い, 教え合うことができるように計画した. 教師は全員少なくとも日露のバイリンガル, おそらく英語等他の言語も操るマルチリンガルであり, 生徒たちも母語/第 1 言語の他に日本語あるいはロシア語, そして英語等複数言語を学んでいる. 参加者のこのような多言語的背景や環境から, 本交流プログラムも自ずと日露両言語が行き交う多言語空間になっていた. 一例を挙げる.札幌丘珠高校がノヴォシビルスク

のシベリア北海道文化センターの日本語学習者たちとのオンライン交流を実施した際、自文化について紹介できるようなクイズ動画を制作して互いに共有するという事になった。当初は互いに学習言語のみで動画を制作する予定にしていたが、ロシア人の生徒たちの日本語学習の手助けにもなるという意見が出され、自発的に日本側が申し出て急速に日本語での動画も製作したという。同様の事例は、旭川南高校からも報告されている。(詳しくは、本書 pp. 47-51 を参照されたい)。丘珠高校と同様、旭川南高校でもサンクトペテルブルグの学校とオンラインでの交流授業を実施し、互いにビデオレターや手紙を送りあった。最初は双方学習言語でビデオレターを作るが、返事はそれぞれの母語で行うという形をとったと言う。その際、母語で返答する場合であっても、初級レベルの日本語学習者にも伝わるように自分たちの話す日本語にも気を配ることを身をもって経験するなど、まさに対話を通じて自らの関わり方を模索し学びを深めていく多言語共生の場が創出されていた。さらに、母語で制作してもらったビデオは教師たちが生の教材として授業で活用し、教室内でも「生きた」ロシア語を学ぶ工夫がされていた。このように日露両言語でのやり取りが続いた結果、最後に年賀状を送りあった時にはロシア側から自発的に日露両言語で書かれた手紙が同封されていたりするなど、日露両者の間で多言語共生の空間が有機的に生まれていた。このように、互いに交流相手の母語/第 1 言語を学んでいるという複雑な多言語状況に置かれていたからこそ、自ずと教師も生徒たちもどちらの言語でどちらの文化をどのように扱うのかということ意識し、熟考し、意図的に選択しようとするのであろう。その対話を通じた決定プロセスには、相手の立場、視点を考慮するという共生に必須の要素が含まれており、そこから多言語共生空間が生まれたのだと考えられる。

外国語教育の文脈では、学習者にとっての第 2 言語/外国語に関する能力をいかに伸ばしていくかということにのみ注目しがちであるが、バイリンガル教育研究の分野では、特に近年バイリンガリズムの文脈に潜むモノリンガリズム的イデオロギーの問題について指摘されるようになり、本来の多言語共存のあり方そのものが教育という文脈の中でも問われ始めている。その中で、特に提唱されているのが、トランスランゲージングという概念である (e.g., Canagarajah 2011; García 2009; García & Wei 2014)。トランスランゲージングとは、「マルチリンガルがもつ全ての言語資源を、言語の境界線を超越して一つの繋がったレパートリーとしてとらえた概念」(加納, 2016a, p. 3)で、「認知・社会文化的要請を反映して複数の言語を使う一人の人間を主体的な言語の使い手とみなし、その自然な言語を使い方を受け入れ、また教授法と合わせて力を伸ばそう」とする(加納, 2016b, p. 79)。上述の例のように、外国語教育の文脈に当然存在する多言語性に目を向け、互いの学校が交流先の学校の国の言語を学んでいるという特殊な文脈を活用して両者が両言語の間を行き交いより深く豊かなコミュニケーションがとれるようになるような「トランスランゲージング・スペース」(Wei, 2001)を創ることで、教師、生徒共に多言語に対する意識もより高まるのだと考えられる。

IV. おわりに：今後の展望と課題

平成 30 年度文部科学省「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」では、特に高校のロシア語教育が恒常的に抱えていた課題を整理し、1) 地域貢献をより明確に意識したロシア語教育の計画と実施、2) 新学習指導要領、CEFR に準拠した、日露交流を軸としたロシア語学習プログラムの計画と実施、3) 高大接続のあり方や入試改革に関する具体的な検討、に各研究拠点校で取り組んだ。その結果、日露交流を軸としたプロジェクト型の授業であっても、CEFR 等の客観的到達基準の適用が可能であることが明らかになった。また、文科省が掲げる通り、「主体的、対話的で深い学び」の実現には、何かより上位の活動を遂行するためにこそことばが用いられ

るのであるということばの持つ本質をふまえて個々のことば活動の目的を問い直す必要があることが明らかになった。さらに、これまで殆ど指摘されてこなかったが、外国語教育にも当然あるべき多言語性に目を向けて学習環境を整えることで、「主体的、対話的で深い学び」の結果として、より相手の言語的・文化的背景を慮り、その上でより意図的で目的を持った言語の選択と使用が見られるようになるだろう。

今後の一番の課題としては、これまで取り組んできた日露交流を軸としたプロジェクト型プログラムに CEFR の熟達度基準を導入し、客観的評価にもできるようにすることと、プロジェクト型のロシア語学習に適した高校のロシア語学習者のための教材・教科書を開発すること、の2点が挙げられる。多くの高校では、大学の第2外国語学習者向けの教科書が用いられており、そこで設定されている文脈が、生徒たちが経験する交流のそれからかけ離れており、教科書で学ぶ内容や表現がそのまま交流プログラムで使えないことが多い。それぞれの事情にあった教材を開発することで、通常の授業においても日露交流プログラムにおける活動内容により連動させた学習機会が確保できると思われる。

我々はことばを用いることの本来の目的をもっと真剣に考える必要がある。ことばを用いて交わり、他者と通じ合い、人間は何を成し遂げるのか？日々の授業において、ことばを用いることの本質をより現実的にそして具体的に意識した活動を行う必要がある。

(よこい さちこ 大阪大学)

引用文献

- Андрюшина, Н. П. (ed.). (2011). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Второй сертификационный уровень. Общее владение (3-е изд.). СПб: Златоуст.
- Андрюшина, Н. П. (ed.). (2013). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Первый сертификационный уровень. Общее владение (6-е изд.). СПб: Златоуст.
- Андрюшина, Н. П. и Козлова, Т.В. (eds.). (2011). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Базовый уровень. Общее владение (4-е изд.). СПб: Златоуст.
- Андрюшина, Н. П. и Козлова, Т.В. (eds.). (2012). Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Общее владение (4-е изд.). СПб: Златоуст.
- Canagarajah, S. (2011). Translanguaging in the classroom: Emerging issues for research and pedagogy. *Applied linguistics review*, 2, 1-28.
- García, O. (2009). Emergent Bilinguals and TESOL: What's in a Name?. *Tesol Quarterly*, 43(2), 322-326.
- García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- 加納なおみ (2016b) 「トランス・ランゲージングと概念構築：その関係と役割を考える」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第12号, pp. 77-94.
- 国際文化フォーラム (2016). 『CoReCa 2015-2016』東京：公益財団法人国際文化フォーラム.
- 林田理恵 (2009). 「ロシア教育省『ロシア語能力検定試験』の概要・現状と課題」『到達度評価制度構築のための『国際基準』に準拠したロシア語総合試験開発』科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書, pp. 2-29.
- 林田理恵 (2014). 「ロシア語教育実情調査-将来の展望と中等・高等教育機関連携の可能性-」『複

- 言語・多言語教育研究』第2号, pp. 60-71.
- 林田理恵, 横井幸子他 (2018). 『地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した, ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究』大阪大学大学院言語文化研究科林田研究室.
- Леонтьев, А. А. (1974). Речевая деятельность // Основы теории речевой деятельности. М. (米重文樹他訳「言語活動」『現代ソビエト心理言語学』第2章, 明治図書).
- 文部科学省 (2015a). 『「社会に開かれた教育課程」を実現するために必要な方策について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/19/1370464_5.pdf
- 文部科学省 (2015b). 「教育課程企画特別部会 論点整理」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf
- 文部科学省 (2015c). 「教育課程企画特別部会における論点整理について (報告)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm
- 文部科学省 (2016). 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について (答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
- 文部科学省 (2017). 「新しい学習指導要領の考え方: 中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 文部科学省 (2018a). 「高等学校学習指導要領」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf
- 文部科学省 (2018b). 「高等学校学習指導要領解説」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm
- 文部科学省 (2018c). 「平成30年度高等学校新教育課程説明会 (中央説明会) における文部科学省説明資料」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1408677.htm
- Нахабина, М.М. и др. (2001). Государственный стандарт по русскому языку как иностранному. Базовый уровень (2-е изд.). СПб: Златоуст.
- Turnbull, M., & Dailey-O'Cain, J. (Eds.). (2009). *First language use in second and foreign language learning*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Владимирова, Т.Е. и др. (2001). Государственный стандарт по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень (2-е изд.). СПб: Златоуст.
- 臼山利信 (2000). 「高等学校におけるロシア語教育の現状と課題」『ロシア語ロシア文学研究』第32号, pp. 179-193.
- 臼山利信 (2003). 『中等教育における英語以外の外国語教育に関する調査研究—ロシア語教育を中心として—』筑波大学現代語・現代学系.
- 横井幸子 (2015). 「日本の高校のロシア語教育政策について: 教師の学びと主体性」『複言語・多言語教育研究』第4号, pp. 53-68.
- 横井幸子 (2018). 「日本の高校のプロジェクト型授業における第2言語習得とその評価について: 客観的評価 (ТРКИ) と CAF 分析」『ロシア語教育研究』第9号, pp. 89-99.
- 横井幸子&林田理恵 (2013). 「内容を重視した外国語教育のカリキュラム開発と指導について

- －第 2 外国語としてのロシア語教育の場合－」『ロシア語教育研究』第 4 号, pp. 57-73.
- Wei, L. (2011). Moment analysis and translanguaging space: Discursive construction of identities by multilingual Chinese youth in Britain. *Journal of Pragmatics*, 43(5), 1222-1235.

第 1 部

各研究拠点校の取り組み

東京オリンピック・パラリンピックに向けた言語運用」

— 関東国際高等学校・2018 年取り組み —

永沼 栄理子

I. はじめに

関東国際高等学校は、平成 29 年度文部科学省「外国語教育強化地域拠点事業(ロシア語)」に拠点校として参加し、今年度も引き続き、「グローバル化に対応した外国語教育推進事業(ロシア語)」に参加している。「主体的」、「地域貢献」をキーワードに進められる当事業に対し、本校では 2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、地域の青少年言語ボランティア団体の構築を目指し、前年度より取組みを進めている。

II. 関東国際高等学校ロシア語コースについて

II-1. ロシア語の授業数

1 年次：総合ロシア語(3 単位)，異文化理解(2 単位)

2 年次：ロシア語理解 I (4 単位)，ロシア語表現(2 単位)

3 年次：ロシア語理解 II (4 単位)，ロシア語演習(4 単位)※，時事ロシア語(2 単位)※
※選択者のみ

II-2. 本年度ロシア語コース時間割

1 年生

	月	火	水	木	金
1	古典	世界史	地理	英語	英語
2	数学	英語	露語	体育	化学
3	露語	露語	体育	化学	数学
4	英語	保健	現代文	数学	英語
5	世界史	露語	芸術	露語	現代文
6	情報	古典	芸術	地理	情報
7			総合		LHR
8			総合		

2 年生

	月	火	水	木	金
1	現代社会	露語	英語	歴史	露語
2	科学	体育	古典	歴史	古典
3	現代文	英語	英語	現代文	家庭基礎
4	英語	露語	歴史	古典	家庭基礎
5	英語	現代文	歴史	体育	露語
6	露語	保健	露語	英語	科学
7	国語演習		現代社会		LHR

3 年生

	月	火	水	木	金
1	歴史	露語	現代文	古典	古典
2	露/英語	現代文	露/英語	露/英語	英語
3	体育	露語	露/英語	英語	露語
4	時事露語		露語	歴史	古典
5	時事露語		英語	歴史演習	英語
6			歴史	歴史演習	現代文
7			総合		LHR

Ⅱ-3. 本年度在籍者数

1年：19名(男11, 女8) 2年：11名(男4, 女7) 3年：19名(男12, 女7)

Ⅱ-4. 卒業後の進路

ほぼ全員が国内外の4年制大学進学

【主な進路先例】

上智大学外国語学部, 法政大学国際文化学部, 学習院大学文学部, 京都産業大学外国語学部, 極東連邦大学函館校, 同志社大学グローバル地域文化学部, 関西学院大学文学部, 獨協大学経済学部, 清泉女子大学文学部 他(順不同)

Ⅱ-5. ロシア語コースの到達目標

- 1年生: ロシア語の文字, 初級文法の習得. ロシア語およびロシアに対する興味・関心を引き出し, 自ら学ぶ意欲を高める. よく使われる会話表現を身につけ, 実際の場面で運用できる能力を向上させる.
- 2年生: ロシア語の語彙を増やし, 初級文法をさらに深める. 聴解力・語彙力・表現力を広げるとともに, ロシア語検定4級の取得を目指す. よく使われる会話表現を身につけ, 実際の場面で運用できる能力を向上させる. 短期留学にむけて日常生活で頻繁に使われるフレーズを繰り返し学習し, ロシアでの生活にスムーズに入れるようにする.
- 3年生: 初級文法の知識を定着させ, 運用能力を高める. 読解力, 聴解力, 表現力を向上させる. ロシアに関する興味・関心を高め, 大学進学後もロシア語を継続して学習する意欲を高める.

Ⅲ. 東京オリンピック・パラリンピックに向けた渋谷区内の取り組み

Ⅲ-1. 前年度の活動

ロシア語教育を中心に, 東京渋谷地域内の教育機関(小・中・高・大)の横断的な連携関係を築き, 2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催時に, 地域の青少年が主体的に外国語ボランティアを実施できるよう, 教育機関を整備していくことを目標としている. 前年度は, 「ロシア」をキーワードに地域内の青少年が集い, 関心を高めることを目標に, 本校ロシア語コース1年生を研究対象とし, ロシア人を交えての交流会を実施した.

Ⅲ-2. 本年度の活動実績

前年度に引き続き本校ロシア語コース2年生を研究対象とする. 10月13日(土) 渋谷区立原宿外苑中学校にて, ロシア人留学生を交えた交流会を実施した. 参加者は, 渋谷区立原宿外苑中学校3年生88名, 関東国際高校2年生11名, 3年生8名, ロシア語を学習している上智大学, 法政大学, 津田塾大学学生11名, ロシア人留学生3名. 2年生の授業にて, 中学生にキリル文字を教え, ロシア語に触れる機会づくりを目的とした交流会の計画を立てる. 交流会では, 高校生, 大学生がサポートをしながら中学生が自分の名前をキリル文字変換し, 各班で決めたテーマでキリル文字変換をしたものを模造紙1枚にまとめる作業を行う. 中・高・大学生を混ぜたグループを作り, キリル文字を使った作品を完成させ, 出来上がったものをロシア人留学

生に読んでもらい，意図通りに音読されているのかを確認する．また，交流会後中学生にキリル文字をひらがなに直すミニテストを実施する．以下の写真は交流会に向けて本校で取り組んだ授業，交流会当日の様子である．



授業では，指導役，中学生役など役割分担をし，交流会当日を想定したりハーサルを行った．



50音対照表を見ながらキリル文字おこし



書きあがったものをロシア人に読み上げてもらう

【作品例】



Ⅲ-3. 成果

Ⅲ-3-1. 本校ロシア語コース生の学習意欲の観点から

この交流会を通じて、駅の路線図、トイレの案内、観光マップなど、都心部でロシア語、キリル文字表記を見かけることが無く、近年急増している訪日ロシア人に対応する取組みが必要であると考え、外国語を学ぶ意義を再認識するきっかけとなった。また、前年度に引き続き、高いロシア語学習意欲が継続されており、2年生の到達目標であるロシア語検定4級(CEFR A2レベル相当)取得者が過半数を超えた(2018年11月時点)。

- ・ロシア語コース2年生11月時点での検定取得率の推移

2016年	2017年	2018年
10%	26%	55%

前年度に引き続き、交流会後、本校ロシア語コース全学年を対象にロシア語学習に関する意識調査を実施した。以下、その一部を抜粋して紹介する。

質問 1. 実際にロシア人との交流の機会があり、その経験後ロシア語学習のモチベーションがあがったか

1 年生	2 年生	3 年生
57%	80%	72%

質問 2. 高校を卒業してもロシア語を続けたいか

1 年生	2 年生	3 年生
77%	82% (1 年次 77%)	63% (2 年次 70%)

質問 3. 将来ロシア語を使って仕事をしてみたいか

1 年生	2 年生	3 年生
66%	72% (1 年次 84%)	37% (2 年次 69%)

質問 4. ロシア語の授業が好きか

1 年生	2 年生	3 年生
90%	100%	90%

以上の結果を踏まえると、本事業の対象としている 2 年生のロシア語学習に対するモチベーションが、他学年の生徒に比べて高い数値を維持していることがわかる。ここで、3 年生の数値に注目すると、ロシア語継続意欲が前年度より低下しており、後述する今後の教育課題が浮き彫りになった。

高校生がロシア語を学ぶ意義を問うたアンケートの答えには：

「希少価値が高い言語なので、言語脳が発達している高校生で勉強することは良いこと」

「他の学校では学べない、他人とは違う強みが持てる」

「若いうちにたくさん知識を吸収し、自分の知らない世界を知って考え方や視野を広げることができる」

「若い頃から学ぶことで、自国以外の文化や政治に詳しくなれる」

と言った回答があり、それぞれが英語以外の外国語を学ぶことに対して前向きな価値を見出している。

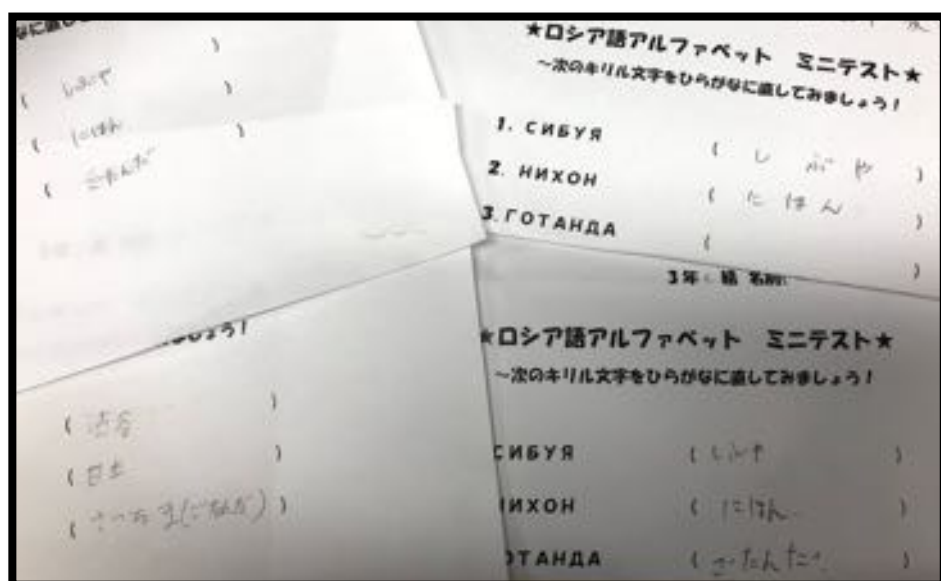
Ⅲ-3-2. 交流会に参加した中学生の反応

以下、原宿外苑中学校古川恵樹副校長先生よりいただいた「ロシア交流について」の報告書より引用.

「自分の日本語の名前を、日本語の変換表を基にキリル文字に変換できた時、生徒たちがロシア語を身近に感じる第一歩となった. さらに、留学生の方々が、生徒たちが変換したキリル文字(日本の地名等)を発音した時に、自分たちが普段発音している日本語と同じ発音だった時の歓声は、生徒たちがロシア語交流に達成感をえた瞬間であった. 」

作成した模造紙は、1月に原宿外苑中学校で開催された展示発表会にて展示いただき、来校された保護者、地域の方々からは、「中学校にて英語以外の外国語に触れる機会があったことは非常に貴重な体験であり、今後もぜひ交流を続けて頂きたい」という声が挙がり、この交流会が地域の方々にロシア語に興味を持つきっかけを与えたという点で大きな役割を担ったと言えるだろう.

また、交流会の後日、中学校の先生方にご協力頂き、交流会に参加した中学3年生を対象に実施した、キリル文字からひらがなに変換するミニテストでは、ほとんどの生徒が正しく解答することができた.



Ⅳ. 今後の展望と課題

Ⅳ-1. 本校ロシア語コースの今後の教育課題

(1)授業全般について

- ①本校の実情に合った教材の開発、選択
- ②生徒のモチベーション維持のための工夫
- ③入学時の学習能力差を埋めるための方策

(2)学習全般について

- ①読解力／文章表現力向上に向けての方案と国語教科との連携

- ②ロシアを含めた社会への関心を高めるための課外授業の実践とその評価方法
- ③短期留学／長期留学の評価方法
- (3)進路の問題
 - ①高大連携事業(ブリッジ授業)の充実化
 - ②ロシア語を通じての進路先の確保
 - ③ロシアの大学への留学支援

IV-2. 東京オリンピック・パラリンピックに向けた課題

- (1)現在、2020 年東京五輪に向けてのボランティアを募っているが、個人で参加できるのは 18 歳以上に限られるため、ロシア語を学習している高校生が主体的に活動に参加できるような組織作りが必要である。
- (2)高校生が主体的にボランティア活動に取り組むことが学習能力の向上にどうつながるのか、定期テストや授業への取組態度から、今後さらなる検証が必要である。
- (3)中・高・大学生が連携して地域活動に取り組むためには、今後各自治体の協力を得ながらロシア語のみならず、複数言語を学習している中高生のためのボランティア機会を増やすことが早急の課題である。

(ながぬま えりこ 関東国際高等学校)

グローバル化に対応した外国語教育推進事業（ロシア語） における取り組み

― 異文化理解と交流を軸としたロシア語学習効果の考察 ―

遠藤 雅公

I. 事業参加の経緯

本校では財団法人「国際文化フォーラム」が数年前から展開している日露交流学習プロジェクトに 2016 年から参加し、ロシア人の日本語教師や日本語学習者と、日本人のロシア語教師やロシア語学習者が相互に学び合える取り組みに関わっている。日本に点在する高校のロシア語教師をネットワークでつなぐ事業はこれまでなかったため、縁あって加わることができたことで他府県のロシア語教育の授業実践の交流が可能となった。

そんななかで、大阪大学の林田理恵、横井幸子両先生が中心になって進めている文部科学省の外国語教育推進事業に 2017 年度から参加できたことで、高校側だけでなく大学のロシア語教育からみた視点や大学と高校との高大連携のもつ可能性も広がった。

実際、本校は札幌大学と高大連携の関係にあり、今年度はロシア語の授業にも協力いただいた。また、大阪大学からはロシア語の教育実習生を受け入れることとなった。食文化に関わる興味深い授業をしてもらうことができ、事業での取り組みを側面から協力いただいた。さらに、大阪大学を中心とするロシア語教育研究会の研修を通じて、一方的な講義形式に偏りがちな授業から抜け出して、工夫を凝らした取り組みや教育理論、IC 機器の利用による効果的な実践に触れ、大きな刺激となった。

先述した財団法人「国際文化フォーラム」から昨年春「シベリア北海道文化センター」の日本語教師ミロノワ・リュドミーラ氏をご紹介いただいた。ミロノワ氏が所属するこの「シベリア北海道文化センター」は、札幌の姉妹都市でもあるノボシビルスクにあり、日本語や日本文化を学ぶ学生や社会人を対象に教育を施している、シベリアの中心的な役割を果たしている公的機関である。そこで日本語を学ぶ初級クラスの生徒 11 名と本校のロシア語クラスの生徒 2 名を対象に、相互に異文化理解や学び合いにつながる活動ができないかを探った。



シベリア北海道文化センターの授業の様子



向かって左がミロノワ・リュドミーラ先生

Ⅱ. 活動内容について

日露それぞれのクラスの生徒を、4名ずつのグループに分けて、お互いの文化に関するクイズを制作しビデオやパワーポイントで資料を送り合う。そして、生徒が鑑賞し合ってそれぞれ評価しあうこととした。データのやりとりは、メールの他にロシアで広く使われている LINE とほぼ同じ機能を持つ WhatsApp というソフトを使用した。

Ⅲ. 日露文化クイズ作成の流れ

【日本側（札幌丘珠高校）】

対象生徒：初級 選択生徒 22 名
担 当：遠藤雅公（ロシア語・英語科教諭）
期 間：動機付け 6 月～9 月中旬
意識付け、準備 9 月下旬～12 月
使用時間：およそ 6 時間
クイズのテーマ：「学校」「習慣」「食文化」



サハリンの学生との交流

【日本側（札幌丘珠高校）の取り組みの流れ】

① 動機付け（6 月～9 月）

5 月に財団法人「国際文化フォーラム」から「シベリア北海道文化センター」の日本語教師ミロノワ・リュドミーラ氏を紹介される。下旬に相互に教育計画を作成し、先述した活動をそれぞれが行うことが決まった。



6 月 26 日に日露青年交流センターからの依頼で、サハリンの中等学校の生徒 10 名が来校した。授業交流を通じて、交流の意義や興味関心につなげることができた。

7 月 23 日に札幌市の外郭団体「札幌国際プラザ」国際交流員のエレーナさんをお招きした。ロシア文化入門の講話を実施した。

夏休み明けは考查実施の関係で教科書中心の授業に終始した。9 月中旬定期考

考查終了後、18 日に札幌大学の高橋健一郎先生の計らいにより、民族楽器奏者アンドレイ・クガエフスキー氏が来日に合わせて本校を訪問し、ロシア民族音楽の講話をしていただいた。日本ではあまり知られていない伝統音楽の歴史や見たことのない「ドームラ」という民族楽器とその音色に生徒たちは興味津々の様子だった。

アンドレイ・クガエフスキー氏（右）と高橋先生→



② クイズ作りの準備とさらなる意識付け（9月下旬～12月）

8月～9月にかけて、週2時間の授業のなかで定期考査、祝日や秋休み、体育行事などにより準備をする時間がなかなか取れなかったため、9月25日に初めて取り組み始め活動内容や作業手順、意義について伝えた。その後、10月初めから大阪大学から来た教育実習生にも協力してもらい、3年生で進路にかかる活動もあるなかで持続して取り組んでもらえるように、文化的な要素も入れて授業を工夫してもらった。なお、卒業考査の進度も考慮し、随時時間の配分も見ながら通常の授業も並行して行った。



教育実習生池田さんの授業のひとコマ

大まかな作業内容は次の通りである。

1時間目： 4人1班のグループの班分け

2時間目： 作業手順の説明、テーマ選定

意識付け： 教育実習生池田有里さんによる食文化を織り込んだ文法授業（3時間）

1回目 ロシア料理に使う語を用いて名詞の性別の演習

2回目 ニシンの料理、ボルシチの料理法を紹介しながら対格形の演習

3回目 ピロシキ、ブリヌイ等のデザートや前菜の紹介と造格形の演習

3時間目： クイズ制作前に自分たちのメンバーを紹介するビデオ撮り

インターネットを通じてクイズの題材探し、シナリオ（日本語）制作

4時間目： 辞書やインターネットの辞書機能を使ってシナリオ（ロシア語）制作

5および6時間目： ICT（タブレット）を使用してビデオ撮り

※なお、ビデオ撮りは教室以外で行うこともあり、昼休みや放課後にも実施した。

12月の下旬に完成し、1月に相手校に動画を送った。



自己紹介用ビデオのひとコマ

【ロシア側（シベリア北海道文化センター）】

対象生徒：初級 12名（中学3年～高校3年）

担当：ミロノワ・リュドミーラ・オリエーゴヴナ（日本語教師）

使用時間：6時間

クイズのテーマ：「ロシアの若者文化」「お祭り」「漢字クイズ」

【ロシア側（シベリア北海道文化センター）の取り組みの流れ】

1 時間目：テーマの話し合い

観点は日露の生徒がお互いに興味を持てる内容かどうか、文化的な共通点があるかどうかだった。話し合いの結果「ロシアの若者文化」「お祭り」「漢字クイズ」の3つに決定。

宿題の設定：日本の交流相手に面白いと感じてもらえる情報収集

2 時間目：宿題を持ち寄っての話し合い

日本人が面白いと感じるか、日露交流の新しい発見につながるかどうかを話し合った。

（1～2 時間目までで決めたこと）

- ・若者文化をテーマにしたクイズを面白くするために、若者の日常生活に日本の現代文化がどんな影響を与えるかという側面を取り入れ、クイズの質問をアレンジした。

- ・ロシア人から日本人に「漢字クイズ」の出題を試みた。漢字は、ロシアの生徒にとって特に魅力的であると同時に、学習者泣かせな存在でもある。そんななか、漢字学習を楽しくするために漢字を自分で作ってクイズにしてみたいという声が多く上がった。そこで、ロシアの伝統的な要素を表わしているオリジナル漢字を考えることにした。

- ・「お祭りクイズ」は、日本では珍しいであろうロシアの風習に焦点を当てて問題を考えた。あらかじめ日本の祭りを詳しく調べ、日本人から見た自国の祭り文化の面白さに気付けた。

宿題の設定：

3 つのテーマに基づいてパワーポイントによりロシア語でクイズを制作

3 時間目：クイズ用パワーポイントデータの日本語翻訳 翻訳作業で、言語学習への態度を評価できた。

（既習の学習評価項目）

- ・質問の構成、聞き方
- ・疑問詞「どれ」の復習
- ・意見を表す表現：「～と思います」・受け身

4 時間目：書道体験とオリジナル漢字クイズの制作

書道体験を取り入れて、オリジナル漢字作成に挑戦した。評価の観点として、この工程では漢字学習を重視した。漢字の部首にそれぞれに意味があることや、その組み合わせで新しい単語が生まれることを実感してもらい、ロシア製の漢字を墨で描いた。

宿題の設定：パワーポイントによる漢字クイズ完成、ビデオクイズの撮影。



5 時間目 : 北海道札幌丘球高等学校から送られたクイズの紹介

クラスでいただいたクイズのビデオを見て、正解を考えた。すぐに正解を当てた生徒がいなかったの、何回かビデオを見て、皆で話し合った。ビデオで紹介された学校の様子を自分が勉強している学校と比較して、違いに気づいてもらった。この気づきが日本とロシアの教育制度の相違点についてのディスカッションにまで広がった。

6 時間目 : 振り返り

日本語によるクイズ制作と日本の生徒が作った文化クイズに答える体験を感想文として書いてもらい、これまでにふり返って皆で話し合った。

IV. 制作したクイズの紹介

【日本の生徒が作ったクイズ】

・問題 1

「教室のロッカーには何が入っているでしょうか。」

《 Что есть в враздевалке аудитории? 》

「次から選んで下さい。」 《 Выберите ответ. 》

「1 教科書や辞書」 《 один : Учебники и словари 》

「2 掃除用具」 《 два : Инструмент для очистки 》

「3 先生の私物」 《 три : вещи учителей 》

「4 宿題やプリント」 《 четыре : домашние задания 》



「正解は 2 番です。」 《 Ответ — два : Инструмент для очистки 》

「放課後、生徒たちは自分の教室を掃除する習慣があります。」

《 После урока, ученики убирают в аудитории. Это традиция в японской школе. 》

※欧米では、生徒が掃除をする習慣はない。

・問題 2

「納豆の食べ方は次のうちどれでしょうか。」

《 Как мы едим натто? Выберите ответ. 》

「1 ゆでる」 《 один : Варить 》

「2 混ぜる」 《 два : Мешать 》

「3 焼く」 《 три : Жарить 》

「4 凍らせる」 《 четыре : Заморозить 》



「正解は 2 番「混ぜる」です。」 《 Ответ — два : Мешать 》

「納豆はふつう混ぜて食べます。しかし、焼いたり揚げたり、煮て食べることもあります。」

《 Мы обычно смешаем и едим. Но иногда мы жарим или варим это. 》

・問題 3

「放課後、列ができます。何を待っているのでしょうか。」

《 После уроков, отереть появится. Что они ждут? 》

「正解はバスです。」 《 Ответ : Автобус 》

「学校から地下鉄の駅まで、バスが出ています。」

《 Автобус ходит из школы до станций метро. 》



・問題 4

「日本の伝統衣装はどれでしょうか。」

《 Что такое традиционное платье в Японии? 》

「1 チマチョゴリ」 《 один : Ханбок 》

「2 着物」 《 два : Кимоно 》

「3 サラファン」 《 три : Сарафан 》

「4 サリー」 《 четыре : Салли 》

「正解は 2 番「着物」です。」 《 Ответ — два : Кимоно 》

※日本語学習者には簡単だが、生徒は大まじめに考えて出題している。

・問題 5

「(生徒玄関にて) この箱に何を収納するでしょうか?」

《 Что мы храним здесь? 》

「1 靴」 《 один : Обувь 》

「2 教科書」 《 два : Учебник 》

「3 弁当箱」 《 три : Обед 》

「4 帽子」 《 четыре : Шапка 》



「正解は 1 番 靴です。」 《 Правильный ответ — один : Обувь 》

「登校したときに、まず靴を履き替えて靴箱に入れます。」

《 Когда мы прошли в школу, сначала мы изменим обувь и храним это в своем ящике. 》

※ロシアでは上靴に履き替える習慣はない。

【ロシアの生徒が作ったクイズ その1】 パワーポイントによるクイズから抜粋

- ・問題 1 2000 年にはヴォローネジュという町でロシアで初めて日本のアニメ映画祭が行われました。次のうち、誰のアニメ作品が上映されましたか。



1 宮崎 駿



2 小池 健



3 新海 誠

(答え) 1 宮崎 駿

映画祭では宮崎駿の映画が 5 つ上映されました。

・問題2 シベリアの各地の町では毎年 S.O.S. という日本文化祭が行われます。S.O.S. という名前はどのような意味だと思いますか。

- 1 Save Our Souls 2 Siberia Otaku Saiten
3 Songs of Silence

(答え) 2 Siberia Otaku Saiten

S.O.S.は大きな日本現代文化フェスティバルです。2日間のイベントに2日シベリアの各地から参加者が1800人以上集まります。



・問題3

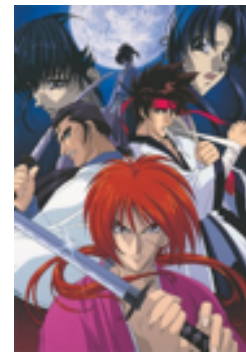
1996年にロシアTVで初めて上映された日本のアニメシリーズはどれだと思いますか。



1 セーラームーン



2 エヴァンゲリオン



3 るろうに剣心

(答え) 1 セーラームーン

セーラームーンは1996年からロシアのテレビで上映され、とてもポピュラーになりました。

・問題4 1990年代のロシアで人気があったゲーム機はどれですか。

1. Sega Mega Drive



3. Dendy



2. Nintendo Entertainment System (NES)

(答え) 3 Dendy

Nintendo Entertainment Systemはロシアでは売っていませんでしたので、その代わりに台湾製のDendyが普及し、人気を集めていました。

・問題5 ロシアで一番人気のあるSNSはどれだと思いますか。

- 1 Mixi 2 Vkontakte (VK) 3 Facebook

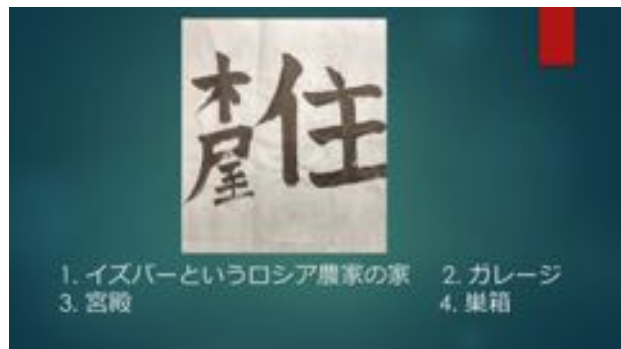
(答え) 2 Vkontakte (VK)

VKは一番人気があります。このソフトは2006年にスタートし、登録アカウントが4億6000万以上あります。90か国語が利用できます。

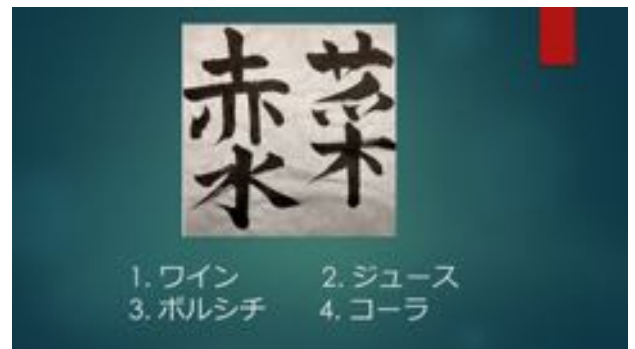
【ロシアの生徒が作ったクイズ その2】 オリジナル漢字クイズ

ロシアの伝統的なものを表しています。何を表しているか当ててください。

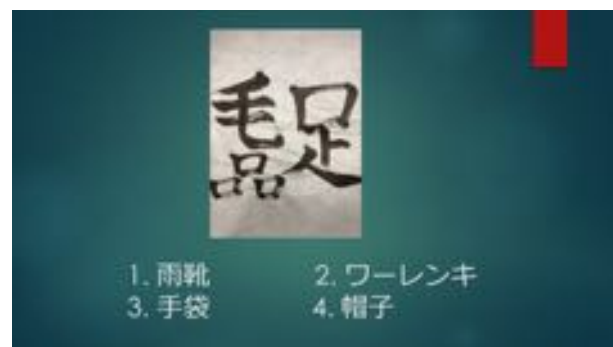
問題 1



問題 2



問題 3



問題 4



問題 5



解答

・問題 1



・問題 2



・問題 3



・問題 4



・問題 5



V. 日

露の生

徒たちが寄せた感想

【日本側】

学年末考査と並行して実施。22名のうち19名から回答（テストと並行して実施し、時間がなかったため4名は記入なし）

(1) ビデオクイズの取り組みはどうだったか？(4段階)

- ・とても楽しかった 5名
- ・楽しかった 11名
- ・あまり楽しくなかった 1名
- ・楽しくなかった 1名
- ・未記入 1名

(1) の続き どんなところが楽しかったか、あるいは楽しくなかったか。

「とても楽しかった」「楽しかった」と答えた生徒のコメント

- ・みんなでどんなクイズを出すかについて話し合っているとき 6名
- ・知らないロシア語を知ることや覚えること 4名
- ・質問を考えるとき、ロシアのことを少し知ることができた気がしたこと 1名
- ・ロシア語の台本をみんなで覚えたこと 1名
- ・ロシアの人たちの知らないことを探すこと 1名
- ・日本語をロシア語に直すために調べること 1名
- ・他国の文化（民族衣装）について知ることができたこと 1名
- ・未記入 1名

「あまり楽しくなかった」「楽しくなかった」と答えた生徒のコメント

- ・ビデオを撮るのが嫌だった 1名
- ・欠席していて授業にあまり出られなかったから 1名

(2) ビデオ制作の取り組みでよかったところやよくなかったところについて

- ・文化の違いを比較できてよかった 3名
- ・ロシアの人たちとビデオを通じて交流できた 3名
- ・授業で取り上げられなかった単語を覚えることができた 3名
- ・ひとつのものをつくることでチームワークが生まれた 2名
- ・疑問を解決できた 1名
- ・発音や発声、台詞の暗記をもっとしっかりとできればよかった 4名
- ・調べる時間が足りなかった 1名
- ・もっと話し合いに参加すればよかった 1名
- ・未記入 1名

(3) ビデオ制作の反省点は？

- ・文章の暗記・発声練習をもっとすべきだった 7名
- ・リハーサルを行いたかった 1名
- ・班員に積極性がなく、なかなか進まなかった。 1名
- ・外で撮ったので声が入りづらかった。 1名
- ・画用紙、色鉛筆を用意する 1名
- ・編集したかった 1名



インターネットで題材を検索中

(4) 日露交流のアイデアはありませんか？

- ・料理，食文化交流
- ・「これは何でしょう」クイズ． 例えば「耳が大きい，茶色，目がくりくりしている」（答え チェブラーシカ）ロシア語と日本語で出題すると日本人も楽しめそう．
- ・一緒にどこかへ出かける
- ・テレビ電話やお便りの交換
- ・人事交流やスカイプでの通話
- ・異文化を披露し合う
- ・それぞれの国の遊びで交流
- ・討論やゲーム

【ロシア側】

(1) 難しかったこと

- ・日本人に興味を持たせるテーマを選ぶこと
- ・自分が言いたいことを日本語で表現すること
- ・面白いビデオを作ること
- ・興味のあるテーマについてうまく質問を作ること



シベリア北海道文化センターにて

(2) 楽しかったこと

- ・漢字を書くこと
- ・自分で作ったクイズについて相手の感想や意見をもらうこと
- ・日本の高校事情のビデオを見ること
- ・クラス皆で PPT を作ること
- ・日本とロシアの文化の違いと共通点を発見すること
- ・自分で書いた日本語を相手に理解してもらうこと
- ・日本人の相手のロシア語を聞くこと

(3) 勉強になったこと

- ・日本の高校生活の一部を初めて垣間見たこと
- ・相手の文化や自分の文化について自分の力で情報を集めることと，日本語でそれをまとめる作業は難しかったが，やりがいを感じたこと
- ・自国の文化に相手の関心を引き寄せることは工夫が必要だが，交流のためにとっても大切なことがわかったこと
- ・新しい日本語の文型や言葉を学んだこと
- ・相手との交流のためには，言語知識だけでなく，アイデア，気づきの力，そしてやる気が必要だとわかったこと
- ・漢字のなり立ちの意味をあらためて考え，そのメカニズムを体験できたこと

VI. 今後の課題・反省点

【日本側教師から見た課題】

- ・相手に楽しんでもらえるような質の高い作品を作るには、かなりの指導と時間が必要だと実感した。
- ・新しい試みを実行するために時間を取ることに、教科書の進度を例年通り進めることとの均衡を図るのがむずかしかった。
- ・大多数の生徒がビデオ制作は楽しかったと述べており、この取り組みを通して授業に自主的な学びの形態を取り入れることができた。
- ・ロシアの人々と交流を深めたいという気持ちが強まった。
- ・人的交流を継続的にどう発展させられるかが今後の目標である。

【ミロノワ・リュドミーラ先生からの指摘】

- ・生徒は一般コースの学習者であり、年齢、日本語のレベル、在学している学校などが皆ばらばらである。
- ・授業の欠席が目立つ生徒の対応がネックになった。
- ・最初は生徒にやる気があまりなかった。
- ・アイデアを引き出すために苦労した。
- ・ビデオを撮影するには、カリキュラムの中での時間数が少なかったため、予定していた時間で作れなかった。
- ・プロジェクト実施中に生徒間の直接的な交流がなかったため、生徒の意欲や関心を持続させることが難しかった。
- ・先生の指導が多かった。生徒の自発的な活動がもっとあればよかった。
- ・日露の生徒が直接触れ合える場がつくれなかった。
- ・日本語学習に効果があったと思うが、生徒がお互いに親しくなるような活動は少なかったため、異文化理解につながる教育的な面が薄いと感じた。

VII. 成果

【日本側教師が感じたこと】

- ・日本のどんな文化を伝えるかについての話し合いが有意義で楽しかったようだ。
- ・教科書にはない単語を覚えるさせることができた。
- ・既習事項ではない語彙や格変化を使って表現しようとする場面が見られた。
- ・自分たちでアイデアを考えて発信できるため、自主的な活動体験や達成感につながった。
- ・自国の文化を見つめ直すきっかけをつくれた。
- ・動画制作を通じて、自国の文化を深く知ることの意義と意思の伝え方の大切さを考えさせることができた。

【ロシア側教師が感じたこと】

- ・このプロジェクトの成果物（クイズ）によって、学習者に満足感が生まれ、今後の交流事業の参加に意欲と興味が湧いてきた。
- ・日本語学習に対して、モチベーションが上がった。

- ・生徒が自発的な活動に自信を持ち始め、これからは自分で交流のプランを立てて実施してみたいという声があった。
- ・教師間の交流を通じて、自分でもやってみたいことやアイデアが生まれた。
- ・今後の言語学習や交流をどのように行えばよいか、また、生徒にとってさらにどのように有意義にできるかが少しずつ明確になってきた。

VIII. 最後に

今年度、日露青年交流センターからの依頼で6月にサハリンからの高校生10名の来校を受け入れる機会があり、外国語を使って交流することの楽しさを生徒たちは感じていた。そこで、ロシア人向けに日本の文化クイズをビデオで制作することをこちら側が提案した際は、自然に彼らはその案を了承し実行に移すことができた。もちろん、授業が週2時間しかない初級レベルのクラスで、その試みはどこまで実現できるかは手探り状態であった。

結果はまずまずであったが課題も多い。本校の生徒22名のうち、16名が楽しかったと述べており、逆に楽しくなかったと述べている生徒が2名いるが、ただ単にビデオに映るのがいやだという生徒が1名、もう1名は台詞をしっかりと覚えて臨めばもっと楽しめたと答えている。教師側は年間計画の合間を縫って見通しを立てて準備をしていくが、時間のないなかで大変さを感じながら進めてきた。

ロシアの生徒たちのなかには最初は乗り気でなかったり、勝手がわからず見知らぬ日本人向けに興味を持たせるクイズの作成をどうすればよいか戸惑っていたようだ。担当された先生は指導にご苦労されたことが十分伺えるが、ロシアの日本語学習者ならではの発想で作られたオリジナルの漢字クイズは興味深く、言語の魅力、自国の文化の発見や異文化理解につながる気付きがあった。日本語がご堪能なミロノワ先生の指導力が発揮され、とても完成度の高いクイズや映像をお送りいただいたこと大変感謝している。

日本の生徒のなかに、スカイプなどのビデオ通話で交流したいとの意見もあった。この事業を通じて、交流先とのパイプを強めて準備をしっかりと進めれば、より実践的な授業スタイルの一つとしての可能性が生まれると確信する次第である。

(えんどう まさきみ 北海道札幌丘珠高等学校)



北海道札幌国際情報高校における取り組みと成果

— 高大接続の可能性をさぐる —

依田 幸子

I. はじめに

本校は、平成 30 年度、文部科学省からの委託事業「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」において、研究拠点校としての指定を受けた。全体の研究課題は「社会に開かれたロシア語教育の確立：地域貢献のためのロシア語学習、カリキュラム・マネジメントと学習評価、高大接続」であるが、とりわけ本校においては「ロシア語関係での出張授業・公開授業の実施、入学者選抜方法に CEFR 等に準拠した外部検定試験を活用する可能性の検討」を具体項目とする高大接続事業に重点を置くこととなった。高大接続のありかたについては、それぞれの学校や教科の特性を鑑みた、さまざまなアプローチが考えられるだろう。



グローバル化社会において、第二外国語を学習するという機会を得た高校生が、高校卒業後も、その学びを深めていきたいと希望した場合、その進路を保証するということが重要な意味を持つことは自明である。また、高い意欲を持った生徒を受け入れる大学側にも大きなメリットがあるだろう。今後、個性や特性を生かした大学入試制度がますます拡大することが予想される。

第二外国語を設置する本校において、左の写真のようなロシアからの訪問団受け入れなどの交流はこれまでも積極的に行われてきた。しかし、第二外国語の能力を活用した高大接続については研究されていない。今後、どのような取り組みが可能なのか、今年度、具体的に実施した取り組みがどのような影響を生徒にもたらしたのか、一年間の取り組みと成果を報告したい。

II. 取り組み

II-1. ロシア語スキルアップ講座の実施

9 月 24 日の祝日に、ロシア語選択者の中から希望者を募って実施した。9 時から 16 時の予定でロシア語能力検定試験やロシア連邦教育科学省認定ロシア語検定試験（CEFR 準拠）の対策という性質も兼ね備えた 5 技能でのロシア語スキルアップ講座を実施した。参加者は 3 年生 2 名（ロシア語選択者は全員で 5 名）、2 年生 1 名（ロシア語選択者は全員で 9 名）の合計 3 名であった。

大阪大学の横井幸子准教授に講座を担当していただいた。各種検定の出題傾向や対策が、生徒にも分かりやすいように提示され、予定した時間を超



えても生徒の集中力が途切れない、むしろ生徒の熱意で延長をお願いする講座となった。

生徒は夢中でロシア語に打ち込んだ。講座を終え、帰路に向かう際も、「もっと勉強したい」「またこのような機会を持ちたい」といった、意欲的な声が聞かれた。

次の表は一日講座受講後の生徒本人による、能力とモチベーションの自己評価数値（5 点満点）である。

	ロシア語の能力		ロシア語へのモチベーション	
	受講前	受講後	受講前	受講後
2年男子	1	4	4	5
3年女子	2	4	3	5
3年男子	3	4	4	5
平均	2	4	3.7	5

ロシア語の能力の値は平均でも 2 倍に向上している。全員が受講後 4、という数値になっているが、「まだ十分ではない」という、向上心の現れであると感じる。客観的に一日の活動を見ていた私からは、十分に「5」と評価できる能力であったと感じる。モチベーションに関しては、受講前も高い数値であるが、受講後には、全員がそろって「5」という最高値で自己評価した。

今回の一日講座を実施してみて、改めて生徒のロシア語習得に対する意識の高さと潜在能力を認識した。また、週 2 回 50 分の授業では得られない効果を感じた。語学の特性もあるが、集中して取り組むことで、得点率が飛躍的に向上することが明らかになった。

2 年生は、受講時点で 30 時間の授業（2 回の定期考査を含む）しか受けていなかったが、一年の差がある 3 年生に同じ進度での講座に懸命に取り組み、対応できていた。

3 年生は受験勉強に励んでおり、模試や勉強の合間をぬっての参加だった。2 年生は部活動の大会後で運良く休養日となった生徒が参加してくれたが、本校生徒は土日も課外活動などで多忙であり、参加したいという気持ちがあってもなかなか時間の都合がつかない、という生徒が多い。

しかし、今回の講座により、時間の確保さえできれば、一定の学習成果が得られることが検証された。各種の検定試験にも十分対応できる能力を身につけることが可能であり、検定結果が進学に反映されるのであれば、講座の優先順位は格段にあがるだろう。いずれにせよ、現段階では、時間の確保は継続的な課題である。



II-2.クリティカル・ライティングを基にしたプレゼンテーション指導

二つ目の取り組みとして、大学教員側から「大学生を指導していて、高校生段階に身につけておいて欲しいと感じる能力」として指摘された「クリティカル・ライティング」そしてそれに基づく「プレゼンテーション」の指導を計画した。対象は 1 年生の国際文化科生徒全員（80 名）である。指導は取り組みの一つ目と同じく大阪大学の横井幸子准教授にお願いした。

まず、生徒を 10 のグループに分け、それぞれ研究テーマ決め、夏休みにレポートの作成を課した。テーマについてはロシアに関係するものであれば何でも良いとした。生徒には事前に「阪

大生のためのアカデミックライティング入門」を配信し、参考にしながらレポートの作成を行った。夏休み明けに、横井先生にレポートを送信し、丁寧なフィードバックをいただいた。高校でも論理的な文章を書くという指導を心掛けているが、多くの時間が割けず、個別対応も十分とは言えない。その中での丁寧な添削指導は私自身の勉強にもなった。

なおフィードバックの基準として横井先生が挙げられたのは「客観的記述ができているか／適切に引用できているか（間接・直接引用）／パラグラフ・ライティングができているか／自分の論が論理的に展開できているか／批判的考察ができているか（クリティカルシンキング）／文献リスト：巻末に書誌情報が適切に記載されているか」の6点であった。生徒はフィードバックを元にレポートに加筆修正を加えた。

次に9月25日、実際に授業を行っていただいた。

事前に横井先生から生徒たちに次の事項について考えておくよう指示があった。

- What is research?
- Why do we research?
- What makes good research?

生徒たちは、授業の中で、グループの仲間と考えをシェアし、自分たちが調べたことをどのようにプレゼンするとうまく伝わるのかについて検討した。

プレゼンテーションは、一泊二日で行われる学科行事の「イングリッシュ・キャンプ」の初日、10月10日に行った。横井先生はミネソタ大学でPh.D.を取得されており、英語でのプレゼン原稿作成や、伝え方などの指導も、生徒にとって貴重な機会であったことを書き加えておきたい。



生徒の選んだテーマは、「宇宙交流」「ファッション」「歌・踊り」「ウオッカ」「美女」「言語」「バイカル湖の環境問題」「マトリョーシカ」「マースレニツァ」など多岐にわたった。また、ポスター作成やプレゼンテーションの方法にも多くの工夫が見られた。

北海道とロシアは隣接しているが知らないことも多い。生徒たちは、調べていく中で興味を持ち、新たな発見をしたり、主体的な学びを行っていた。調べ学習にとどまらないレポート作成、そしてプレゼンテーションが深い異文化理解につながったと感じる。またこの取り組みを行ったことで、英語のための英語、ではないということも生徒は知った。英語で何かを学ぶことができるということを知り、一方で「やはりロシアのことを知るためにはロシア語が必要だ」という研究対象となる国の言語を学ぶことの必要性も知った。今後、英語以外の言語を学んでいく中で、基本となるスタンスを身につけてくれたのであれば、この取り組みの成果は計り知れないものとなると感じる。

取り組み後に、アンケートを実施した。5 点満点で自己評価をしてもらった結果、レポート作成の満足度 3,97, ポスター作成の満足度 4,20, プレゼンテーションの満足度 3,78, という平均値であった。個人差もあるが、初めての試みとしては奮闘した。また、「ロシア・異文化理解について」という項目においては、理解度が 4,23, 有益度が 4,04, であった。さらに、注目すべきは、取り組み前後の変化である。主体的に学ぶ力が 3,06 から 4,01 へ、構成力が 3,03 から 3,90 へと顕著な伸びを見せた。加えて、英語力も 2.84 から 3.47 へと伸びたことは嬉しい副産物であった。

Ⅱ-3. 「ことばと文化」公開講義

ここまでの二つの取り組みは技能的な面を重視していた。三つ目の取り組みとしては本質的



な学びへと繋がるような「勉強」から「学問」への入り口を提示するような講義を計画した。大阪大学の林田理恵教授に来校いただき、11 月 16 日（金）に「ことばと文化」というテーマで講義をしていただいた。対象は本校国際文化科 1, 2 年生 156 名で、5, 6 時間目に実施した。私たちが日常何気なく使っている「ことば」そして「文化」とは何なのか、21 世紀の日本・世界を生き抜くために、「ことば」とどのようなスタンスで向き合っていけばよいのか、といったことから、

今後ますます複言語・複文化社会が進む中で英語だけではなく多言語の視点の必要性について、など非常に幅広い、深い話題について、単なる講義ではなく、生徒同士が話し合ったものを取り上げながら考えを深めていく、という対話形式で、活気のある雰囲気の中、進められた。講義後には、質問の時間に積極的に手が挙げられたが、時間が足らず、終了後にも林田先生の前に生徒の列ができた。

アンケートの自由記述欄には講義を受けた生徒の素直な驚きや感動の言葉が多く見受けられた。一部を紹介したい。

『言葉』の存在意義について考えたのは初めてだったので刺激になった」「ことばや文化だけではなく、今の学習の足らない部分を学ぶことができた」「『ことば』『文化』とは何かについて考えるよい時間になった。知ることの中で『それは何か』だけではなく『何をするものためのものか』まで理解することが大切とおっしゃっていたが、これは勉強でとても大切なことだと思った」「言語・文化は抽象的だが煮詰めるとおもしろいものだと感じた」「言語を学ぶ必要性や、これからの暮らし方等について考えさせられた。しっかりと今の自分が何をすべきなのかを考えて生きていきたい」

また、講義形式ではなく、学年混合の小グループで話し合いをさせ、先生が取り上げるという方法も大きな効果を感じた。

「議題はひとつひとつとても難しいものだったと思うが、話し始めると意外に分かりやすい意見が出てきて有意義な時間を過ごすことが出来た」「ディスカッションをすることにより内容を深く考えることができた」「言葉の意味、文化とは何かなど、普段考えないようなことを話し合えて自分と違う考えにもふれることができ、とても楽しい時間だった。英語を勉強するのが最近つらかったが、私が大好きな『人と関わること』のために勉



強するのだと目的を持つことで少し頑張ろうと思えた」「私は考えをまとめるのが苦手だが、他の人たちと共有できたことで『このような言い方もあるのか』と思い、そのようなところからも言語の深さについて考えさせられるものがあった」

今回の講座では「ロイロノート」のアプリを活用した。講座は156名を5～6名の26グループに事前に分けて実施した。限られた時間の中で、26ものグループの意見を全て採りあげるとは不可能だが、それぞれのグループで話し合ったことをロイロノートに入力し、画面に一括表示をすることで、林田先生が直接、全てのグループの意見を見回し、その中で印象的ないくつかのグループに直接マイクを向けることが出来た。自分たちの話し合った内容が、全て画面上に映し出されることで全生徒に一定の満足感があり、また他のグループのさまざまな意見を見ることが可能であった。

講座の中で先生が語られた言葉が深く心に残ったという生徒も多かった。

『文化＝メンテナンス機構』という表現が素敵だと感じた』『特定言語に特別な価値を見出さない』という言葉が印象的だった』『社会の変化によって言語は変わっていく』という言葉に納得した』『ことばが死んでしまう』という先生の言葉がとても印象的だった』『変わって当たり前』という言葉で少し自分を肯定できた気がした」

さらに、講座の中から、さまざまな問題について思索し、考えを深める生徒も多かった。

「他国と地続きであるヨーロッパでは複言語・複文化というのは比較的実現しやすいのかなと思った。一方、島国である日本では少々難しい課題かもしれない。そうしたときに私たちがどう社会に貢献できるか、と考えさせられた」「今日の講義を聞いて、もう一度なぜ他の国の言語を学んでいるのかを考える良い機会になった。ずっとテストで納得のいく点数が取れず、周りの人との差を感じていたが、何のために学ぶのか、と目標をまた見つめ直そうと思う」「私なりに今までの勉強法で良かったと思っていたが、やり方を変えてみようと思う。文化やことばについて学べてよかった」「私は利便性を重視して世界で言語を統一したら良いと考えていたことがあった。しかし、今回先生のお話を聞き、文化や言葉に対する意識が変わった。文化や言葉に便利も不便もない。相手を尊重する気持ちを大切にしたいと思った」「多言語・多文化とは違う、複言語・複文化という言葉は初めて知った。言語、文化に優劣のない社会の実現はとても難しいと思うが、実現すればコミュニケーションの幅が広がって素敵な世界になると思う」

「日本が移民を受け入れるかどうかは今大きな議論になっている中で、私は日本の文化・言語の特徴が失われるのではないかと考えてしまっていたが、それは普通のことなのだと思います」

先生にどうしても追加で質問をしたいと、アンケートの中にも質問が寄せられた。

「言葉が変化していくという話がありましたが、これからの時代に現存する言語・文化を保存しようというような活動はどのような利点を持つのでしょうか」「スラングによって「ことば」が変わることをどう思われますか」「AIによって「ことば」というものが変わってしまう、存在意義などについてどうお考えですか」「今、私は英検に向けて勉強しています。文法も単語も長文も難しくて行き詰まりかけています。今日の講演を聴いて、何のためにやっているのだらうと思ってしまいました。知るだけじゃダメ、でも将来の夢は国際関係じゃない。ただ、大学受験のため。どんなモチベーションで勉強したらいいですか」

これからの質問に対して、後日林田先生からは、丁寧で分かりやすい解答をそれぞれにいただいた。生徒が満足し、今後のモチベーションを高めていたことは言うまでもない。

講座後のアンケートでは、

「どの言語、どの文化も平等だと思う」肯定的回答 76%

「複言語・複文化の必要性を感じる」肯定的回答 89%

と、どちらも非常に高い数字となった。

一方で、「自分自身を複言語・複文化社会実現の担い手だと感じる」という項目では、肯定的回答が 57%にとどまった。理由の分析には至っていないが、彼ら、彼女らが実際に担い手となってくれることを期待してやまない。

また、全学科の希望者を対象とした講座「グローバル化、日本は今?!」を放課後に開催した。「国際化とグローバル化の違い」を導入に、林田先生が準備してくださった資料を配付し、グローバル化が進む中で日本の中で、今起こっていること、喫緊の課題が提示された。特に、「グローバルな視野で地域の問題を解決できる人材ーグローカル人材」の必要性は生徒に強く響いた。

『『グローカル』という言葉がとても心に残り、自分も『グローカル人材』を目指したいと思った。グローバルというと何か世界に進出しなければいけないようなイメージがあったが、日本にいてもできることがたくさんあるどころか、やらなければいけないことが盛りだくさんだとよくわかった」「グローバル化について、ニュースなどのメディアではそのよい点ばかりとりあげられて、グローバル化そのものが良いものだとは今まで考えていたが、今回の林田先生の話聞いて、グローバル化の新たな課題が新たに自分の視野に入ってきた。自分自身がグローカル人材になれるような考えを持ってこれから生きていきたいと思う」「身近に起きているグローバル化についてより理解を深めることができ、とても勉強になった」「5, 6 時間目に受けた講座とは全く違う話題で、今起こっている問題を理解することが出来た。グローカル人材に必要な『今までの経験を脇に置いて他者を理解する』というのはとても難しいと思うがこれからの生活で意識しようと思う。」

Ⅲ. 学校でのロシア語を用いた交流活動

今年度、実施した交流活動を二つ紹介したい。

Ⅲ-1. サハリン「ヨサコイチーム」の学校訪問受入

昨年度に引き続き、第 28 回 YOSAKOI ソーラン祭りに参加するため、来札しているサハリン州からの青少年（14 歳～35 歳）21 名を 6 月 7 日に受け入れた。本校キャンティーンにおいてよさこいを披露してもらった後、各部活動生徒の協力のもと、「なぎなた」「茶道」「お琴」「合唱」の日本文化体験を行った。ロシアに限らず、海外からの訪問団が多いため、生徒は対応にも慣れている。実際に他言語・他文化の方と交流することは、異文化交流を肌で感じる事ができる貴重な機会となっている。また、ロシア語選択者は、実際に学んでいるロシア語を用いることで「実際に通じる」という喜びや、「コミュニケーションできることの大切さ」を感じることができ、ロシア語をより熱心に学ぼうという意欲に良い影響を与えている。



Ⅲ-2.ノボシビルスク 4 番ギムナジウムとの交流学习

今年度、一年間を通して、ノボシビルスク 4 番ギムナジウムで日本語を勉強している 14 名との交流学习を行った。偶然、学習者の人数が 14 名と同数だった

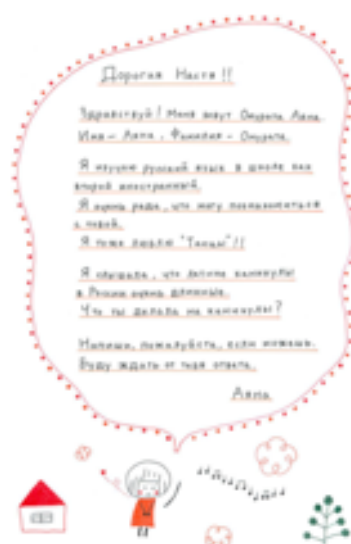
(しかも男女数も同じ) ため、ペアを固定した。

お互いに特定の誰かとつながっているという喜びはかけがえないものであり、自己紹介シートを作成することにより、自己紹介や他者紹介ができるようになるというメリットがあった。また、その中で日本とロシアの違いだけではなく、好きなアニメやゲームが偶然同じだという発見もあった。

ペアになった生徒に手紙を書くことで実用的なロシア語の文を覚えることにも役立った。日本語で書かれた手紙の返事を受け取ると、また特別な嬉しさがあったようだ。

また、実際に学習に励んでいる様子の写真や動画をお互いに交換することで、学習へのモチベーションが高まり、「つながる」喜びを実感することができた。自分のペアが発表するときは、自分の事のように緊張して見守り、うまくいくと盛大な拍手がおこった。

プレゼント交換をするという取り組みも行ったが、「相手のことを考える」「異文化理解」に大きな効果があった。「どんなものが喜ばれるのだろう」と相手の好みをそれまでのやりとりか

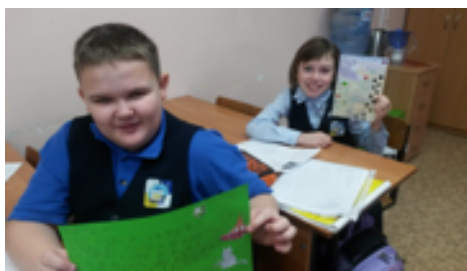
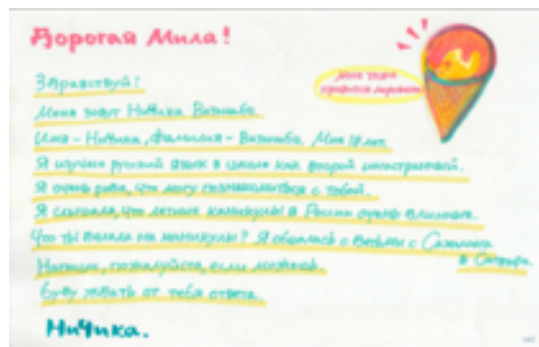


ら想像し、真剣に選んでいる様子は微笑ましかった。

実際にプレゼント交換をした後の生徒の感想からも非常に有意義な取り組みだったことが感じられた。

「相手にどういうものを送るのかを考えることは良い経験となった。何が送られてくるのかを待つのも楽しかった」「相手のことを考えてプレゼントを選ぶのはとても難しいことだった。しかし、受け取っているときの映像を見て、いろいろ考えて買ったプレゼントで相手が喜んでくれていると分かりすごく嬉しかった。もらったプレゼント、ずっと大切にします」「ビデオで相手からの『ありがとう』がとても嬉しかった。私も感謝をすごく伝えたいのに文法力も語彙力も未熟でシンプルな言葉しか出てこなかった。この気持ちを伝えるためにも、もっとたくさん勉強したい」「送ってくれた手紙やビデオを通して、一生懸命日本語を勉強してくれている人がいることを知り、私ももっとロシア語を勉強して使えるようにしたいと思った」「相手が何をプレゼントしてくれるのか良い意味でワクワクドキドキだった」「実際に会ってみたい！」

語学の勉強にはやはり実際に交流できる相手がいると、モチベーションが全然違うとを感じる。北海道とロシアは地理的には近いといえるが、実際に交流できる機会が日常にあるわけではない。今後も、人とのつながりを感じることが出来る活動の機会を提供していきたい。



IV. 今後の展望

2018年11月、国立ノボシビルスク工科大付属リツエイから、友好提携の申し出の文書が本校学校長宛てに届いた。本校の交流活動が評価され、また新しい出会いの機会を得たことをありがたく思う。早速、2019年の春と秋に生徒の相互派遣が計画され、実現に向けて現在調整しているところである。

今年度の取り組みにおいて、生徒は新しい出会いがある度に、機会を最大限に生かし、大きな成長を見せた。その姿は非常に頼もしく、まさに日本の未来を背負っていく若者の姿だと感じる。「生きる力」「コミュニケーション力」「異文化許容の素養」は、考査の点数だけでは、十分にはかることができない。多様性や個性が尊重される世の中になりつつあるものの、現実には生徒は進路実現のために、机に向かって問題集を必死で解き、模試の結果に一喜一憂する。

生徒は、自身の素晴らしい活動を、ポートフォリオとして記録・保存し、活用し発信していく必要があり、教員はなるべく多くの活動、活躍の機会を提供し、生徒を支援し、ファシリテートしていく必要がある。高校の現場ではポートフォリオについての研究が必須となるだろう。

そして今後、有効な高大接続のためには、大学側は、生徒のポートフォリオを生かす入学試験のシステムと正しく評価する方法の研究が必要となってくるだろう。

ポートフォリオを重視する入学試験の実施のためには超えなければならない壁がいくつもあると容易に想像できる。しかし、生徒に確かな学力を身につけさせ、大学でのミスマッチをなくし、将来社会に出て生き生きと活躍できる人材を輩出できる教育こそ、関係者が総力を挙げて取り組むべきことなのだと、私自身、襟を正して、今後も真摯に教育活動に向き合っていきたい。

なお、ロシア語選択者であり、今年度の上記の取り組みに積極的に取り組んだ3年生が、推薦入試を利用し、見事、K 外国語大学のロシア学科に合格したことを希望と期待をもって記したい。

(よださちこ 札幌国際情報高校)

日露交流学習の試み「友だちになろう！」

— 北海道旭川南高等学校 X サンクトペテルブルグ第 83 番学校 —

鈴木 桃子

I. 北海道旭川南高等学校ロシア語選択授業について

都市型進学型総合学科である北海道旭川南高等学校では、2、3 年次の自由選択科目として、大学進学に対応した科目の他、看護、社会福祉、韓国語、中国語、ロシア語などが設置されている。ロシア語の授業は、2・3 年生が選択できる「ロシア語基礎」の他、2 年次にロシア語を学習した生徒が選択できる「ロシア語応用」がある（どちらも週 1 回 2 コマ）。今年度は、継続希望者がいなかったため、「ロシア語基礎」のみの開講となった。

II. 日露交流学習

II-1. 日露交流学習プロジェクト

本校は、公益財団法人「国際文化フォーラム」の 2018 年度日露交流事業「日露交流学習プロジェクト」に参加し、サンクト・ペテルブルグ第 83 番学校の日本語教師ナターリア・サヴァチュギナ先生とペアを組み、言語学習と文化理解、相互交流を融合した授業実践を行っている（プロジェクト期間：2018 年 9 月～2019 年 3 月）。

II-2. 対象者・目的・目標

交流授業の対象者は、本校のロシア語基礎クラスの 3 人とサンクト・ペテルブルグ第 83 番学校で日本語を学ぶ 10 年生 10 人である。同校は、1～11 年生までの生徒が選択科目として日本語を学び、日本文化の学習も積極的に行っている学校である。

プロジェクトを開始するにあたり、交流授業に求めるものとして両校で一致したのが、言語学習のモチベーションを上げることであった。ロシア語も日本語も受験には必要のない科目であり、学習言語を使うのは授業だけという現状では、生徒のモチベーションを保つのは難しい。言語学習のモチベーションを高め、文化・社会理解にも繋がる、教科書だけでなく生きた表現を学べる交流授業が出来ないかと考えた。そこで、友だちになる過程で学習言語を用いながらお互いを良く知ることの出来る仕掛けづくりをすることにした。

そして、「自分と身近な人々のこと、学校生活や日常生活のことを学習言語で話せるようになる」、「お互いの日常生活や両国の文化・社会を知り、相互理解を深める」を目標に掲げ、交流授業をスタートさせた。

II-3. 活動の流れ

当初は、共通のテーマを決め、それに合わせて文法・語彙・表現を学び、それを活用してビデオレターを作成し、相手へ送付、お互いに相手のビデオを見てフィードバックするという流れで交流学習を行う予定であった。しかし、旭川側で定期考査や学校行事などによりロシア語の授業数が限られ、思うようにビデオレターを制作出来ない状況にあった。そこで、その間に

ペテルブルグ側に生教材の作成を依頼したり、お互いにアンケートを行うなど、その都度、形態を替えつつ交流を行った。

Ⅱ-4. 実践内容

①ビデオレター「自己紹介」

交流授業のスタートとして、自己紹介ビデオを交換した。旭川側は4月からロシア語の学習を始め、夏休み前の時点ではまだそれほど話せる内容がなく、まだ習っていない表現も暗記しながら、名前・年齢・住んでいる場所・ロシア語を学んでいることを伝えた。

ペテルブルグ側から送られたきたビデオを見た生徒達は、流暢な日本語で趣味や興味のあることを話す同世代の様子に驚き、「自分も同じくらいロシア語で話せるようになりたい」と刺激を受けたようであった。



②生教材ビデオ「放課後はいつも何をしていますか？」/ ビデオレター

9月は定期考査や学校行事のため、ロシア語の授業が1回しかなかったことから、交流が来ないということで、その間に、ペテルブルグ側に生教材としてのビデオレターを提供してもらうことにした。「動詞の変化」を学習していたことから、聞き取り教材にするため、「放課後はいつも何をしていますか？」という質問にそれぞれロシア語で答えてもらい、ビデオに撮り送ってもらった。それを基にテキストを作成し、授業で教材として使用した。教科書の文例では出てこないであろう生の表現を知るとともに、交流相手の日常を知ることが出来た。

後日、旭川側からも放課後の過ごし方についてビデオを撮影し、ペテルブルグへ送った。「部活で絵を描いている」「ネットを見ている」「ゲームをしている」など、自分の実際の日常生活を相手に伝えるために、新しい表現も積極的に覚えていた。



③ビデオレター「質問に答えて下さい！」

次に、ペテルブルグ側からの様々な質問に日本語で答える形で、ビデオレター交換を行った。

「暇な時は何をしていますか?」「夏休みに何をしますか?」などの質問に、最初は母国語で答えるだけだからと準備をせずに撮影をしようとしていた生徒達だが、日本語学習者に分かりやすい日本語を意識して話すようにと伝えと、生徒同士相談をし、分かりやすい表現を意識して答えを考えていた。

④アンケート「好きなもの」

ペテルブルグ側作成の「好きなもの」に関する日本語アンケートを両者で行った。日本の同世代に人気のある作家や歌手を知りたいということで、ロシア語クラスの3人だけではなく、他のクラスの生徒にもアンケートに協力してもらった。

ペテルブルグの生徒のアンケート結果を見て、一人ひとりの趣味や好みなどを知ると同時に、全体として、ロシアでもK-POPが人気であることや、好きな映画に日本のアニメがあげられていること、好きな行事が皆、お正月か誕生日であることなど、自分たちとの共通点や相違点を見つけ出していた。

名前: サーシャ (女)	
1. Какой любимый цвет?	ピンク
2. Какой любимый еда?	たこ焼き
3. Какой любимый мультфильм?	犬
4. Какой любимый время года?	秋
5. Какой любимый праздник / мейс?	バウロ・ロスキーのアルケミスト
6. Какой любимый музыка?	K-POP, J-POP
7. Какой любимый вид спорта?	バレーボール
8. Какой любимый фильм / кино?	僕のトトロ
9. Какой любимый праздник?	お正月
10. Какой любимый персонаж?	灰太
11. Какой любимый хобби (люблю)?	絵を書くこと
12. Что вам нравится из традиционной японской культуры?	茶道
どのような日本の伝統文化に興味がありますか?	
ありがとう!	

⑤ビデオレター「好きな科目」/ 時間割表の交換

相手がどのような教科を学んでいるのか知りたいということで、時間割表と「好きな科目」に関するビデオレターの交換を行った。

初めに、好きな科目・苦手な科目の問い方やその答え方、主な科目のロシア語訳などをプリントで学習した。その後、それぞれが辞書を使いながら自分の時間割表をロシア語に訳し(総合学科のため、選択している科目がそれぞれ異なる)、ビデオレターも作成して送付した。

ペテルブルグ側から届いたビデオレターは、一人が日本語で話した後にもう一人がそのロシア語訳を話すという構成で、交流としてのビデオレターだけでなく、ロシア語の新たな表現も学ぶことの出来る生教材にもなった。

⑥年賀状交換

12月には年賀状の交換を行った。ペアを決め、手書きのカードを作成し、教師がとりまとめて郵送した。自分宛のカードを受け取った生徒達は、クラス全体ではなく自分だけに向けられたメッセージを嬉しそうに読み解いていた。

年賀状交換にあたり、ロシア語クラス3人以外に校内から年賀状を書いてくれる生徒を募集することにした。これを機にロシア語に興味を持ってもらえればと思い、年賀状作成とロシアのお正月・クリスマス紹介を合わせたミニセミナーを開催した。当日は、旭川市の国際交流員であるロシア人のマリアさんにも来てもらい、ロシアに関する生徒達の質問に答えてもらった。また、ロシア語クラスの3人は、他の生徒が年賀状にロシア語で自分の名前とお祝いフレーズを書く際に指導役を務めた。



ペテルブルグからの年賀状には日本語とロシア語で書かれた手紙も同封されており、その手紙に返事を書くことにした。まずは、ロシア語で手紙を書く際のマナーや自分の趣味、天気の話題などの表現を学び、それに辞書を活用する形で手紙を作成した。クラス全体ではなく、1対1になったことで、相手に聞きたいこと、伝えたいことが明確になったのか、翻訳ソフトを活用したり、教師に質問するなど、積極的に取り組んでいた。



当初から予定していた食に関するアンケートを行った.
好き嫌いや地元のおすすめ料理, 自分で料理をするかなど, 様々な質問に母国語と学習言語で答え, 普段の食事の写真も送付した. (ペテルブルグ側のアンケート結果は次回の授業で見ることになっている.)

交流授業は旭川側の学年末である3月で終了するが、最後に1年の集大成として、各自ビデオ名刺を制作する予定である。交流を開始した当初に比べて語彙や表現も増え、1年の成果を目に見える形で残すことができると思う。

初めての試みで当初の計画通りにはいかず、形態を替えながら交流授業を行ってきたが、その都度、生徒達は積極的に取り組んでいた。教室内でのロールプレイングとは異なり、実際に交流相手がいることで、伝えたいことや知りたいことが具体的になり、それがまたモチベーションにも繋がったようだ。やり取りを通して、相手との共通点や相違点を知り、文化の一端を垣間見ることが出来た。また、ロシア語履修者以外にもアンケートや年賀状交換等で協力してもらい、学校内でロシア語クラスの取り組みについて知ってもらう良い機会になった。

IV. 今後の課題・展望

課題として、フィードバックがしっかりと出来なかったことがあげられる。授業時間数が限られるため、次の課題をこなすことを優先してしまい、相手からのビデオメッセージやアンケート結果を見て、お互いに話し合い、さらに相手への質問や感想を考えるとといった時間を十分に持つことが出来なかった

ロシア語履修希望者が少ないため、今後どのような授業を行えるか分からないが、生徒の積極的な取り組みが見られたこのような交流授業をまた行えたと思う。日露の教師が協力して交流授業を作り上げるという今回のプロジェクトに参加できたことは、非常に貴重な経験だった。今回作成したテキストや交流でのやり取りを踏まえ、新たなテキストを作り、今後の授業づくりに活かしていきたい。

(すずきももこ 北海道旭川南高等学校)

第 2 部

今後の展望

ロシア語人材の育成を見据えた高大連携

— 関東国際高等学校の取り組みを通して —

佐山 豪太

I. はじめに

本事業（文部科学省外国語教育強化地域拠点事業、ロシア語）は、地域に貢献するロシア語人材につながる教育課程編成を展望した、ロシア語学習指導案・評価法確立を目標としている。これまでロシア語班は、地域に根ざしたロシア語教育、高校・大学教員の連携、ロシア語の人材育成を念頭に置いた教育課程を検討してきた¹。

本稿は、強化地域拠点校の一つである関東国際高等学校（東京、渋谷区）が行なっている、ロシア語の人材育成を見据えた高大連携とその成果について人材育成の観点から言及する。まず、以下でロシア語教育に存在する問題に触れ、なぜ高大連携と人材育成を視野に入れた取り組みが必要かを議論する。

I-1. ロシア語教育が抱える諸問題

大学におけるロシア語教育には、英語にはないロシア語特有の問題が存在する。まず、多くの場合、ロシア語は十分な授業数を確保できないという環境的な制約を抱えている（cf. 金子 2016; 黒岩 2016; Подалко 2016; Хаясида 2016）。また、大半の学習者が大学入学時からロシア語を始めるため、英語とは異なり、大学入学までの知識の『貯金』がないと言える。くわえて、ロシア語の文法的な複雑さも学習を困難にする要因として挙げることができる。仮に限られた時間しかない第2外国語としてロシア語を教える場合、初めて見るであろうキリル文字や、複雑な名詞の格変化・動詞の活用という項目は大きな学習課題となる（Хаясида 2016: 27）。

高等学校におけるロシア語教育にも同様の問題が見受けられる：まず、高等学校のロシア語の開設状況を確認する（これに関しては、林田（2014, 2018）が詳細に報告している）。以下に、ロシア語課程開設学校数・履修者の推移をまとめた表を挙げる。

表 1. ロシア語課程開設学校数・履修者の推移（林田 2018: 1）

	公立		私立		総数	
	開設学校数	履修者数	開設学校数	履修者数	開設学校数	履修者数
2005	20	350	5	112	25	462
2007	24	400	15	144	39	544
2009	17	456	4	111	21	567
2012	18	425	5	124	23	549
2014	23	628	4	167	27	795
2016	20	559	5	179	25	738

このように、現状、高等学校においてロシア語が普及しているとは言えない。また、開講はし

¹ 当事業におけるロシア語班のこれまでの活動は、林田（2018）が詳しくまとめている。

ていても、ほとんどの高等学校は週 3 時間以下の時間数しか確保できていない²。したがって、高等学校においても、大学のロシア語教育が抱える問題と同じ現象が散見される。また、開設校自体が少ないという根幹的な問題に関連して、教科としてのロシア語の教員採用はほぼ行われていない (林田 2014: 3) という事態は、今後のロシア語人材育成の観点からすると深刻である。他にも、「高校生に適したロシア語教材が未整備であるという問題もある」(林田 2014: 5)。

I-2. 高大連携の重要性

現在では、日本ロシア語教育研究会が主催する定期的な例会や後述する科研事業の成果により、高校と大学の教員間に業務上の連携が生まれ、機能し始めている。例えば、教材、授業案、そして経験の共有が高校と大学教員の間で可能となり、同時に、両者が抱える問題の洗い出しやその解決法の模索においても協力関係が築かれるようになった(詳細は林田(編) 2018 を参照)。

ただ、人材育成という観点からした高大連携はまだ改善の余地のある項目であると考えられる。(そもそもロシア語の授業を開講している高等学校が少ないという根本的な母数の問題はあるが)、ロシア語、もしくはロシア文化に早い段階で触れさせる試みは、大学入学後の学習において良い影響を与え、学生の動機付けを高めるであろう。では、優秀なロシア語人材の育成を見据えて、どのような取り組みが可能であろうか。本稿では以下の II で関東国際高等学校の活動について言及する。

II. 高大連携の取り組み例

高大連携による教員間ネットワークの確立は、定期的な研究会の開催、教育支援サイト³の立ち上げ、教材開発共同プロジェクト等によって推進されてきたが (林田 2014: 8-9)、これは主に 2 つの科研事業が結実した成果であると言える (①「大学間、高等学校－大学間ロシア語教育ネットワークの確立」基盤研究 (B) 23320114, 研究代表: 林田理恵, 2011-2015 年度 / ②「高等学校のロシア語教員に関する縦断的研究: 教師養成のための支援体制の確立」基盤研究 (C) 25370715, 研究代表: 横井幸子, 2013-2015 年度)。ここでは、関東国際高等学校で実施された、中高大連携の成果の一つである取り組みを紹介する。

II-1. 関東国際高等学校 ロシア語コースの概要⁴

本校は、普通科の他に外国語科を開設しており、ロシア語を含む「近隣語各コース」(他に、中国語、韓国語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語) を用意している。

ロシア語コースの在籍生徒数 (2019 年 1 月時点) は、1 年生が 19 名、2 年生が 11 名、3 年生が 19 名である。一週間の学習時間は、1 年次は 5 時間、2 年次は 6 時間、3 年次は 4 時間～10 時間である。ロシア極東連邦大学 (ウラジオストック) に提携校を持つ。卒業生は、ほぼ全員が 4 年制の大学に進学する。使用している教科書は 1・2 年次がパスポート (中島他 2005)、3 年次が *Поехали! (Чернышов 2001)* である (必要に応じて補助プリントを作成している)。

² 週 3 時間以上の授業を実施している高校は、本稿で紹介する関東国際高等学校 (外国語科, 必修科目)、富山高等専門学校 (国際ビジネス科・選択必修)、早稲田高等学院 (1・2 年次のみ週 3)、そして根室西高校 (3 年次のみ週 3) の 4 校のみである (林田 2014: 3)。

³ URL は以下の通りである: <http://kyoiku-ru.org/>

⁴ 関東国際高等学校の概要は、永沼 (2019) の資料と II-2 で後述する意見交換会で得た情報に基づいている。

本校は学年別にロシア語コースの教育目標を設定しており、2年次にはロシア語検定4級の取得を目指しており、近隣語の検定試験とCEFRの対応表も作成している。

表 2. CEFR と近隣語の検定試験の対応表 (永沼 2019)

CEFR と各言語検定対応表						
	基礎段階の 言語使用者		自立した 言語使用者		熟練した 言語使用者	
	A1	A2	B1	B2	C1	C2
英検	3級	準2級	2級	準1級	1級	
TOEFL iBT			42～71	72～94	95～120	
IELTS	2.0	3.0	4.0～5.0	5.5～6.5	7.0～8.0	8.5～9.0
TEAP		150～225	226～333	334～399	400	
中国語検定	準4級	4級	3級	2級	準1級	1級
漢語水平考試(HSK)	1級	2級	3級	4級	5級	6級
韓国語能力試験(TOPIK)	1級	2級	3級	4級	5級	6級
ハングル能力検定	5級	4級	3級	準2級	2級	1級
ロシア語能力検定試験		4級	3級	2級	1級	
実用タイ語検定試験	5級	4級	3級	準2級	2級	1級
インドネシア語技能検定試験		E級	D級	C級	B級	A級

近隣語の各コースが、欧州における外国語習得の到達基準であるCEFRとの連携を図っている様子がうかがえる。なお、ロシア語の検定試験として、上記表にある「ロシア語能力検定試験」以外に、ロシア連邦教育科学省の認定による外国語としてのロシア語検定(露: Тест по русскому языку как иностранному / 英: Test of Russian as a Foreign Language, 以下TORFL)が存在する。この検定試験はCEFRに対応している。参考情報として、以下にCEFRとTORFLのレベルの対応を挙げる。

表 3. CEFR と TORFL におけるレベルの対応 (Андрюшина (ред.) 2014: 4)

言語運用のレベル					
レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4	レベル 5	レベル 6
ロシア連邦のシステム (TORFL)					
入門レベル	基礎レベル	第1レベル	第2レベル	第3レベル	第4レベル
欧州式のシステム (CEFR)					
A1	A2	B1	B2	C1	C2

TORFLはレベル毎に語彙リストを作成しており、それらはロシアだけでなく日本でも、教材に導入する語彙の選定基準や文法事項の参照元として用いられている。なお、大阪大学では、TORFLはすでにカリキュラムに正規導入されている(林田 2016)⁵。

II-2. 関東国際高等学校における取り組み

⁵ 大阪大学外国語学部ロシア語専攻では、その前身である大阪外国語大学時代の2000年度より、TORFLに基づくロシア語の総合試験が実施されている(詳細は林田(2016: 145-148)を参照)。

ここでは、①関東国際高等学校と原宿外苑中学校（渋谷区）の交流会、②関東国際高等学校の公開授業について言及する。

① 関東国際高校と原宿外苑中学校（渋谷区）の交流会

2017年に引き続き、2018年11月13日（土）に関東国際高等学校と原宿外苑中学校の交流会が実施された。2017年の交流会（キックオフミーティング）では、「ロシアをキーワードに地域内の青少年が集い、関心を高める」という目標が掲げられた。具体的な活動内容は、ロシアに関するクイズ、ロシア語の簡単な挨拶の学習、日露の文化の違いをテーマとした話し合い、ロシアの遊びの4点であった。

2018年度の交流会では、「実際にキリル文字を使ってみよう」というテーマで大学生⁶、高校生、中学生、ロシア人留学生⁷がグループに分かれて、一緒にロシア語のアルファベットを学んだ。具体的には、ロシア語を初めて目にするであろう中学生に対して、キリル文字で名前、日本の地図、路線図、食品名などを表記してもらい、それをロシア人に理解してもらうという取り組みであった。全体を通して、主に高校生が中学生に文字の書き方などを教え、その補助に大学生があたっていた。前回と比べると、2018年度の交流会はロシアの文化ではなく、実際にロシア語（キリル文字）に触れるといった特色を有している。

以下に作業中の写真を挙げる⁸。

画像 1. 作業の様子①



画像 2. 作業の様子②



画像 3. キリル文字表記の都道府県

画像 4. キリル文字表記の「奥の細道」

⁶ 当交流会に参加した大学生は11名であった（津田塾大学、法政大学、上智大学）。

⁷ 参加したのは、筑波大学で学ぶロシア人留学生3名であった。

⁸ 写真は関東国際高等学校の配布物から引用した。



上記写真が示すように、各班がキリル文字表記で日本文化・地理に関するポスターを作成した。ポスターが完成したら、そこに書かれた内容をロシア語のネイティブスピーカーに実際に読み上げてもらい、中学生が自分たちで書いたロシア語が通じるかどうかを確認した。

② 公開授業・意見交換会

2019年1月28日、関東国際高等学校にてロシア語の公開授業が行われた。授業で扱われた項目は、名詞・形容詞の格変化（単数）のまとめである。

公開授業の後、大学・高校の教員、教育関係者などで意見交換会が開催され、本校のロシア語コースで教鞭を執る永沼栄理子氏がロシア語コースにおける教育の現状と課題を報告した。まず都内の大学・高校教員、教育関係者が集まること自体が非常に珍しく、貴重な機会であった。

意見交換会の場で、上述の①の交流会にて、ロシア語だけでなくロシア人の実際の音声に触れることができ、原宿外苑中学校の生徒は喜んでいたという話を聞くことができた。また、高校生や中学生が2020年に開催されるオリンピックに何らかの形で参画できないかについて話し合った（例えば、渋谷区内の道案内の表記にロシア語を追加する、など）。

Ⅲ. 交流会の成果：動機付けの観点から

科研事業の一環として、主に第二外国語として独語、仏語、西語、中国語、韓国語、露語を学ぶ学習者に対して、2012年度にアンケートを実施し、学習環境が学習者の動機づけにどう影響するのかを調査した⁹。理論的な背景として、データの分析には自己決定理論 (Self-Determination Theory) ¹⁰を用いた。アンケート調査の結果、ロシア語学習者の動機付けは、他の言語の学習者に比べて非常に高いことが明らかになった。

⁹ 当アンケートは、基盤研究 (A)「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語枠組みの総合研究」(代表：西山教行、課題番号：23320114)と基盤研究 (B)「大学間、高等教育—大学間ロシア語教育ネットワークの確立」(代表：林田理恵、課題番号：23320114)」の合同事業として行われた。

¹⁰ これは心理学における行為者の動機づけに関する理論である。人間に生得的に備わっている成長への心理的欲求が、周りの社会文化的要因とどのように相互作用しながら発展・衰退するのか、といった問題を議論する際に用いられる。外国語学習の分野において、当理論は学習に対する取り組みや学習成果を検討する際の動機づけの分析に適用される。

表 4. 6 言語別内発的動機づけ¹¹の平均値（露語：被験者数= 1,109 / 最大値 5）

独語	仏語	中国語	西語	韓国語	露語
3.28	3.52	3.18	3.51	3.55	3.58
露語 > 韓国語 > 仏語 > 西語 > **独語 > ***中国語				** p <.01	***p<.001

内発的動機づけの値は、6 言語の中でロシア語が最も高い（アンケートの詳細な見方は、林田 (2016)を参照）。なお、本科研ではなぜ「ロシア語を勉強しているのか？」といった自由記述形式の質的なアンケートも同時に実施した。その結果、**ロシア語学習理由のうち「興味」を挙げる回答者が高校でも、大学でも高いことがわかった**（詳細は金子 (2016)参照）。通常、中学生・高校生の段階で、ロシア文化またはロシア語へ興味を抱く機会に巡り合うことは少ない。そのため、動機付けを刺激したという点で、**ロシアを知る機会を提供した上記交流会が果たした役割は大きい**と言えよう。

また、同様のアンケートを対象とした金子 (2016: 185-187)の分析によると、学習理由の最上位には**文字を含むロシア語への興味**が挙げられている。今回の交流会の特筆すべき点は、**実際にロシア語（キリル文字）に中学生が触れたことにある**。自らの名前や日本の地名などをキリル文字表記することは、これまで未知の存在であったロシア語に対する好奇心、親近感、もしくは興味を駆り立てる要因となったであろう。他にも、自らが書いたキリル文字をロシア語のネイティブスピーカーに発音してもらうという試みは中学生にとって成功体験であり、達成感を呼び起こしたものであると考える。

IV. まとめと今後の課題

III で言及したように、関東国際高等学校と原宿外苑中学校の交流会は、学習者の動機付けを刺激する取り組みであると言える。初歩的であるとはいえ、ロシア語に触れさせる場所と時間を創り出すという試みは、先を見据えた人材育成の観点からも重要である。この交流会を経て、ロシア語に興味を抱いた中学生が高校でロシア語を学び、それが大学でのロシア語学習へとつながっていく。動機付けの高い優秀な学習者を育てるという観点からすると、交流会は「草の根」的な活動ではあるが、いずれこれが高校における複数外国語の必修化¹²の呼び水となり、さらにはロシア語学習者の増加を誘発し、結果として優れたロシア語人材の登場へとつながると考える。

交流会の問題点としては、大学生に役割が事前に割り振られていなかったことが挙げられる。これは事前に話し合いの時間がなかったためであろう。「中高大連携」がこの交流会の標語であるため、今後は各参加者の連携を密にしていく必要がある。また、当交流会を通じて、中高生の、例えば、動機付けがどのように変化したかを自己決定理論などを用いて分析し、客観的にその重要性を評価できるようなモデルを検討する必要があるかもしれない。これらは今後の課

¹¹ 内発的動機付けとは「～語が好きだ、～語が楽しい」といった状態を指し、動機づけの尺度として最も高い位置に属する。

¹² 現在、多言語教育推進研究会が高等学校における複数外国語の必修化を目指し、英語以外の外国語の学習指導要領（JALP 多言語教育推進研究会 2016）を提言している。

題と言えよう.

(さやまごうた 上智大学)

参考文献一覧

- 金子百合子. 2016. 「岩手大学における語学教育の動向と ICT コンテンツ活用によるロシア語自律学習支援」『ロシア語教育ネットワークの確立と今後の展望 (研究成果最終報告書)』, 13-22 頁.
- 黒岩幸子. 2016. 「岩手県立大学のロシア語教育」『ロシア語教育ネットワークの確立と今後の展望 (研究成果最終報告書)』, 23-43 頁.
- JALP 多言語教育推進研究会. 2016. 「『第 2 の外国語』学習指導要領 (案)」『日本言語政策学会』
URL: http://jalp.jp/wp/?page_id=1069.
- 中島由美, 柳町裕子, 黒田龍之助. 2005. 『ロシア語へのパスポート』, 東京: 白水社.
- 永沼栄理子. 2019. 『2018 年度ロシア語教育地域拠点事業 公開授業』(公開授業用プリント), 東京: 関東国際高等学校.
- 林田理恵. 2014. 「ロシア語教育実情調査 - 将来的展望と中等・高等教育機関連携の可能性-」『複言語・多言語教育研究』2, 60-71 頁.
- 林田理恵(編). 2016. 『ロシア語教育ネットワークの確立と今後の展望 (研究成果最終報告書)』, 大阪: 大阪大学言語文化研究科, 林田理恵研究室.
- 林田理恵(編). 2018. 『地域に貢献するロシア語人材につながる教育課程編成を展望した, ロシア語学習指導案・評価法確立のための基礎研究』, 大阪: 大阪大学言語文化研究科, 林田理恵研究室.
- Андрюшина, Н.П. (ред.). 2014. *Лексический минимум по русскому языку как иностранному. I сертификационный уровень. Общее владение, 7-е изд.*, СПб: Златоуст.
- Подалко, П.Э. 2016. “Историко-культурные аспекты изучения русского языка в Японии”, *Русский язык за рубежом (Русистика Японии)*, С.63-68.
- Хаясида, Р. 2016, “В каком направлении должно двигаться сегодня преподавание русского языка в Японии”, *Русский язык за рубежом (Русистика Японии)*, С.21-30.
- Чернышов, С. 2001. *Поехали! русский язык для взрослых : начальный курс*, Санкт-Петербург: Златоуст.

平成 30 年度の取り組みを振り返って

高橋 健一郎

I. はじめに

平成 30 年度の「グローバル化に対応した外国語教育推進事業（ロシア語）」において、筆者は、拠点学校の一つである札幌丘珠高等学校（以下、「丘珠高校」とする）の「異文化理解と交流を軸としたロシア語学習効果の考察」という取り組みの運営指導委員を務めた。この取り組みは、札幌大学出張講義としてのロシア文化入門講義と、丘珠高校とロシア・ノヴォシビルスクの「シベリア北海道センター」との間で行われたクイズビデオレター制作からなる。本稿では、その事業を簡単に振り返り、今後の展望を素描してみたい。

II. ロシア文化入門講義

平成 30 年 9 月 18 日、札幌に滞在中のロシア人音楽家アンドレイ・クガエフスキー（Андрей Кугаевский）氏を連れて丘珠高校を訪れ、1 年生の英語の授業と、3 年生のロシア語の授業の時間を借り、2 回の講演を行った。

ロシアのグリнка記念ノヴォシビルスク音楽院のクガエフスキー教授は、国内外の数々の音楽コンクールで優勝し、ロシア全土のみならず、世界で知られている偉大なドームラ奏者である（ドームラについては後述）。今回、コンサート出演のために札幌に滞在中のところ、ロシアに関心をもつ高校生のためにということで、無償で講演を引き受けて下さった。

クガエフスキー氏は、音楽が人生にとっていかに大切かという人生論や、音楽とはそもそも何かといったお話とともに、ロシアの伝統的な楽器ドームラの歴史についても詳しくお話され、最後には実際にドームラで曲を演奏して下さった。

ドームラとは、一般によく知られたバラライカよりもさらに古い楽器で、中世のロシアで「スコモローフ」（скоморох）と呼ばれる旅芸人が演奏していた楽器である。当時のスコモローフたちは、庶民の結婚式など様々な行事や儀式に呼ばれて各地を転々とし、歌や演奏、踊り、手品などの見世物で人々を楽しませていた。しかし、しばしば教会や権力への風刺を伴った出し物を上演していたため、権力側に危険視され、17 世紀にはスコモローフの活動が禁止され、ドームラもすべて燃やされてしまった。本来であれば、17 世紀から 19 世紀にかけて、他の音楽ジャンルが経験したように、華々しい発展期を迎えたことだろうが、実際にはこのようにドームラの音楽はいったん完全に途絶えてしまったのである。しかし、19 世紀後半になって、ドームラの図面が残っているのが発見されたのを機に、楽器本体が復元され、ドームラの音楽も復活を遂げた。現在では、ロシアの各地で演奏されるようになっているという。



クガエフスキー氏はこのようなお話をロシア語で話され、筆者が日本語に訳した。生徒たちは、生のロシア語を耳にし、ロシアの伝統的な楽器の音を聴き、通常の学校の授業ではけっして出てくることのないロシアの歴史の話、音楽文化に関する話を聞くことができ、貴重な異文

化体験となったことであろう。

また、クガエフスキー氏は、丘珠高校の生徒たちが交流事業を行うことになっているノヴォシビルスク出身であり、交流事業のパートナーである「シベリア北海道センター」とも関係が深く、今回の講義は、ある意味、交流事業の前の露払い的な役割を果たしたのではないかとと思われる。

もっとも、今回の講演は、事業の取り組み全体の中の位置づけをはっきりさせないまま行われた。これはこれで十分大きな意義のある試みではあったが、今後、異文化理解、異文化交流の全体的な取り組みの見取り図の中でテーマを設定し、クイズビデオレター制作と有機的に関連するような内容にすることが求められるだろう。



Ⅲ. クイズビデオレター制作

平成 30 年度の秋から冬にかけては、丘珠高校とノヴォシビルスクの「シベリア北海道センター」との間で、お互いの文化に関するクイズの映像を、それぞれ自分の言語と相手の言語の両言語を使いながら制作し、Whatsup で送り合うという交流が進められた。

これは、ICT を活用した、現代ならではの新しい試みである。自分の文化について客観的に考えるようになること、自分が発信したいことを外国語で表現するという能動的な外国語学習ができること、教科書では扱われることのない生のロシアの様子を知ることができること、相手とつながっているという実感を得られることなど、様々なメリットがあり、全体としてとても有意義な試みであると言える。

しかし、その一方で、数少ない授業時間数の中で、クイズの問題を考え、ロシア語に訳し、撮影する、という作業は、多大な時間と労力を必要とするものでありながら、その結果出来上がるビデオレターはかなり短いものとなる。これを一回きりで終わらせると、「労多くして功少なし」というおそれがあるだろう。

今年度のこのプロジェクトに関する詳細な報告は丘珠高校の遠藤教諭に譲り、筆者は、今後この試みをいかにさらに有意義なものにできるか、その可能性を探ってみたい。

Ⅲ-1. 体系的ストーリー化

まず、個々のクイズの寄せ集めではなく、体系的なストーリーを構築することが有効であると思われる。例えば、今年度の取り組みにおいては、高校の中の「下駄箱」や「掃除箱」を撮影し、その中に何が入っているか、という選択式のクイズ問題があった。大変興味深い問題だ

と思われるが、これを個別の興味深い例として終わらせるのではなく、「学校」という全体のテーマの中にこれらを含めながら、体系的なストーリーを作れないだろうか。例えば、すべてをクイズ形式にするのではなく、日本の学校の様々な側面を取り上げて映像化し、適宜説明を加えながら、ところどころクイズを織り交ぜるというのも可能だろう。

Ⅲ-2. 背景的情報の伝達

上記のようなストーリーの中では、やや教科書的な情報となるが、日本の学校制度についての背景的な情報を伝えることも必要であると思われる。

例えば、基本的なこととして、日本の「高校」という組織は、ロシアには正確に対応するものはない。相手のロシア人には、日本の学校が、ロシアと異なり、「小学校」、「中学校」、「高校」からなっていること、義務教育が小中学校の9年間であることなどについての簡単な知識を伝え、「高校」が日本の教育制度の中でどのような位置にあるかを伝えるのも必要だろう。

さらに、高校ではどのような科目を学んでいるのか、授業以外にどのような学校行事があるのかなど、全体的な学校の背景知識を日本語とロシア語で伝えても興味深いだろう。

Ⅲ-3. 具体的ストーリーの構築

そのうえで、「生徒の一日」を描きながら、すでに試みのあった「下駄箱」や「掃除箱」などを含む、学校空間の様々な事物、生徒たちの服装、食事などについての情報を織り込んで、一つのストーリーを構築してはどうだろうか。

学校空間であれば、校門から校舎の全体、玄関、職員室、通常の教室、音楽室、理科室、図書室、体育館その他、学校内のあらゆる場所を撮影し、その中で何か日本特有のものや、ロシアの人にとって興味深いと思われるものを特に取り上げて、クイズにしてもいいだろう。

また、生徒たちの衣服もロシア人にとって大変興味深いものだろう。日本の学校の制服は海外でも人気があり、丘珠高校の制服だけでなく、日本の様々な学校の制服の紹介をしてもいいかもしれない。さらに、上履きや下駄箱、体操服なども取り上げることが可能である。

学校における食事に関心と呼ぶテーマとなり得よう。弁当はクイズの題材にもなり得るほか、日本とロシアで大きく異なる食文化に関する貴重な情報となり得る。

もちろん、授業風景も映像化にふさわしい。授業のやり方が、日本とロシアでどう異なるかなど、関心と呼ぶテーマであろう。

部活動も日本とロシアで大きく異なるため、「学校」というテーマの中の良いサブテーマとなる。学校内の放課後の部活動のようなものは、ロシアでは存在しない学校も多く、そもそも「部活動」という概念が伝わりにくい。それゆえに、どのような部活動をやっているのかを映像化して伝えること自体が異文化理解にとって重要である。さらに、部活動の意義について、日本側、ロシア側の生徒たちのそれぞれが後でディスカッションすることも可能だろう。

Ⅲ-4. 語学学習の要素

ロシア語初学者の高校生にとって、これらの内容をロシア語ですべて表現するのはかなり困難であろう。しかし、簡単な自己紹介表現のほか、「これは何ですか？—これは…です」(«Что это?—Это …»), 「そこには何がありますか?」(«Что там?—Там …») など平易なパターンに名詞を当てはめていくことにより、かなりのことが表現可能である。さらに、「…は気に入りましたか?」(«Вам понравился…?»), 「どう思いますか?」(«Что вы думаете?»), 「そちらではどう

ですか？」(«А как у вас?») など、簡単な質問表現を織り交ぜてもいい。これら新しい文法事項は、授業で説明しながら、その実践としてビデオレターに取り入れれば、語学学習としても効果的だろうと思われる。

Ⅲ-5. 高大連携の可能性

上記の通り、ビデオレターの内容をすべて高校生がロシア語で表現するのは非常に困難である。現在、丘珠高校と札幌大学は高大連携の事業を行っており、その枠内で、札幌大学のロシア語専攻の学生との共同作業を考えることが可能であろう。

高校と大学は地理的にかなり離れており、また、時間的な制約もあり、高校生と大学生が実際に集まって作業をすることは難しいかもしれないが、本取り組みは ICT を活用したものであるがゆえに、離れていても十分共同制作が可能である。ロシア語への翻訳や、ロシア語の朗読など、いくつかの部分で札幌大学の学生に参加してもらう可能性を考えていきたい。

Ⅲ-6. 振り返り

この取り組みは、当然ビデオレターを制作して終わりというものではない。相手のビデオレターを見ること、そして、自分たちのビデオレターに関する相手の反応を知ることも大きな学びにつながる。

ロシア側のビデオレターを見ることにより、ロシアの新しい事物を知り、日本の同種のものとの比較をしながら、自国の文化に関する理解を深めることにもなるだろう。この比較対照を効果的なものにするためには、日本側とロシア側が同じテーマでビデオレターを制作するのがよいだろう。

また、実際にビデオレターを制作する際には、相手がどのようなことに関心があるかを予想しながら制作するのだが、実際に相手に見てもらい、感想や質問を返してもらうことにより、その予想が正しい場合も、正しくない場合も、大きな気づきが得られるだろう。その意味で、このフィードバックは大変重要である。

さらに、上でも触れたように、テーマによっては、ディスカッションによって理解を深めることも可能であろう。

Ⅲ-7. シリーズ化

本稿では、一つの例として「学校」というテーマを想定し、どのような内容を盛り込むことができるか考えてきたが、ほかにも、例えば、「伝統文化」、「食文化」、「ファッション」その他、様々なテーマを考えることができるだろう。いくつかのテーマによるビデオレターのやり取りを積み重ねていくことで、大きな教育効果を期待することができるのではないだろうか。

(たかはし けんいちろう 札幌大学)

ロシア語の授業で「文化」をどのように扱うか

小田桐 奈美

I. はじめに

本稿では、ロシア語の授業における文化の扱い方について考えてみたい¹³。日々の授業をより充実させる試みの一環として、言語面だけでなく、文化面の学習を積極的に取り入れている教師も多いだろう。実際、筆者が毎学期末に実施している授業アンケートでは、授業で良かった点として、言語だけでなく文化も学べた点が挙げられることが多く、文化に対する学習者の関心も高いと考えられる。また、ロシア語の授業を通して、学習者にロシア文化の魅力を伝えたいと願っている教師も多いのではないだろうか。

外国語の授業で、言語そのものの学習だけでなく、文化の学習を取り入れる必要性については、すでにロシア語以外の様々な言語の教育でも強調されている。例えば塩澤 (2010: 9-14) は、英語の授業で文化を扱う必要がある理由として、①そもそも文化と言語が切り離せないこと、②外国語を学ぶ目的が、異なる文化を持つ人間とのコミュニケーションであること、そして③文化相対主義¹⁴の理解を深めることによって、国際理解や平和共存への貢献につながることを挙げている¹⁵。

ロシア語教育においては、授業時間数の不足から、文化を取り上げる余裕が無いという事情や、限られた時間の中では、文法学習に限定した方が効果的であるという意見もあるかもしれない。だが本稿では、ロシア語の授業で文化を取り上げることに意義があるという点を前提にした上で、文化として、何を、どのように取り上げるのか、また授業で文化を取り上げる際にどのような点に注意が必要なのかを検討したい。

II. 文化とは？

そもそも文化とは何か？と考えると、文化の定義は無数に存在する。例えば、外国語学習の指針である『外国語学習のめやす』(以下「めやす」とする)は、文化を広くとらえ、「人びとの生活様式や行動様式、それらの背景にある抽象化された価値観や考え方、感じ方などを含む、生活体系全体を指すことば」として定義している(公益財団法人国際文化フォーラム編 2013: 26)。

また「めやす」は、①言語と直接結びついている文化と、②言語使用の場面・状況およびコミュニケーションの相手を理解するために必要と思われる、言語の背景にある文化を学習の対象としている。①は、敬語の使い方や語彙の特徴など、言語そのものに表象する文化で、呼称などの言語行動や、身ぶり・表情、習慣的行動などの非言語行動が含まれる。②には、日常の

¹³ 本稿は、国際文化フォーラム主催「日本の高校ロシア語教師研修 2017」において、筆者が行った講義内容の一部を発展させたものである。講義の準備・実施にあたっては、関係者の皆さまから貴重なコメントをいただいた。ここに感謝を記したい。

¹⁴ どの文化にも優劣はないとする立場。

¹⁵ その他、第二言語話者にとって、異文化コミュニケーションに必要なルールを自然に身につけるのは困難であるため、学習の必要があることなど、合計 8 つの理由を挙げている。

生活様式（学校・家庭・社会生活）や行動様式，考え方，感じ方，価値観をはじめ，教育などの制度，社会，宗教，さらに文化の形成に影響を与えている地理，歴史，自然環境なども含まれる（公益財団法人国際文化フォーラム編 2013: 26）。

本稿では，以上の定義を採用し，文化を広くとらえることとする。

Ⅲ. 文化として何を取り上げるのか

それでは，ロシア語の授業では，文化として何を取り上げることが考えられるだろうか。「めやす」のロシア語教育版である横井ほか（2016）¹⁶では，15 の話題分野¹⁷それぞれに，着目すると思われる文化事象例が挙げられている。それらには，前述した 2 つの文化の側面，すなわち①言語と直接結びついている文化と，②言語の背景にある文化の両方が含まれている。

例えば，話題分野「人とのつきあい」では，関連する表現として，あいさつ表現，電話で使う表現，お祝いの表現などが取り上げられている。この話題分野に関連する文化事象としては，「人の呼び方・呼びかけ」のルール，例えば目上の人に対しては名前＋父称で呼びかけるが，親しい相手には愛称形を使うことや，**вы** と **ты** の使い分けが取り上げられており，これは①に該当するだろう。一方，その他の文化事象として挙げられている「贈り物のタブー（偶数の花やハンカチ）」，「SNS（Одноклассники や ВКонтакте など，ロシア語圏独自の SNS）」，「招待・おもてなし（友人を自宅に招く頻度や招待の仕方）」は，②に該当するといえる。

それでは，こういった文化事象を実際に授業で取り上げる際，どのような点に注意が必要があるだろうか。

Ⅲ-1. ステレオタイプの回避

第一に，「ロシア語では〇〇の場合××と言う」や「ロシアでは△△である」と取り上げる場合，学習者は新たな知識を得られる一方で，固定的なステレオタイプの植え付けになってしまう危険性があることが挙げられる。

例えば久保田（印刷中: 1）は，日本語教育において文化を扱う際，伝統芸能や映画の鑑賞，日本の生活習慣やボディランゲージ，ポップカルチャーなどの学習が想定されることを指摘した上で，以下の通り注意を促している。

文化は，日本語教育において身近でありふれた概念であるように見えるが，その一方で，またはそれ故に，単純化された理解に陥り，言語教育の究極目的である自己・他者理解または異質なものに対する受容的態度を阻む危険性を含んだ存在なのである。

本稿の冒頭で述べた通り，外国語の授業で文化を取り入れる理由の 1 つとして，文化相対主義の理解を深めることによる国際理解や平和共存への貢献が挙げられる。だが，文化の扱い方によっては，単純化された他者理解につながり，逆の効果がもたらされる場合があるという

¹⁶ 以下の URL から無料でダウンロード可能。http://tjf.or.jp/pdf/meyasu_ru_final.pdf[2019 年 2 月 14 日最終閲覧]

¹⁷ 15 の話題分野は以下のとおり。自分と身近な人びと，学校生活，日常生活，食，衣とファッション，住まい，からだと健康，趣味と遊び，買い物，交通と旅行，人とのつきあい，行事，地域社会と世界，自然環境，ことば。

ことだ。

Ⅲ-2. ロシア語圏の多様性

第二の注意点は、ある言語と特定の国・地域を安易にイコールで結びつけず、その言語が使用される空間の多様性に配慮する必要があることである。例えば中村（2010: 78-79）は、中学校・高校の英語教科書を分析した複数の研究成果を参照した上で、近年、中学校・高校の英語教科書において見られる特徴として、以下の点を挙げている。すなわち、欧米色が弱まり、アジア・アフリカ・中南米の比重が拡大していること、また英語非母語話者同士の交流が取り上げられ、英語の多様性を認識させる工夫が見られること、さらに環境問題などのグローバルなテーマが増加していることである。

実際、ロシア語についても、安易にロシア語＝ロシアとイコールで結びつけることはできず、ロシア語圏の多様性に目を配る必要がある。ロシア語圏の多様性を理解するためのトピックとしては、以下が例として考えられる。

①多民族・多言語国家としてのロシア

ロシアは多民族・多言語国家で、人口 100 万人以上の民族に注目すると、民族構成は以下の通りである（2010 年国際調査¹⁸）。ロシア人（80.9%）、タタール人（3.87%）、ウクライナ人（1.41%）、バシキール人（1.15%）、チュヴァシ人（1.05%）、チェチェン人（1.04%）、アルメニア人（0.86%）。

ロシア連邦を構成する民族共和国（タタールスタン共和国、サハ共和国など）では、ロシア連邦全体の国家語であるロシア語に加えて、各共和国独自の国家語（タタール語やサハ語など）が定められている。ロシア国内で使われているロシア語以外の言語は、ロシア語と同じスラヴ系の言語から、テュルク系、ツングース系、モンゴル系、コーカサス系など、多岐に渡る。

②ロシア以外のロシア語圏におけるロシア語の位置付け

旧ソ連諸国はロシア以外に 14 カ国あるが、同地域では、帝政ロシアおよびソ連時代にロシア語が広く普及した歴史的背景がある。1991 年のソ連崩壊以降のロシア語使用状況は、国・地域によって異なる。現在でもロシア語が広く使われているところでは、ベラルーシのように、基幹民族¹⁹語であるベラルーシ語に加えてロシア語が国家語として定められていたり、キルギスのように公用語である場合もある。

③ロシア人以外でロシア語を第一言語とする人々

特にソ連崩壊以降、旧ソ連諸国において基幹民族の言語を国家語として推進する動きが活発化する中で、基幹民族でありながらロシア語の方を得意とする人々が、以下のように批判的に呼ばれることもある。カザフ語が苦手なカザフ人：shala-kazakh（ハーフ・カザフ）、キルギス語が苦手なキルギス人：kirgiz（kyrgyz のロシア風発音）、chala-kyrgyz（ハーフ・キルギス）など。

基幹民族以外の民族については、自身の民族語を保持している場合もあれば、ロシア語を第一言語とする場合もある。例えば中央アジアには、スターリン時代に故郷から強制移住させら

¹⁸ ロシア連邦統計庁ホームページより（<http://www.gks.ru/>）。[2019 年 2 月 12 日最終閲覧]

¹⁹ 旧ソ連の各国（あるいはロシア連邦内の民族共和国）にその名を冠する民族のこと。ベラルーシのベラルーシ人、ウズベキスタンのウズベク人など。名称民族と呼ばれることもある。

れた朝鮮人の子孫が多く居住している。現代の世代は、概して第一言語がロシア語で、名前もロシア風である場合が多い。

④ロシア以外で生まれ育った「ロシア人」

ソ連時代には、ソ連全体で考えると多数派であったロシア人は、ソ連崩壊後、各旧ソ連諸国で立場が逆転し、少数派となった。中央アジアのロシア人を例にすると、地元民族の言語や文化を尊重する人もいれば、強いアジア蔑視の意識を持つ人もいる。移住の機会をうかがっている人がいる一方、中央アジアを故郷と考え移住を望まない人もいる。ロシアの同胞との違いを指摘し、自分たちはロシアのロシア人ほど酒を飲まず、より仕事熱心で、客のもてなしを大切にすると語る人もいる（岡 2010: 182）。

このように、ロシア語は、ロシア国内のロシア人だけでなく、ロシアの他の民族、さらにロシア国外で生まれ育ったロシア人やその他の民族にも使用されている言語である。そのため、ロシア語＝ロシア＝ロシア人というステレオタイプを避けるためにも、ロシア語の授業で文化を扱う際には、ロシア語圏の多様性を意識することが重要である。

IV. 文化をどのように取り上げるのか—学習形態、日本語／ロシア語

その一方で、一体どこまでロシア語圏の多様性に目を配るべきだろうか。筆者は、ロシア語圏の多様性を表す例として、主に中央アジアを取り上げたが、一つの地域に限定してもこれだけ多数のトピックが考えられる。また、旧ソ連諸国以外にも目を向けると、様々な国・地域にディアスポラとして居住するロシア人もおり、ロシア語圏の多様性について全てを網羅することは事実上不可能である。このように、ロシア語圏の多様性に配慮すべきだといっても、それを実際に授業で取り上げる際には、何かを切り取って提示せざるを得ないというジレンマに直面するのである。

それでは、限られた授業時間の中で、ロシア語と結びつく文化の多様性や可変性を単純化せず、かつ分かりやすく取り上げることは可能だろうか。この点については、文化として何を取り上げるか以上に、どのように取り上げるかが、より重要になってくるのではないだろうか。

文化の取り上げ方としては、様々な方法が考えられるが、多くの現場で行われていると考えられるのは、以下のようなものだろう。

- ・不定期に「雑談」としてロシア文化を紹介する。
- ・授業日の前後でロシアの祝日やお祭りがある場合、それらについて紹介する。
- ・グループごとにロシア文化に関するテーマを決め、各自で調べた上で発表してもらう。
- ・留学生を授業に招待して交流する。
- ・ロシアの協定校の日本語学習者とビデオレターを交換する。その中で、日本の文化について紹介したり、相手に質問したりする。

また、その際にどの程度日本語とロシア語を使うかについても、様々な可能性が考えられる。

- ・日本語のみ
- ・ロシア語のみ

- ・日本語とロシア語を組み合わせる（各言語の割合はグラデーションのように無限）

この中で一番取り入れやすいのは、授業時間の一部を使って、日本語でロシア文化を紹介することだろう。もちろん、文化的要素を完全に排除するよりは、可能な範囲で少しでも取り上げた方が良いに違いないし、季節に合わせたり、ちょうど世間で話題になっているテーマを選んだりすることも可能である。だが、授業の本体である言語面の学習内容と、文化面の内容が必ずしも関連しないことが、課題として考えられる。一方で、文化の学習をロシア語そのものの学習としても位置づける目的で、日本語を排除してロシア語のみ使うことも、学習者の理解度を考えると、特に入門・初級レベルでは逆効果となる可能性が高い。実際、ロシア語の初級レベルにおける内容重視型授業²⁰の可能性を検討した横井・林田（2013）でも、母語である日本語を完全に排除するのではなく、むしろ賢明に使用することによって、ロシア語のみでは不可能だと考えられる高次の知的・論理活動を、学習者が遂行できた事例が報告されている。以上を踏まえると、言語面と文化面の学習をうまく統合し、かつ日本語とロシア語の絶妙なバランスを探っていくことが必要だといえよう。

また、文化を取り上げるにあたって、ステレオタイプの回避や、ロシア語圏の多様性への配慮という点から考えると、学習者が自ら学び、気づくというプロセスが重要になる。そのような目的と一番親和性があるのは、学習者の主体的な学びを重視しつつ、グループで協働しながら課題に取り組むような、いわゆるアクティブラーニング型の授業だろう。例えば「めやす」でも、文化を知識として理解するだけでなく、学習者が「目にみえる」文化事象（事物や行動）を観察し、自ら発見や気づきをすることが重要だとされている（公益財団法人国際文化フォーラム編 2013: 27）。ただ、教師の負担や様々な制約（シラバスや教科書が指定されている場合など）を考えると、授業全体を即座にアクティブ・ラーニング型に変更するのも難しいだろう。従来の授業形態とうまく組み合わせていくことが現実的ではないだろうか。

V. 関西大学オリジナル教科書における文化

ここで、ロシア語の授業における文化の取り上げ方の一例として、関西大学のオリジナル教科書²¹を使った実践を紹介したい（小田桐・北岡 印刷中 a）。なお、この教科書は文化の学習を前面に打ち出して編纂したものではなく、あくまで関西大学で年間を通して実施しているロシア語関係のイベントに対応するように、各課の内容を作成したものである（付録 A 参照）。だが、それらのイベント自体が、ピロシキ・ワークショップ、プーシキンの詩を中心とした朗読コンクール、ヨールカ祭など、ロシア語圏の文化と密接につながる内容であるため、結果として教科書全体に文化事象がちりばめられている。以下では 2 つの課の一部に注目して紹介したい。

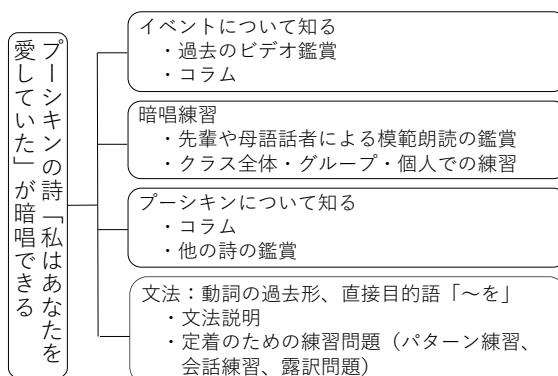
V-1. 第 5 課「私はあなたを愛していた—詩人プーシキン」

第 5 課は、プーシキンの名前を冠した学内ロシア語コンクールに対応するものである。課全体の目標は、プーシキンの詩を暗唱できるようになることだが、それを達成する過程に、文法学習やプーシキンに関する学習を組み込んでいる（図 1）。

²⁰ 言語面と内容面を統合し、内容学習を通して言語を学んでいくアプローチ。

²¹ 第二外国語としてのロシア語の 1 年目、90 分×週 2 回の授業向けに編纂したもの。

図 1. 第 5 課の目標と学習項目²²



ここで文法学習に注目すると、課題詩がプーシキンの詩「私はあなたを愛していた Я вас любил」であることを活用し、動詞の過去形と人称代名詞の対格を扱っている。過去形の学習にあたっては、詩のテキストと関連付けながら過去形の規則を導入した後、ロシアの有名人を題材にした練習を取り入れている（付録 B 参照）。有名人としては、プーシキンの他に、メンデレーエフ、ガガーリン、エカチェリーナ 2 世を挙げているが、学習者に好きな有名人を選んで発表してもらうことも可能である。そうすることで、より学習者による主体的な学びや、学習者同士の学び合いにもつながると考えられる。また、このような活動は、文法項目を中心に構成された文法シラバスの教科書でも、通常の練習問題の後あるいは代わりに、部分的に取り入れることも可能だろう。

なお、第 5 課の末尾には、プーシキンに関するコラムが付されている。コラムの活用方法は各教員によって異なるが、筆者はコラムを各自で読んでくる宿題を出した後、授業中に早押しクイズをしている。コラムに関する部分については、内容の理解や知識の獲得を最優先して、完全に日本語による活動にしている。

V-2. 第 9 課「私、留学する！」

第 9 課の目標は、将来の夢などについて、ロシア語で簡単に話せるようになることである。その見本として、キルギス²³に留学中の先輩に質問をする場面のテキストを、課の冒頭部に付している（付録 C 参照）。

テキストの中では、ロシア語圏の多様性の事例として、キルギスでロシア語とキルギス語が併用されている事実を取り上げている。また、そういったロシア語圏の多様性に関する学びと、ロシア語の正書法の規則の復習を組み合わせる工夫をしている。テキストでは、学習者の混乱を避けるために、キルギスのロシア語表記をロシア風に Киргизия としているが、別途小コラムを設けて、Киргизия の正式な名称が、Кыргызская Республика（キルギス共和国）あるいは Кыргызстан（キルギスタン）であることを紹介している（付録 D 参照）。

さらに、この課の末尾には、「地名について—正書法に合わない町の名がある？」というコラムを付しており、これはロシア連邦内の民族共和国であるトゥバを専門にする教員が執筆したものである。このコラムでは、ロシアの地名として Кяхта（ブリヤート共和国の都市）、Кызыл

²² 初出：小田桐・北岡（印刷中 b）「図 1 第 5 課における文法学習の位置づけ」。

²³ なお、この教科書でキルギスを取り上げていることに、論理的な理由は無い。筆者がキルギスを研究対象にしていることと、本学にキルギス出身のネイティブ教員がいるという、偶然の縁としか言えない理由である。

(トゥバ共和国の都市), **Кыштым** (チェリャビンスク州の都市), **Бытык-Кюёль** (サハ共和国の村) を取り上げている。それぞれ、ブリヤート語 (モンゴル系), トゥバ語, バシキール語, サハ語 (以上 3 つはテュルク系) が起源で, 特にテュルク諸語においては, **к, г, х** などの後に **ы, я, ю** が書けることを説明している。

以上の内容は, 文法シラバスの教科書でも, 正書法の復習と組み合わせて取り上げることが可能だろう。Google マップなどを活用して, ロシア語の正書法に合わない地名を探す活動も考えられる。また, 場所を表す前置格の学習とも組み合わせることもできるだろう (例: ○○は××にあります)。

VI. おわりに

以上のように, 本稿では, ロシア語の授業において文化を取り上げるにあたって, ステレオタイプの回避や, ロシア語圏の多様性への配慮が求められることを指摘した上で, ロシア語学習と文化学習を統合する試みの一例として, 関西大学オリジナル教科書の実践を紹介した。

そもそも日本の外国語教育全体において, ロシア語教育の存在自体が, オルタナティブの提示という意味で大きな価値を持っている。よって, ロシア語の授業でロシアに関する断片的な知識を提示したとしても, 必ずしも即座に知識・認識の偏りにつながるわけではなく, 学習者に世界は英語だけではないと気づいてもらうだけでも意義がある。

実際, 関西大学においても, 高校生を対象とした高大連携セミナーでマトリョーシカの絵付けをしたり, 全学のロシア語履修者を対象に毎年ピロシキ・ワークショップを開催したりしている。また, 学内ロシア語コンクールでは, 20 歳以上の学生向けにウォッカを賞品にすることもある。ロシア=マトリョーシカ, ピロシキ, ウォッカというのは, ロシアとほとんど関わりがない人でも最初に思い浮かべるような, まさにロシアに関するステレオタイプの典型例である。突き詰めて考えると, 我々はそのようなステレオタイプを, ロシア語教育を通して再生産しているのかもしれない。だが, それらをあくまで入り口として位置づけ, そこからさらに一歩踏み込み, ロシア語と結びつく文化を固定的に捉えずに, ロシア語圏の多様性に目を配ること, ロシア語学習を通して学習者が世界の多様性に気づくきっかけになると信じている。

また, 外国語教育全体における文化の扱いを考えてみても, ロシア語教育は, 英語教育などとは異なる独自の方向性を打ち出せる可能性も秘めている。III-2 で指摘したとおり, 英語教育はますます脱欧米化し, 英語と特定の文化との結びつきが避けられる傾向にある。一方, ロシア語教育で文化を扱う際には, 対象をロシア国内のロシア人に限定したとしても, 文学作品, 民話, 芸術, 料理, アネクドット, ことわざ, 名言・名句 (**крылатые слова**) などの豊かな題材があるが, それらを学ぶことの意義も決して忘れてはならない。つまり, 「ロシアの香り」がする部分を残して時にはそこにどっぷり浸かりつつも, 多様性を志向するような, 英語教育では難しくなりつつある文化の扱い方を模索する可能性が, ロシア語教育には残されているのである。

どのようにしたら, 単に文化を紹介して終わりにならないのか。どうすれば, ロシア語の学習と文化の学習をうまく統合できるのか。英語教育や日本語教育など, 他の言語教育での実践例に学びつつ, ロシア語教育における実践を共有していくことが, 今後ますます求められるのではないだろうか。

(おだぎりなみ 関西大学)

参考文献

- 岡奈津子（2010）「中央アジアのロシア人」宇山智彦編著『中央アジアを知るための 60 章（第 2 版）』明石書店，pp.181-185.
- 小田桐奈美・北岡千夏編著（印刷中 a）『Можно говорить по-русски?』関西大学出版部.
- 小田桐奈美・北岡千夏（印刷中 b）『Идти своим путём（わが道を行く）—関西大学ロシア語教科書プロジェクトの中間報告』『複言語・多言語教育研究』第 6 号，日本外国語教育推進機構.
- 久保田竜子（印刷中）「日本語教育における文化」『アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来』<https://www.aatj.org/japanese-language-education> [2019 年 2 月 14 日最終閲覧]
- 公益財団法人国際文化フォーラム編（2013）『外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』国際文化フォーラム.
- 塩澤正（2010）「言語と文化（第 1，2 節）」塩澤正ほか編集『英語教育と文化』大修館書店，pp. 3-15.
- 中村朋子（2010）「国際理解と英語教育（第 1，2 節）」塩澤正ほか編集『英語教育と文化』大修館書店，pp. 74-85.
- 横井幸子・林田理恵（2013）「内容を重視した外国語教育のカリキュラム開発と指導について—第 2 外国語としてのロシア語の場合」『ロシア語教育研究』第 4 号，pp. 57-73.
- 横井幸子ほか（2016）『外国語学習のめやす—ロシア語教育用』国際文化フォーラム.

【付録 A】 関西大学オリジナル教科書の目次

はじめに

年間カレンダー

アルファベット

筆記体見本

Урок 1 文字と発音 (1)

コラム：スラブ語の文字と最初の文語—ギリシア人兄弟の功績—

Урок 2 文字と発音 (2)

コラム：復活祭 (Пасха) 〈1〉

Урок 3 Это вкусные пирожки.

コラム：復活祭 (Пасха) 〈2〉

Урок 4 Я люблю пирожки!

コラム：色々なピロシキ

コラム：関大ピロシキ事始め

コラム：ピロシキ Пирожки

Урок 5 Я вас любил – поэт Пушкин

コラム：プーシキンの魅力

コラム：プーシキン・リハーサル

Урок 6 Сказки и анекдоты

コラム：ロシアの民話

Урок 7 Русские песни

コラム：ロシア音楽

コラム：ロシアの概要

Урок 8 Я была в России!

コラム：ロシア極東地方とその高等教育機関

Урок 9 Я буду учиться за границей!

コラム：キルギスってどんなところ？

コラム：地名について—正書法に合わない町の名がある？—

コラム：トゥバ民族の昔話

Урок 10 Презентациюしよう

コラム：幻想都市サンクト・ペテルブルク

Урок 11 映像を創ってみよう

コラム：新年のお祭りとくるみ割り人形

Урок 12 Встречаем весну блинами!

コラム：ロシア・ユーラシア料理「ペリメニ」

コラム：マースレニツァ

文法表

単語帳

【付録 B】 第 5 課の一部

Упражнение 3 ロシアの有名人について、絵を見せながら紹介してみよう。

※она（彼女）→её（彼女を）

	名前	職業	何をしたか
			※破線部：動詞の不定形
	Пу́шкин 1799-1837	поэ́т	писа́ть стихи́ 過去形：писа́л стихи́
	例		
			-Э́то Пу́шкин. Он поэ́т. Он писа́л стихи́. Вы его́ зна́ете?
			- Да, я его́ зна́ю. / Нет, я его́ не зна́ю.
	Менделе́ев 1834-1907	хи́мик	соста́вить периоди́ческую табли́цу
	Гага́рин 1934-1968	космона́вт	соверши́ть пе́рвый полёт в ко́смос
	Екатери́на II (втора́я) 1729-1796	императри́ца	встре́тить Кодаю
			(大黒屋光太夫 記念館だより「大 光」第 8 号より)
			

(フョードル・ロコトフ作)

【付録C】 第9課の一部

Урок 9 Я бу́ду учи́ться за грани́цей!

皆さんは、大学在学中にやってみたいことや、将来の夢はありますか。この課では、自分の未来についてロシア語で話せるようになりましょう。まずは、先輩の見本を見てみましょう。関大生の勇利さんはロシア語圏へ留学することを夢見ています。

🔊 (1) У меня́ есть мечта́!

私には夢があります！

Я хочу́ учи́ться за грани́цей и изуча́ть ру́сский язы́к.

留学して、ロシア語を学びたいです。



中央アジアのキルギスに留学中の先輩新菜さんに、質問してみることにしました。

(2) Здра́вствуйте, Ни́на-сан! Мо́жно зада́ть вам вопро́сы?

こんにちは、新菜さん！質問してもいいですか？

В Кирги́зии говоря́т по-ру́сски?

キルギスではロシア語が話されていますか？

Прочи́тано 9:00



(3) Здра́вствуйте, Ю́рий-сан!

こんにちは、勇利さん！

Да, здесь говоря́т и по-ру́сски, и по-кирги́зски.

はい、ここではロシア語も、キルギス語も話されています。

Ру́сский язы́к – официа́льный язы́к Кирги́зии.

ロシア語は、キルギスの公用語です。

Есть и други́е языки́. Кирги́зия – многоязы́чная страна́.

他の言語もあります。キルギスは多言語国家です。



(4) Как интере́сно!なんて面白いんでしょう！

Как по-кирги́зски “Спаси́бо” и “Как дела́?”?

キルギス語で、「ありがとう」と「調子はどう？」は何と言うんですか？

Прочи́тано 9:15

【付録D】第9課の正書法に関する小コラム

Кирги́зия の正式な名称は, Кыргы́зская Респу́блика (キルギス共和国) あるいは Кыргы́зста́н (キルギスタン) です. к や г の後に ы が使われており, ロシア語の正書法の規則に反しますが, ロシア語と同じくキリル文字を用いるキルギス語の規則では問題なく, 頻繁に使われます.

Иссык-Куль をキルギス語で正確につづると, Ысык-Көл です. ө はオとエの間のような音です. キルギス語のアルファベットは, ロシア語のアルファベット 33 文字に 3 文字 (Ү, ө, ң) 加えたものです.



キルギスの国旗. 中心部は, 遊牧民の移動式住居の天井を表しています.



高校と大学をつなぐとは

－ 公開講義@北海道札幌国際情報高校の記録より －

林田 理恵

現行センター試験の廃止と2020年度からの大学入学共通テストの導入、さらには民間英語4技能試験データが実質、大学入試の一部として活用されることが検討されるなど、文科省「教育改革」の中心的柱として、目下「高大接続」をめぐる議論が急ピッチで進められている。

本報告では2018年10月に行った北海道札幌国際情報高等学校での公開講義をふり返り、改めて「高大接続」の意味を問い直し、今、実際に必要とされていることは何なのかを考えてみたい。

I. 「高大接続改革」

I-1. 現状と問題点

一連の「高大接続改革」は、新学習指導要領における学力の3要素 ― 基礎的知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的学び・協働の学び ― の育成をいかに実現するのかという問題意識を背景に、その具体化のための後押しの施策として進められている。すなわち、「学力を多面的総合的に評価する」⁽²⁴⁾ 大学入学者選抜制度の立ち上げをテコとすることで、高校までの教育機関における従来の知識偏重型教育を是正できるのではないかと期待が込められているのだ。

しかしながら、「複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめるための思考力・判断力やその過程や結果を表現する力などを評価することができる」⁽²⁵⁾ 入試選抜方法といったものが果たして実現可能なのか、現在、具体的プロセスがすでに進行中ではあるが、それでもその実効性に対しては疑念を抱かざるを得ないというのが正直なところである。

まず思考力・判断力・表現力を評価するためには、文科省改革会議そのものが記しているように、「自ら文章を書いたり図やグラフ等を描いたり式を立てたりすることを求める記述式問題」⁽²⁶⁾ や CBT (Computer Based Testing) の導入が求められるが、そういった試験システムを実効性のあるものとして構築するには、多大な労力と資金が必要であることは疑いもない。内容的にも既存試験システムの小手先の改変で対応できないことは明らかで、高度なテスト理論に裏打ちされたものでない限り有効なものとして機能し得ないだろう。

また、仮にそのようなシステムが出来たとしても、試験実施や記述式試験の採点など、だれがどのように対応するのか。現在、厳しい財政状況下で大学や高等学校における予算は年々削減され、それに伴って人員削減が日常的に行われていることを考えるならば、そのようなシステムの改変に対応できるような余力は、教員側にはどこにもないというのが実態である。OECD加盟国平均を下回る日本の教育への公財政支出を根本的に考え直すことから、まずは出発すべきであろう。

(24) 高大接続システム改革会議「最終報告」, p.60. 文部科学省. 2016-03-31.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf, (参照 2019-02-20).

(25) 同上, p.47.

(26) 同上, p.52.

I-2. 英語民間試験導入の波紋

さらに外国語教育に論を絞ると、問題は一層深刻である。そこでは英語 4 技能（読む・聞く・話す・書く）を適切に評価するためとして、民間等が実施する資格・検定試験の活用が決定され⁽²⁷⁾、国立大学協会は全受験生への民間試験受験の指針を示し、2024 年度からは民間試験への全面移行が予定されている。民間試験の活用については、試験によって内容や方法が異なり公平性が確保されないのではないかという懸念や、地域や経済状況などによって受験機会に差が出る点も問題視される。東大入学者選抜方法検討 WG は昨年 7 月、「出願にあたって認定試験の成績提出を求めない」との提案を最優先とする答申を出した。その後、民間試験で A2 レベル以上の成績、もしくは同等以上の力があることを「証明」する高校調査書の提出という出願要件の併記の対応を決定、受験生に英語民間試験での成績提出を義務づけない方向を打ち出している。東大のこの反応は主には上で見た公平性、機会均等に対する懸念に基づくものであるが、英語民間試験導入ということには、東大の答申でも見落とされているより根本的な問題が潜んでいる。

文部科学省は英検や TOEFL など 8 種類の民間試験を認定したが、各試験のスコアと CEFR (Common European Framework of Reference for Languages = ヨーロッパ言語共通参照枠) の段階別表示が、試験実施主体から大学入試センターを経由して各大学に成績として提供されることになっている。CEFR の 6 段階レベルは、2001 年の欧州評議会発表とそれに続く 2004 年の全邦訳版⁽²⁸⁾の出版以来、それまでになかった言語の国際的共通尺度として日本でも高い関心を集め、昨今では外国語教育関連の事業等では CEFR 基準なしでは何も始まらないかのような様相を呈している。

I-3. CEFR 改訂版

しかしながら CEFR 第 1 章にも書かれているように、この枠組みは「開かれたものであり、かつ柔軟性に富み、必要な改訂をしながらそれぞれの個別の状況に応じて使用できるものでなければならない」⁽²⁹⁾もので、発表以来 20 年近くの間には様々な改訂の努力がなされてきている。ただ残念ながら日本では、関係する研究者以外には、文科省をはじめとしてそういった議論に積極的に関与する動きはあまり見られない。

現在、追加改訂版 CEFR-Companion Volume (2018) が発表されているが⁽³⁰⁾、そこで大きく取り上げられているのが仲介 (Mediation) 領域の活動である。改訂前の CEFR では、主に目標言語地域での様々な活動を想定しての能力記述文が中心であり、異なる言語間を行き来する仲介能力、異文化間能力についてはほとんど言及されることがなかった⁽³¹⁾。今回の改訂では重要な

(27) 大学分科会 (第 145 回)・将来構想部会 (第 9 期~) (第 29 回) 合同会議配布資料—資料 5“高大接続改革の進捗状況について”。文部科学省。2018-11-20。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/11/20/1411277_7_1.pdf, (参照 2019-02-20)。

(28) 吉島茂他訳。外国語教育 II —外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—。朝日出版社, 2004。

(29) Trim J., North B., Coste D. “Common European Framework of Reference of Language: Learning, teaching, assessment.” p.7. <https://rm.coe.int/1680459f97>. (cited 2019-02-24).

(30) “Common european framework of reference for languages: learning, teaching, assessment, Companion volume with new descriptors.”

<https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>. (cited 2019-02-24).

(31) 改訂前の CEFR にも第 4 章「言語使用と言語使用者・学習者 (Language use and the language

領域、言語コミュニケーション能力の最終目標として仲介 (Mediation) にスポットが当てられ、コミュニケーション活動の領域も従来の 5 領域から 7 領域(受容－読む reading comprehension, 受容－聞く listening comprehension, 産出－話す spoken production, 産出－書く written production, やりとり－話す spoken interaction, やりとり－書く written interaction, 仲介 mediation) へと拡充されている。

仲介能力は、単に目標言語で自らの意思疎通ができるという一般的なコミュニケーション能力や読解能力を超えたところに位置する。仲介活動ができる人材とは、単に通訳・翻訳者の養成ということのみならず、コミュニティの中で多様な言語を使う人たちの相互理解を支援することができる人材、つまり社会的背景や文化の差などに起因する問題を素早く見抜き、それを克服するための方策を考え出せる人材を育成するということを意味する。言語的には、テキストの情報内容を集約し的確に再現する能力、母語における同義語、同義表現の適切な使用等の文章表現力等がもちろん要求される。ただ、そのことにとどまらず、さらには母語文化と目標言語文化間の相関性を把握し、全体的な世界認識の構図の中にそれらを位置づけ、誤解等を生み出すことなく二者間の意思疎通を成立させるという高度な能力も必要とされる。足元で猛烈な勢いでグローバリゼーションが進もうとしている日本の現状において、中等高等教育機関でまさに必要とされているのは、グローバルな視野で地域の問題を解決できる人材の養成、高度な仲介能力をもったグローバル人材の養成なのである。

ところが、今回文科省が認定している英語民間検定試験は、いずれも上述 CEFR 改訂版には対応しておらず、一般的なコミュニケーション能力や読解能力しか測ることができず、上で述べた仲介能力に関しては考慮の対象外となっている。つまり、こういった民間試験の導入や旧来の CEFR 能力尺度表によっては、「多様性を活力とした人類社会の発展のため」の「日本語と外国語の往還の力」⁽³²⁾は測ることはできないし、ましてや日本の外国語教育のあるべき改革への推進力には決してならないのである。

それでは中等高等教育機関で高度な仲介能力をもったグローバル人材、複言語・複文化社会実現の推進力たる若い人たちを育て上げるにはどうしたらよいのか。こうした問題に関して、外国語教育も含めて学校の中で日常的にきめ細かな問いかけをし、それに対して生徒たち自身がさまざまに考え思い悩む、そのプロセスしかないのではないのか。今回の公開講義立案の背景たる問題意識である。今やブラック企業とまで言われる高校の現場で、多忙を極める先生たちをほんの少しでも手伝うことができないか、高大接続は難しい議論の前に、高大双方向の互助的關係が原点であるような気がする。

Ⅱ. 公開講義をふり返る

札幌国際情報高校での公開講義実施の詳細は本報告集内に掲載されている依田教諭の報告 (pp.41-48) を参照されたいが、ここでは上で述べたことに関連して、本講義で何を伝えたかったのか、講義者・受講者間相互のやり取りの中でどのような意識・認識の変容がみられたのかを

user/learner)」に、「仲介活動と方略 (Mediating activities and strategies)」と題して通訳・翻訳のいくつかの下位領域、またそれぞれの仲介活動で必要とされる方略について簡単な記述がある。しかしながら能力尺度表での仲介活動に関する記述は見当たらない[『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠－』2004, pp. 91-92.]。

(32) 異見交論 56 「東大が高大接続改革の扉を開く」五神真氏 (東京大学学長)。読売教育ネットワーク。2018-10-15. <http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/jitsuryoku/iken/contents/56.php>. (参照 2019-02-21)。

簡単にまとめてみたい。

Ⅱ-1. 「ことばと文化」

「ことばってナニ？」という問いから始めた最初の講義「ことばと文化」。まず伝えたかったのは、**ことばは「4 技能」ではない**ということだ。生徒たちが知恵を絞って出した「コミュニケーションツール」という答えを出発点に、「コミュニケーションするって何だろう？」「言いたいことが伝わるとは？」など、矢継ぎ早の質問で「ことばの意味」という問題をフロア全体で考えてみた。

「ことばの意味」はそれだけでは具体性ゼロであり、「本」「机」など、どの語をとっても世界にほぼ無尽蔵にあるもののうちのどれを指すのか、語だけを宙に取り出しても何もわからない。ことばがあってもそれを取り巻く状況、つまりどのような流れの中でそのことばが出されたのか、そして何よりもそのことばを口にした「相手のこと」がわかっていないと、ことばは何も伝えないのではないかと、ということ問いかけた。そして「相手のことって何だろう、相手が背負っている背景情報？ それはその人の人生、大きく言うと相手の「文化」だよな」というところに行きついた。**相手が背負っている情報、すなわち「文化」ということを知らない**と、**ことばは宙を舞ってしまうのだ**というフロアの共通理解が成立する。

それではそもそも「文化ってなんだろう？」。次の質問である。異「文化」理解や「文化」交流など、学校の授業や行事でごく一般的になったこのワード、あえて問い直しをすることで、この漠然とした語の奥深くに潜む人間の営み、生業を^{なりわい}あぶりだす作業の開始である（図1）。

「祭り」は五穀豊穡を祈る儀式であると同時に収穫までの苦労を忘れ発散するガス抜き作業、集団や地域のいろいろなしきたり・約束事も、皆、人と人がうまくつき合っていくためにあるのだ…等々、生徒たちは議論を深める中で、文化は集団・共同体がそれぞれの歴史の営みの中で作り上げた、人と人、人と自然の共生を司るためのメンテナンス機構だということに気づいていく（図2,3）。



図1. 背負っている情報がわからないとことばは宙を舞う
「晩御飯の用意をしています」ー こんな状況かもしれない

RUSSIA BEYOND <https://jp.rbth.com/travel/2017/07/08/797422>



図 2. 人間も元はサル—群れ社会の掟
<http://www.city.sapporo.jp/zoo/tenbouichijiheisa.html>

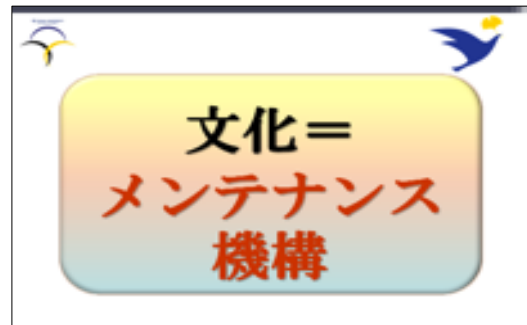


図 3. 文化は人と人、人と自然の共生を司るためのメンテナンス機構

ここまでの作業を踏み台に、日頃の文化交流イベントにもメスを入れてみた。「相手の文化を理解するためには、まず相手のことをよく知らないでだめ」、「だけどどうやったらよく知ることができるのだろう？ 少し、それも一方的に話を聞くだけではほとんどわからないよね」、「質問して、やり取りして、本当はその現場に行ってみて、実際に見て初めて分かることも多いよね…」。

ここで「そもそも何のために相手を知る必要があるの？」と投げかける。「相手を理解するため」、「それじゃあ何のために相手を理解するの？」、「相手を理解したいと思うのは、相手と何かをする必要があるからだよね、相手と上手につき合う必要があるとき？」。

「非日常の限られた時間の中でのみ異なる国の人々と交わりを持つ」ことに甘んじるのではなく、その日だけの「交流のための交流」⁽³³⁾ から一歩前に進め、どうして相手を理解したいと思うのかを自らに問いかけ、相手との交わりを具体的目的、先への見通しをもった協働の活動へとつなげていく。こうした意識がやり取りの中で芽生えていく。



<https://www.youtube.com/watch?v=x8U6W5tFggA>

図 4. 「どこかに行くのに自転車を使いなさいと言われたけれど、自転車がどんなものを全く知らなかったらどうする？」「さわってみる、動かしてみる」。

「そう、実際に乗って走ってみると歩くより楽、荷物も運べるということが徐々にわかってくるよね」「次は、どうやったらより楽にこぐことができ、目的地により早く着くことができるか、どんどん探究心も出てきてやりがいも増すよね」。

さらに、「知る」ためには何が必要かという問いを出発点に、自転車の話をたとえに出しながら（図 4）、「何であるかを知ること」と「どのようにするのかを知ること」は分離できないという点、ものを実際に使ってみる、ものとの相互作用・経験があつて初めて相手（もの）を理解でき、やりたいことができるようになるという展開へと結びつけた。

私たちは直接、ものを使う（相手と交わる）ことで、初めて具体的にその使い方（つき合い方）の情報をその行為から引き出し、その経験の積み重ねでさらに新しいことに挑戦しているのだということを確認していく。

次は、これまでの話をいよいよ「ことばの学習」の話題へとつなげていった。生徒たちの日頃の実感、「文法を理解したり単語を覚えたり、長文を訳していくのは大変」という声を受けて、単語を覚え

(33) 林田理恵「ロシア語教育実情調査—将来的展望と中等・高等教育機関連携の可能性—」『複言語・多言語教育研究』2号, 2014, pp. 65–66; 林田理恵「外国語教育強化地域拠点事業 ロシア語班—1年間の軌跡」『地域に貢献するロシア語人材育成につながる教育課程編成を展望した、ロシア語学習指導案・評価法確立のための基盤研究』平成 29 年度文部科学省外国語教育強化地域拠点事業事業成果最終報告書, 2018, p. 3.

ること、文法を覚えること、上手にスピーチができること、作文がうまく書けることはそれ自体が目的ではないはず、さらに言えば「ことばが使えるようになった」という喜びも一時のもので、その先にあるもの、「ことばを使って自分は何をしようとしているのか」ということがはっきりわかっていることが必要、学習そのもののプロセスが具体的目的を持つようにしてみても、と提案する。

人は「何のために」話題を理解し、伝え合うことが必要なのか、ことば活動はそれを組み込むより上位の活動が前提となると、はじめて意味のある目的をもった活動として成立する。学習・授業の現場でどのようにそういった活動を実現していくのか、生徒たちとの議論の中にその答えに近づく一歩が見えた気がした。

II-2「グローバル化 日本は今?!」

公開講義を行った昨年11月、臨時国会では「外国人材の受け入れを拡大するための法案」審議がちょうど行われていた。2つ目の講義「グローバル化 日本は今?!」では、日本の各地域でグローバル化の波が待ったなしの状況で押し寄せていること、その状況に対して、医療、教育、福祉といった様々な公的・社会的領域でまだまだ対応が不十分であり、地域住民意識も遅れた状態にあることを具体例を示しながら話し始めた（図5,6）。また、大阪西成「あい

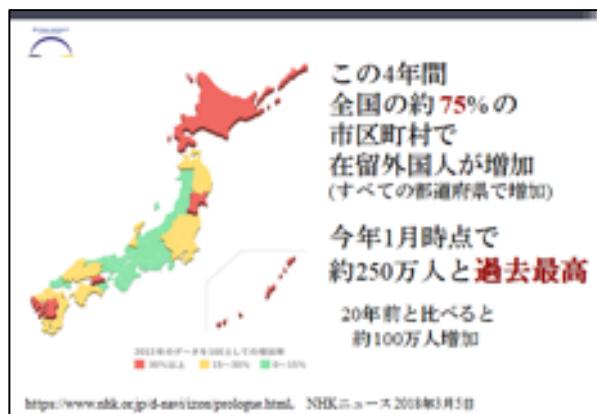


図 5.

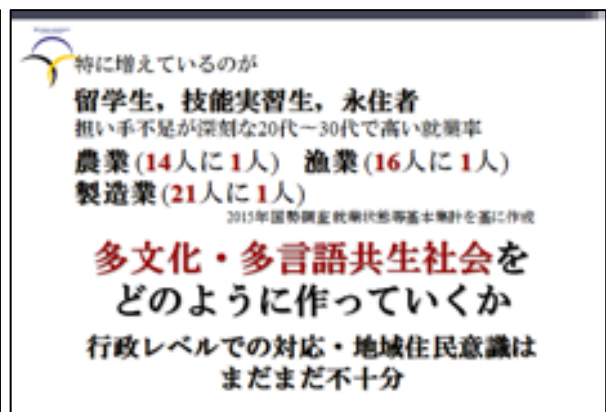


図 6.

りん地域」における結核高まん延状態⁽³⁴⁾にも触れた。技能実習生や「留学生」として来日した人たちが、入国するために抱えた多額の借金に苦しみ、劣悪な労働・住居環境にも耐えかねて勤め先から逃亡、不法滞在、不法就労を続けるケースが増えていること、そういった海外ルーツの人々が従来、社会的弱者（ホームレス・無職・日雇い労働者）の居住地域だった西成あいりん地区に集まっており、今や在留外国人居住地域へと変貌していることを伝えた。これらのことが相まって、結核登録数に占める外国人籍の人々の割合が、15~30歳の登録患者の50%に達するという深刻な事態を引き起こしている（図7）。

フロアーの生徒たちと共に、こういった事実をどう受け止めたらいいいのか、きれいごとではなく、「もし隣で地域の生活ルールを守らない人がいたらどうする」といった問いかけをし合いながら、話し合いを進めていった。その過程で筆者もそれまで知ることのなかった札幌の現実、いろいろな事例が生徒たちから次々と述べられるなど、問題を他者のものではなく自己のものとして内化していく姿勢が印象に残った。

(34) 結核発生動向概況・外国生まれ結核、結核年報 2017、結核予防会疫学情報センター。

いずれの講義も最後に複言語・複文化主義に焦点を当て、グローバル化が急速に進むこれから

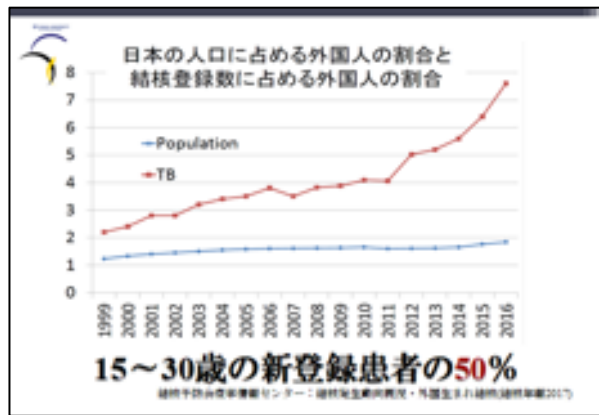


図 7.

的議論が先行し、無反応な状態が横行する大学の教室のことを思うと、より若い吸収力の旺盛な段階でこういった試みができたことは、筆者の拙い話であっても、ある程度の意味はあったのかとも思える。ただ、それでは果たしてこれからの人生において、生徒たち個々が同様の問題に実際に直面した時、今回の講義でのさまざまなやり取りがどのような形で彼らの生活の中に実体化するのか、まだまだ未知数であり、今後の継続とその検証が必要であろう。

以下、上述の公開講義の内容の参考として、講義後に寄せられた生徒からの質問とそれに対する筆者の回答を紹介しておく。

【2年生】

＜質問＞ 「言葉」の存在意義について考えたのは初めてなので、今、英語を習得しようとしている私にとってとても刺激になりました。言葉が変化していくという話がありましたが、これからの時代に現存する言語・文化を保存しようというような活動はどのような利点を持つと思いますか。

＜回答＞ 現在、様々な言語や文化が死滅の危機にあります。これは自然になくなっていくというよりも、政治的な圧力などで、少数民族が他民族に同化されたり吸収されたりすることによる場合がほとんどです。私が「言葉が変化する」というお話をしたのは、ある言語体系・文化の中で人々のコミュニケーション等のプロセスにおいて、だんだんことばが変化していくというもので、上記の例とは分けて考える必要があります。

ある民族の言語や文化が政治的な圧力やグローバル化という名の下でないがしろにされるということは、それこそ、その民族や言語・文化へのリスペクトがゼロ、言語に優越性をつけるということにつながり、これは断じて許してはならないし、守っていく活動はとても重要だと思います。

＜質問＞ スラングによって「ことば」が変わることをどう思いますか？

＜回答＞ スラングと呼ばれるのは、まだ、それらのことばが一部の若者などにのみ流通しているから、そう呼ばれますね。もしそのうちのある表現が、もっと広く使われるようになって、その言語を話す人たちの多くが理解したり、使ったりするようになれば、それはもうスラングとは言えなくなり、そのうち辞書にも載ったりすることになります。

ことばは「通じる」ということが「いのち」です。ですから、表現に良い、悪いという評価はなくて、それがどれだけ多くの人に理解され、使われるようになるかによって、この表現の運命は決

まります。元々「スラング」と思われる表現であっても、それが使いやすく、みんなが使うようになれば、自然にその言語体系の中に定着し、それは変わっていくということにつながりますね。一方、人々が許容しがたい表現の場合、それは広がることなく、一時的に一部の集団で使われてはいても、やがて廃れていって、言語体系には影響を与えずに死滅することになります。

<質問> AIによって「ことば」というものが変わってしまう、存在意義などについてどうお考えですか。

<回答> これは難しいですね。会場でも少しお話ししましたが、AIがどの程度、人間と同じようなコミュニケーション力を持つようになるのかにもよると思います。一説によると、もうかなりの水準まで来ているようですが、AI同士のコミュニケーションというものもどうなるのか、人間がプログラミングしたものを超えて、新たな形態、内容の相互伝達手段をAI自身が創造するようになるのか、興味は尽きないと思います。私は理系の専門家ではないので、それ以上のことは残念ながらわからないのですが、今度、高校でAIを開発している研究者に来てもらって、今、どのような段階にあって、ことばにも影響を与えるようになるのか、質問されるとよいかもしれませんね。

<質問> どれだけペーパーテストや問題が解けても実際のコミュニケーション能力が低い人がいます。今、結局成績だけがいい人が前に出て、実際、人々に合わせられないという状況が起こることが不服です。テストはとれなくても、コミュ力がある人が前に出るべきだと思います。この意見をどう思いますか？

<回答> そうですね、現在、文科省をはじめとして「単なる知識を詰め込むだけの教育から、実際に物事を解決できる力をつける教育に変えていかなければならない」ということが言われており、それはとても大事なことだと思います。これまでの成績評価も、ペーパーテストで知識がどれだけあるかだけで測っていましたが、これからは実際に物事を解決していく能力、たとえば語学などでは、ある実際の課題（たとえば自治体で対応に困っている言語圏の在留外国人の人たちに、わかりやすいパンフレットを作り、それを説明するなど）が与えられて、それを周りの人たちとどのように協働して解決できたか等によって評価しよう、ということになっていくと思います。ただ、そういった実際的な能力を身に着ける前提としては知識はとても大事なもので、その勉強をおろそかにしては、そういった能力も身に着かないことになりますね。

<質問> 複言語の理解が少し難しかったのですが、例えば、ポルトガル語とフランス語で対等に話せる（内容理解ができる）とおっしゃっていましたが、理解が出来れば同じ言語を話せるのではないですか？

<回答> 多くの場合、聞く力と話す力はアンバランスです。聞いたことはほとんど理解できても、その言語で話すことは苦手、といったように。私が若い頃、ロシアに留学した時も、最初の1か月位でポロっと耳栓が取れたみたいに、周りで話していることやラジオの話などがある程度、理解できるようになりましたが、自分自身がきちんと意思疎通ができるまでに話せるようになるには、半年以上かかりました。ですから、お互いが母語で話し合っている、相手の言っていることは理解できるので、それで充分コミュニケーションが取れる、ということになるのです。

<質問> フランス語を勉強しています。話したり勉強していく中でのコツみたいなのはありますか？

<回答>

どんな言語の場合でもそうだと思いますが、やはり自分が表現したいこと、その言語を使ってやりたいことは何か、ということを見つけ出して、それをやってみることが一番身に着く早道だと思います。やりたいことを実現するために覚えた単語、文法、構文、表現などはいつまでも記憶にしっかりと残ると思います。

<質問> 多くの言語を知っている強みはあるか。

<回答> 言語を知れば知るほど、それ以外の言語を習得するのが容易になる、ということが一般的に言われています。また、現在の国際社会の中で、諸問題を解決していくために、英語だけではなく様々な言語ができる多言語話者はとても必要とされている人材だと思います。

【1年生】

<質問> 今、私は英検に向けて勉強しています。文法も単語も長文も難しくて行き詰まりかけています。今日の講演を聴いて、何のためにやっているのだろうと思ってしまいました。知るだけじゃダメ、でも将来の夢は国際関係じゃない。ただ、大学受験のため。どんなモチベーションで勉強したらいいですか？

<回答> 今は大学受験のためだけ、と思っておられても、今やっている学習が将来、いろいろな形で役に立つことがあると思います。人生の目標はその時々でいろいろ変化していくものですから。また、どんな分野を専門にする場合でも、日本だけではなく様々な国地域の、その分野の情報や最新の成果などを知る必要があるのです。これからの社会、どの領域でもやはり他の言語を知ることとはますます不可欠なツールとなると思います。

あと、英検の勉強をされる場合でも、表現や単語など、ただ闇雲に覚えるのではなく、自分に興味のある事柄に関連させるとか、たとえば表現などは自分の言いたいことに少し置き換えて覚えてみるとか、そのように自分の興味ということに引き付けて学習を進められると、少しは行き詰まり感も解消するかもしれませんね。

<質問> 「言語に特権はない」という言葉に胸を刺激されました。動物とは会話できるのでしょうか。

<回答> 残念ながら人間のような言語を持った存在は、人間以外にはいません。ただ、それぞれの生き物でコミュニケーションツールはみんな持っています。

例えばミツバチ。「ミツバチのダンス」と呼ばれる8の字に歩くダンスがあるのですが、蜜や花粉、巣の位置などの情報をそれによって他の蜂に情報伝達しているのです。その他、イルカなどとはとても高度な情報伝達システムを持っていると言われています。それらのシステムがわかれば、それらの生き物と情報伝達することもできるようになるでしょうね。

(はやしだりえ 大阪大学)

第 3 部

資料編

平成30年度「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」～私立関東国際高等学校～

研究主題

ロシア語教育を中心に、東京渋谷区内の教育機関(小・中・高・大)の横断的な連携関係を築き、2020年の東京五輪開催時に、地域内の青少年が主体的に外国語ボランティア活動を実施できるよう、教育環境を整備していく。

取組の内容

取組①

地域内横断的教育事業組織の構築
渋谷区内の教育機関が連携して、ロシア語・ロシア文化に親しむことのできる「交流会」を企画・運営する。

取組② 授業実践

本校ロシア語コース2年生を対象に、中学生にキリル文字を教え、ロシア語に触れる機会づくりを目的とした交流会の計画を立てる。交流会では、高校生、大学生がサポートをしながら中学生が自分の名前をキリル文字変換し、各班ごとに決めたテーマでキリル文字変換をしたものを模造紙1枚にまとめる作業を行う。交流会の後、中学生にキリル文字のミニテストを実施する。



成果①

参加者：原宿外苑中学校3年生88名、関東国際高校2年生11名、3年生8名、上智大学、法政大学、津田塾大学学生11名、ロシア人留学生3名。
「ロシア語」を通じて、地域内に中・高・大・留学生という縦のつながりを構築できた。
交流会プログラム：中・高・大学生を混ぜたグループで、キリル文字を使った作品を完成させ、出来上がったものをロシア人留学生に読んでもらい、意図通りに音読されているのかを確認する。高校生は大学生がロシア人留学生とロシア語で流暢に会話する姿を見て、将来の自分の姿を想像し、また大学生は、ロシア語運用力を持った高校生に感心し、今後の学習継続へのモチベーションを高め合い、またその語学をどのように活かすべきかの問題意識付けをすることができた。

成果②

・駅の路線図、トイレの案内、観光マップなど、都心部でロシア語、キリル文字での表記を見かけることが無く、近年急増している訪日ロシア人に対応するための取り組み必要であると考え、英語以外の外国語を学ぶ意義を再認識するきっかけとなった。

◇高校を卒業してもロシア語の勉強を続けたいという生徒の割合◇

1年	2年	3年
73%	81%(1年次77%)	63%(2年次70%)

・本校2年生については、前年度に続きロシア語への高い学習意欲が継続されており2年生次のロシア語検定4級取得率が過去2年に比べ大幅にアップしている。

◇ロシア語の授業が好きと答えた生徒の割合◇

1年	2年	3年
89%	100%(1年次100%)	89%(2年次70%)

◆本校2年生11月時点での検定取得率◆

2016年	2017年	2018年
10%	26%	55%

・中学生は初めて見聞きするロシア語、キリル文字に興味を示し、実際に自分文字を読み書きできたことで、ロシアについてさらに学んでみたいという意欲の向上が図られた。

今後の課題・方向性

- ①現在、2020年東京五輪に向けてのボランティアを募集中だが、個人で参加できるの18歳以上に限られるため、ロシア語を学習している高校生が主体的に活動に参加できるような組織作りが必要である。
- ②高校生が主体的にボランティア活動に取り組むことが、学習能力の向上にどうつながるのか、定期テストや授業への取組態度から、今後さらなる検証が必要である。
- ③中・高・大学生が連携して地域活動に取り組むためには、今後各自治体の協力を得ながらロシア語のみならず、複数言語を学習している中高生のためのボランティア機会を増やすことが早急の課題である。

平成30年度「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」～北海道札幌丘珠高等学校～

研究主題

日露交流と異文化理解を軸としたロシア語学習：ICTを活用して日露で互いの言語を学び、教え合う

取組の内容

取組①

- ・札幌大学出張講義においてロシア文化入門講義とロシア語指導を実施
- ・大阪大学大学院生による教育実習でロシアの食文化に関する授業を実施

取組②

- ・ICTを活用し、日本の文化に関するクイズを4人1組のグループに分かれて制作
- ・辞書やインターネットの翻訳機能を使い、簡単な言い方を駆使してロシア人向けクイズを日本語とロシア語の両方で作成。
- ・「ノボシビルスク市立シベリア北海道センター」にクイズの動画を送り、日本語を学ぶ学生に回答と感想を送ってもらう。

成果①

- ・日本のどんな文化を伝えるかについての話し合いが有意義で楽しかった。
- ・教科書にはない単語を覚えることができた。
- ・既習事項ではない語彙や格変化を使って表現しようとする場面が見られた。

成果②

- ・日本のどんな文化を伝えるかについての話し合いが有意義で楽しかった
(=22人中15人)。
- ・教科書にはない単語を覚えることができた。
- ・既習事項ではない語彙や格変化を使って表現しようとする場面が見られた。

今後の課題・方向性

- ・相手に見てもらうために質の高い作品を作るには、かなりの指導と時間が必要だと実感した。
- ・新しい試みを実行するために時間を取ることに、教科書の進度を例年通り進めることとの均衡を図るのがむずかしかった。
- ・ロシア語受講生の大多数は、ビデオ制作は楽しかったと述べていることから、一方通行にならない授業スタイルへ変えるよい機会になった。
- ・ロシアの人々と交流を深めたいという気持ちが強まった。
- ・人的交流を今後継続的にどう発展させられるか。

平成30年度「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」 ～北海道札幌国際情報高等学校～

研究主題

ロシア語関係での出張授業・公開授業、入学者選抜方法にCEFR 等に準拠した外部検定試験を活用する可能性の検討

取組の内容

- ① ロシア語スキルアップ講座の実施
入学者選抜方法にCEFR に準拠した外部検定試験を活用する可能性の検討
午前3時間、午後3時間の一日集中講座
- ② ・ クリティカル・ライティングを基にしたプレゼンテーション指導
レポート作成、レクチャー、キャンプでのプレゼンという3段階で実施
・ 「ことばと文化」公開講義

成果①

露語能力、モチベーション共に向上

	ロシア語の能力		ロシア語へのモチベーション	
	受講前	受講後	受講前	受講後
2年男子	1	4	4	5
3年女子	2	4	3	5
3年男子	3	4	4	5
平均	2	4	3.7	5

* 受講した生徒による自己評価の数値

成果②

プレゼンテーション指導後の反応:

アンケート(5点満点で実施)

- ・主体的に学ぶ力 3.06 → 4.01
- ・構成力 3.03 → 3.9
- ・英語力 2.84 → 3.47

公開講義実施後の反応:

「どの言語、どの文化も平等だと思う」肯定的回答76%

「複言語・複文化の必要性を感じる」肯定的回答89%

講義後も、質問が相次ぎ、感想からも多言語・多文化に対する認識が変わったという生徒が見受けられた

今後の課題・方向性

取組を通して生徒の成長を顕著に感じた。異文化理解への興味関心は非常に高く、柔軟な思考で多角的に物事を考えていた。言語運用能力の向上、幅広い視野の育成、を達成でき、未来(進路)を見すえた取組となった。一方で、生徒は部活動等、課外活動でも忙しく、放課後や休日を使っでの取組には参加したいという意欲があっても、都合がつかなかった生徒が多かった。今回の取組に参加した生徒の中で、推薦入試を利用し、ロシア語科の大学に進学した生徒がいた。高大接続のあり方については今後も模索が必要だと感じる。

「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」取組事例 大阪大学

「社会に開かれた」ロシア語教育の確立：地域貢献のためのロシア語学習、日露交流授業、高大接続

取組① 地域貢献のためのロシア語教育

渋谷区内の各教育機関が連携し、東京五輪開催時にロシア語ボランティア活動ができるよう、今年度はロシア語・ロシア文化交流会を計画し、実施した。その際、関東国際高校の生徒が中学生にキリル文字を教え、後日ミニテストを行った。

取組② 日露交流と異文化理解を軸としたロシア語のプロジェクト型学習

今年度は、大学教員による異文化理解に関する講義に加え、ICTを活用して、日本語を学んでいるロシアの学校と日露で互いの言語や文化を学び、教え合う交流授業を実施した。具体的には、双方学習言語で自国文化に関するクイズをビデオで制作し、共有した。

取組③ ロシア語教育における高大接続と入試改革の可能性の検討

高大接続の一環として、大学の教員による公開講義や出張授業、さらにAO入試の要件となりうるロシア語のCEFR準拠外部検定試験対策講座を実施し、その可能性を検討した。

成果①

- ・ロシア語を通じて、渋谷区内の中・高・大・ロシア人留学生の繋がりを構築することができた。
- ・昨年度から継続して参加してきた2年生は参加していないその他の学年に比べてロシア語への学習動機、ロシア語能力共に顕著な伸びが観察された。
- ロシア語が好きと答えた生徒の割合

1年生	2年生	3年生
89%	100%	89%

- 関東国際高校2年生11月時点でのロシア語検定

2016年	2017年	2018年
10%	26%	55%

成果②

- ・初級レベルのロシア語能力でクイズをロシア語で作成するのは容易ではなかったが、ロシア語学習者22人のうち、15人が「楽しかった」と回答。
- ・日露双方が互いに教師となり、生徒となって両文化、両言語を行き交うことで、母語や自文化を見つめ直すきっかけが与えられただけでなく、相手の立場に立って深く考えたり、自分の考えを伝えようと努力する姿勢が随所に見られた。
- ・教科書にはない単語や表現を学習することができた。

教室を超えて地域、ロシア、大学とつながり、「社会に開かれた」ロシア語教育を実現することで、生徒の**ロシア語能力、学習動機、の向上**が期待できる。

成果③

- ・ロシア語講座の実施後、ロシア語能力、動機共に向上が見られた：

	ロシア語の能力		ロシア語へのモチベーション	
	受講前	受講後	受講前	受講後
2年女子	1	4	4	5
3年女子	2	4	3	5
3年男子	3	4	4	5
平均	2	4	3.7	5

- ・「ことばと文化」に関する講義後、「複言語・複文化の必要性を感じる」と89%が回答

課題と解決のための今後の手立て

- ・東京五輪のボランティアに参加できるのは18歳以上に限られるため、ロシア語を学習している高校生も活動に参加できるような組織作りが必要である。
- 各自治体にこれまでの取組を紹介した上で協力要請をし、可能な関わり方を検討する
- ・プロジェクト型授業は、準備にも実施にも大変な時間を要するが、時間の確保が困難であった
- 今年度開発した単元を単発で終わらずに、ノウハウを蓄積し、シリーズ化させていく
- ・新学習指導要領やCEFR等の目標を反映させた評価方法の開発までに至らなかった。
- ポートフォリオ等既存の評価ツールを検討しながら、ロシア語に特化したツールを開発する。

成果の発表等

文部科学省グローバル化に対応した外国語教育推進事業ロシア語班(2018年12月)、「社会に開かれた」ロシア語教育とは？：高校における実践。最終発表会、上智大学。

永沼栄理子 & 横井幸子(2019年3月発表予定)「地域貢献を明確に目的とした「社会に開かれた」ロシア語教育：東京都渋谷区における実践、外国語教育シンポジウム、日本外国語教育推進機構(JACTFL)、上智大学。

横井幸子(2019年発行予定)、『ロシア連邦教育科学省認定ロシア語検定試験：入門レベル対策問題集』。

その他、2019年3月に事業成果最終報告集を発行予定。

平成 30 年度
文部科学省グローバル化に対応した外国語教育推進事業

ロシア連邦教育科学省認定

ロシア語検定試験

ТЕСТЫ ПО РУССКОМУ ЯЗЫКУ КАК ИНОСТРАННОМУ
(ТРКИ)

入門レベル対策

大阪大学
横井 幸子

2018 年 9 月

ロシア語検定試験（ТРКИ）の概要

「外国語としてのロシア語検定試験 (Тест по русскому языку как иностранному=ТРКИ)」は、ロシア連邦教育科学省認定のロシア語学能力試験です。ТРКИ はヨーロッパ言語共通参照枠 (Common European Framework of Reference for Languages = CEFR) に準拠して6つのロシア語能力の熟達段階が設定されています。第1レベルの合格がロシアの大学に学部入学要件、第2、第3レベルは、専門分野によって要求されるレベルは異なりますが、ロシアの大学での学位授与の要件とされています。第4レベルは母語話者に近いレベルとされており、ロシア語学、文学、ロシア語教育学分野での大学院レベルの学位授与の要件になっています。

表1. ТРКИ の熟達度基準と試験科目

CEFR	ТРКИ	内容	試験
A1	ТЭУ Элементарный уровень 初級レベル	日常生活や社会的文化領域のごく限られた場面で初歩的なやりとりをすることができる 学習時間：100-120 学習時間* 最低必要語数：約 780 語	語彙/文法 (50 分) 読解 (50 分) 聴解 (30 分) 作文 (50 分) 会話 (30 分)
A2	ТБУ Базовый Уровень 基礎レベル	日常生活や文化、学業領域の限られた場面で最低限必要なやりとりをすることができる 初級レベル+180-200 学習時間* 最低必要語数：約 1300 語	語彙/文法 (50 分) 読解 (50 分) 聴解 (35 分) 作文 (50 分) 会話 (25 分)
B1	ТРКИ-1 Первый сертификационный уровень 第1レベル	社会生活や社会的文化領域で基本的なやりとりができる 学習時間： (ゼロから数えて) 440-460 学習時間以上* 最低必要語数：約 2300 語	語彙/文法 (60 分) 読解 (50 分) 聴解 (35 分) 作文 (60 分) 会話 (25 分)
B2	ТРКИ-2 Второй сертификационный Уровень 第2レベル	あらゆる領域でかなり高度なコミュニケーション能力を有する。人文学、技術工学、自然科学の分野で専門家としてロシア語で活動することができる 学習時間：第1レベル+720 学習時間以上* 最低必要語数：約 5000 語	語彙/文法 (90 分) 読解 (60 分) 聴解 (35 分) 作文 (60 分) 会話 (35 分)
C1	ТРКИ-3 Третий сертификационный Уровень 第3レベル	あらゆる領域で高度なコミュニケーション能力を有する。言語・文学研究者、通訳、編集者、ジャーナリスト、外交官、管理職としてロシア語で活動することができる 学習時間：第2レベル +ロシアの高等教育機関で 280 学習時間* 最低必要語数：11000 語以上	語彙/文法 (90 分) 読解 (75 分) 聴解 (35 分) 作文 (60 分) 会話 (40 分)
C2	ТРКИ-4 Четвертый сертификационный Уровень 第4レベル	領域を問わず、ロシア語母語話者に近い高度なコミュニケーション能力を有する。ロシア語教育や研究分野で専門家として活動することができる 学習時間：第3レベル +ロシアの高等教育機関で 180 学習時間* 最低必要語数：設定なし	語彙/文法 (60 分) 読解 (80 分) 聴解 (40 分) 作文 (60 分) 会話 (50 分)

検定試験は語彙・文法、読解、聴解、作文、会話の 5 科目からなります。ТРКИ に合格するにはこれら全ての科目について 66%以上の点数を上げる必要があります。但し、4 科目について 66%以上得点しており、1 科目だけ 66%未満の場合でも 60%以上の点数であれば、合格が認められます。

初級レベル (ТЭУ)について

初級レベルの各科目のテスト構成は次の通りです。

- **Лексика и Грамматика**：語彙・文法（50 分）

出題数は 80 問で、全て択一問題。辞書の使用不可。

出題される主な文法事項：

- 名辞類の格変化
名詞（単数のみ）
形容詞（主・対格のみ）
代名詞（全て）
指示代名詞や所有代名詞（主・対格のみ）
- 動詞
体（完・不完の各形式と基本的な用法）
時制（現在時制の活用、過去形、未来時制の各形式）
命令形
運動の動詞（接頭辞付きの場合は по-, при-のみを扱う）
- 関係代名詞（主・対格のみ）

- **Аудирование**：聴解（30 分）

4-5 部構成。出題数は 25 問で、全て択一問題。辞書の使用不可。

主な出題形式：

- 短い文章を聴き、内容の合致するものを選択肢の中から選ぶ
- 文章を聴き、それに対する適切な受け答えを選択肢の中から選ぶ
- 短い会話文を聴き、問いに答える
- 少し長めの会話文を聴き、問いに答える
- 少し長めのモノローグを聴き、問いに答える

- **Чтение**：読解（50 分）

5 部構成。出題数は 30 問で、全て択一問題。辞書の使用可。

主な出題形式：

- 会話形式の短い文章に適切な返答を選択肢の中から選ぶ
- 短い広告文を読み、内容に合致するものを選択肢の中から選び、文を完成させる
- 5 行程度のテキストを読み、内容に合致するものを選択肢の中から選び、文を完成させる

-- ある程度長さのあるテキストを読み、内容に合致するものを選択肢の中から選び、文を完成させる

● **Письмо**：作文（50 分）

出題は 1 問のみ。辞書使用可。与えられたテーマについて手紙形式で作文する。15 文以上。

● **Говорение**：会話（30 分）

3 部構成になっている。第 1 部は、試験官の問いに適切に答えられるかどうか（出題数 5 題）、第 2 部は、試験官によって読み上げられるシチュエーションを理解し、適切に会話を始められるかどうか（出題数 5 題）、第 3 部は、与えられたテーマについてある程度まとまりのある話をする（10-12 文以上）。準備時間として 10 分与えられる。第 3 部のみ辞書の使用可。

ТРКИ は、熟達度基準として各レベルで習得すべき語彙や表現や文法項目が、具体的なテーマや場面と共に明確に設定されています。特に第 1 レベルぐらいまでは出題範囲がそれほど広くないため、対策は比較的容易です。

初級レベルでは、1) お店やレストラン、学校といった日常生活でよく遭遇するような場面で簡単なやり取りができること、2) 身近なテーマについて話したり書いたりできること（e.g., 自身や家族、友人の紹介）、3) 初級文法の知識が求められます。したがって、テーマ別の表現や場面別の会話表現をマスターすることで、「聴解」「作文」「会話」「読解」の大部分が対策できます。語彙・文法テストについては、模擬問題を文法項目別に繰り返し解き、頻出項目を必ずおさえておくとい良いでしょう。何よりもまず、初級レベルで想定されている習得語彙 780 語をしっかりとマスターしておく、試験対策もスムーズに進むでしょう。

По темам : テーマ別対策

- Рассказ о себе : 自身について
- Моя семья : 私の家族
- Мой друг : 私の友人
- Мой город : 私の町
- Свободное время, отдых, интересы : 余暇、休暇、興味・関心
- Моя учёба : 学業

Рассказ о себе : 自身について

Как вас зовут?
Сколько вам лет?
Где вы живёте?
Вы учитесь или работаете? Где?
Кем вы хотите стать? Почему?
Кто ваши родители?
Где живёт ваша семья?
Вы любите спорт? Какой?
У вас есть друзья?
Что вы любите делать в свободное время?
Где и как вы отдыхаете?

☐ 名前 Как вас зовут?

☐ 年齢 Сколько вам лет?

☐ 住んでいるところ Где вы живёте?

☐ 職業・学業

Вы учитесь или работаете? Где?
Кем вы хотите стать? Почему?

発展問題

好きな科目

Что вы изучаете?

Какие предметы вам нравятся?

Какой ваш любимый предмет?

外国語学習・ロシア語学習

Какой иностранный язык вы изучаете?

Какие иностранные языки вы знаете?

Скажите, пожалуйста, сколько времени вы изучаете русский язык?

Вам нравится русский язык? Почему?

Почему вы изучаете русский язык?

Как вы думаете, русский язык трудный? Почему?

Сколько времени вы занимаетесь каждый день?

Сколько времени вы делаете домашнее задание?

Где вы хотите учиться потом?

☐好きなこと・余暇

趣味：読書、スポーツ、楽器演奏、コンピューターゲーム、音楽鑑賞

好きなもの：映画、テレビ番組、音楽、本、スポーツなど

Что вы любите делать в свободное время?

Вы любите спорт? Какой?

Где и как вы отдыхаете?

発展問題

好きなもの

Какие книги, фильмы, передачи вам нравятся?

Какая музыка вам нравится?

Какой день недели вы любите? Почему?

Какое время года вы любите?

Какую музыку вы любите слушать?

Что вы любите больше, читать или играть на компьютере?

Что вы любите больше, кино или театр?

Где вы любите смотреть фильмы, дома или в кинотеатре?

Как называется ваш любимый фильм?

У вас есть любимый актёр? Как его зовут?

趣味

Вы любите читать? Какую книгу вы прочитали в этом году?

Вы любите слушать музыку? Какую?

Вы любите играть на компьютере? Какая ваша любимая игра?

Вы любите готовить? Что вы готовите?

Скажите, каким видом спорта вы занимаетесь?

Где и когда вы слушаете музыку?

余暇

Скажите, пожалуйста, что вы любите делать в свободное время?

Где вы обычно гуляете, отдыхаете в свободное время?

Чем вы обычно занимаетесь в субботу и воскресенье?

Что вы будете делать в субботу вечером?

С кем вы ходите на выставки, театр, в цирк, на дискотеку?

С кем вы ходите в театр, на дискотеку?

休暇

Куда вы ездили летом, что вы видели?

Куда вы хотите поехать в каникулы?

Куда вы хотите поехать в каникулы?

☐ 家族や友人

Кто ваши родители?

Где живёт ваша семья?

У вас есть друзья?

発展問題

家族

Какая у вас семья?

У вас есть братья, сёстры?

У вас дома есть кошка или собака?

Как их зовут? Сколько им лет?

Кем работают ваши родители? Где?

Они работают или учатся? Где?

Что ваша семья любит делать в свободное время?

Что вы обычно делаете в субботу и в воскресенье?

У вас есть семейные праздники? Какие?

友人

У вас есть друг?

Скажите, пожалуйста, у вас много друзей?

У вас есть русские друзья? Где вы познакомились?

Как зовут вашего друга?

Сколько ему лет?

Где он живёт?

Когда и где вы познакомились?

Где учится ваш друг?

Кем он хочет стать?

Какой иностранный язык он изучает?

Что он любит делать в свободное время?

Почему вам нравится ваш друг?

社会に開かれたロシア語教育の確立：
地域貢献のためのロシア語学習
カリキュラム・マネジメントと学習評価
高大接続
事業成果最終報告書

研究代表者 横井幸子（大阪大学言語文化研究科）
2019年3月31日発行
編集発行 大阪大学言語文化研究科 横井幸子研究室
〒562-8558 箕面市栗生間谷東 8-1-1
印刷所 遊文舎